

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編
自天保十一年
至同十二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数八十四枚）」の記載あり〕

目録

安田助左衛門日記

御徒方萬年記百十鈔

高島流秘卷

高島四郎太夫其他連類所刊ノ報

〔家齊公薨去記事〕

水野越前守忠改革布令

小十人本
多左京組
大野權之丞御仕置

越前守殿御書取

越前守殿御渡

高家衆へ達書

幕府非常節儉ヲ令ス

田米ノ令

幕府節儉令

水野越前守殿ヨリ町奉行へ御渡御書付

京都町触

女髮結ニ関スル令

琉球人参府ニツキ拝借金

分銅改達書

三五九 安田助左衛門日記

天保十一年子三月十二日大島へ着船、代官大山彦兵衛

・同役四本八郎左衛門ニテ候、詰中至極ノ豊年、八百

万斤以上ノ出来式々年有之、其上砂糖製法別テ行届、

外島々ノ手本相成旁致精勤候段、三原藤五郎ヨリ申来

候、左候テ同寅年交代ノ管候処、翌卯春迄詰重被仰付

候、卯三月大島深山戸ヲ開田地ト成、竹山五町八反余ヲ仕立、人家式軒ヲ造リ往来ノ便利ヲナス、同五月八日帰家、

十一月二十七日晴未

一仙^{〔洞カ〕}御所崩御之御通達出日數五日之御停止ニテ候事、

三六〇 御徒方萬年記百十抄

天保十一年十二月二十五日 松平溪山

御統柄ニ付格別之思召ヲ以テ、正四位上名代

松平大隅守

右御白書院ニ於テ御老中列座、大田備中守申渡之、

三六一 高島流秘卷

「モルチール」並「ボンベン」

「モルチール」ハ「ボンヘン」ト名ツクル処ノ、ウツ

ロナル鉄丸ヲ打ツニ用ル筒ナリ、

「モルチール」ノ服中ハ、常ノ石火矢ノ通りノ円柱形

ノモノニアラス、此ヲ「シール」ト「カアムル」トノ二ツニ分チタリ、「カアムル」ハ「シール」ノ底ニアリテ火薬ヲ込ル処ナリ、

此「カアムル」ノ形ハ、砲術家者流ノ異議区々ナリ、爰ニ円柱形順逆ノ錐形又円球ナシ形ナリ、此皆其用ヲ尽サ、ル処ヲ見出シテ、円柱形ト錐形トヲ扱ヒ出セリ、之尚以テ今ニ十分ナラサレトモ、先ツハ尤可ナル者ナリ、円柱形ノ薬持ヲ拵ヘタル「モルチール」ノ下ノ方ニ、恰モ「ボンベン」ノハマル様ニ半球ノ形ニ切マロメタリ、

今一ツノ切チ、メタル錐形ノ「カアムル」持チタル方ニハ、此ニ段別々ナレトモ、ワキ立スシテ「カアムル」ト「シール」ト連リタリ、今此ノ細工ノ妙ニ由テ「ボンベン」カ「シール」ニ能ク^{〔嵌カ〕}嵌リ空隙ナク打薬ヨリホドバシリ出ル弾力有ル所ノ游氣、其力ヲ「ボンベン」ニカクル事ナク、能ク遁ル、処ノ隙間ヲ逃サ、ルノ理アレバナリ、

此害別ノ「モルチール」ニ於テハ、動モスレハアリタ

ガル処ナリ、

此「カアムル」ノ細工ハ、妙ニ此上ニ又小形ノ「ボンベン」モ、矢張り此「モルチール」ヨリ打出サル、ノ利アリ、然レトモ円柱形ノ「カアムル」ヲ持チタル「モルチール」ハ、小薬ニテ遠町ニ到ルコトヲ打試シテ知リタリ、大薬ニテハ却テ目立程ノ違ヲ見サルナリ、
「ボンベン」ハウツロナル鉄丸ナリ、定レル分量ノ薬ヲ込テ之ヲ吹ハラセテ、其落掛ル処ノ家蔵等ヲ打碎キ、且ツ火ヲ付ル為ニ宜シ、

「ボンベン」ハ、此ヲ筒ニ込ルトキノ為ニ二ツノ耳アリ、但シ十六「ホンデン、ステーン」ノ少ナル「モルチール」ノ「ボンベン」ハ只一ツ耳アリ、又火薬並ニ他ノ焼玉等ヲ入レ、且又「ボイス」道火ヲ通スル為ニ設クル処ノ眼ト名ツクル穴ヲ備ヘタリ、

「ボンベン」ハ下ノ方ノ地金上ノ方ヨリ少シク厚シ、是ハ其丸ノ飛フ内ニ道火ノ方上ニナリテ、吹き切ルノ恐ヲ受サル為ナリ、

和蘭国ニ於テ常ニ用ル処ノ「モルチール」ハ、当時ハ

只五十「ホンデン、ステーン」並ニ十六「ホンデン、ステーン」ノミナリ、又別ニ「ステーン、モルチール」トテ石丸ヲ打ツ者ハ、百「ホンデン、ステーン」ノモノアリ、五十「ホンデン、ステーン」、十六「ホンデン、ステーン」ノ「モルチール」ハ「ボンベン」ヲ打ツ為ニ用ヒ、「ステーン、モルチール」ハ只石彈ノミヲ打ツニ用ユ、此事ハ次ニ詳記ス、

和蘭国ニ於テ常ニ用ル「ボンベン」ハ左ノ如シ、

十一「ドイム」・九「レイム」ノ「ボンベン」ハ、能ク十四「ボンド」ノ薬ヲ込テ総重凡ソ百五十「ポント」アリ、十「ドイム」ノ「ボンベン」ハ凡ソ八「ポント」ノ薬ヲ込テ百「ポント」許リカ、ル、八「ドイム」・二「レイシ」ノ「ボンベン」ハ能ク四「ポント」ノ薬ヲ込テ四十「ポント」ノ重サアリ、

昔時佛蘭西国ニ於テ甚タ大ナル「モルチール」ヲ用ヒタリ、然レトモ其「ボンベン」並ニ「モルチール」ノ重サトノ仰山ナルト、運用ノ大ナル雜費ヲ厭ヒテ廃棄セリトソ、和蘭国ニ於テモ七十五「ポント」ノ「ステ

ーン、モルチール」アリシカトモ、今ハ新ニ製造スル
事ナシ、「モルチール」ハ車台ノ代ニ「スツール」ト
名ツクル架ニ置ク、此ハ据ヘ台ナリ、車台ニアラス、
木ニテ造リ今ハ鑄鉄ヲ以テ造ル、

「ボンベン」ニ薬込様ノ事

薬込ミスベキ「ボンベン」ハ、先ツ能ク細密ニ少シノ
穴ニテモ有ルヤ否ヤヲ吟味シ、又鑄ヲヨクカキ落シ、
「ボンベン」ニ詰ントスル処ノ薬ヲ定メ、分量ニ掛ケ
改メ、漏戸ヲ以テ「ボンベン」中ニ納レ、次ニ道火ノ
末ヲハスニ切り定ノ長サニシテ切ルヘシ、道火ノ長サ
ハ「ボンベン」ノ落ルトキカ又ハ落チタルト直ニ吹割
ル様ニスヘシ、此時刻ニ中ル事ハ容易ナラス、依テ群
集ノ中ニ打掛ルトキハ、地上二三尺ナルトキニ吹キ破
ル、モ悪シカラス、人ノ遁走ルノ隙ナキニ由テナリ、
道火ヲ切りタル上ハ、之ヲ能ク「ボンベン」ノ眼中ニ
ハメン為ニ巻キモノヲナス、眼ニハメタル上ハ道火ヲ
直ニ打込ス、此道火ノ管ヲホツラサ、ル為ナリ、然モ
爰ニ木ノ栓ヲ置テ、其後ニ彼ノ木ノ槌ヲ以テ、凡一

ドイム」ノ長サ外へ出残ル迄ニ打込ム、次ニ道火ノ出
残リタル処並ニ「ボンベン」ノ眼ノアタリニ、「チャ
ン」ノドロケタルモノニ浸シ込ム、此ハ眼ト道火トノ
間ニ、若シ聊ノ隙アルトモ如此シテ塞カン為ナリ、道
火ト眼トノ間ニ若シ少シノ空隙アルトキハ、「ボンベ
ン」カ「モルチール」ヲ出、離レサル先ニ吹キ破レル
ナリ、由テ薬込スル前ニ其検査ヲ綿密ニシ、其後ニ右
ノ箇条ノ如ク、能キ加減ニスル事肝要ナリ、

「ハント、ガラナード」ト云柘榴玉ノ込方モ此ニ同ジ、
但シ彼ハトロケタル「チャン」ニマルナカラ入レテ、

其後ニ鋸屑或ハ麦スカ等【ヌカ】マロマス事ト違フナリ、

「ボンベン」ニ「ゲズモルテン・トイク」ト云フ燒玉
ヲ込ムルトキハ、此薬剤ヲ「ボンベン」ノ眼ヨリ納ル
丈ケノ大サニ造ル、

和蘭国ノ五十「ボンテンステーン」ノ「ボンベン」ハ
能ク八「ボント」ノ薬ヲ込テ、家蔵等ニ火ヲ付ント欲
スルトキハ、此ニ片々ノ火薬又ハ「ゲズモルテン、ド
イク」ヲ込ムヘシ、

「ボンベン」ヲ以テ火薬庫等ニ火ヲ付ケ、又ハ高矢位ヲ以テ敵ノ台場ニ打掛ケ、其「ベッチング」台場ヲ碎キ、或ハ「ホルスト、ウエルキング」
竹ヲ以テ束ネ造ル竹タバノ如キ台場ヲ碎ント欲スルトキニ、此「ボンベン」ニ只火薬ノミヲ込ムヘシ、

「ボンベン」ヲ以テ、只細々ニ吹割ラセテ敵ヲ破ルカ、亦石火矢台ナトヲ毀ントスルトキハ、五十「ポント」、ステーン」ノ「ボンベン」ニ四「ポント」ノ薬ヲ込メ彼コマ、ニ研ル事ハ小薬ニテ討試ミタリ、十六「ポント」、ステーン」ノ「ボンベン」ニ二「ポント」ノ薬ヲ込ル事ヲ試得タリ、「ボンベン」ハ如此種々ノ趣向ニテ打チ、又誥方詰方モ種々有リ、火道ノ長サモ種々ニ切ルヘキニ由テ、台場上ニテ此込メ方ヲ為ス事肝要ナリ、種々ノ込方ニテ先ニ用意シタル「ボンベン」ハ動モスレハ混雜ヲ起スニ依テ也、切縮メラレタル処ノ種々ノ長サニ由テ、彼同様ニ出残ルトキハ此混雜限リナシ、

「モルチール」ニ討薬込方且仕掛ノ事

「モルチール」ハ薬込スル前ニ仕掛ヲナス、彼ハ石火

矢ノ如クニ仕掛ル事能ハス、此ニ甚シキ高矢位ヲ以テ打ツ、「モルチール」ヲ仕掛ルニハ、「ユイトテレグ」並「エレバチー」ノ二タ通りノ仕掛アリ台ノ中ヲ得ルヲ「ユイトテレグ」ト云、台板筒尻ノ跡高下宜、「ユイトテレグ」シヲ「エレバチー」ト云フトハ下条ノ助ヲ以テ仕掛ク、下条トハ端ニ鉄砲ノ玉ノ様ナル細ク重キ物ヲ結ヒ付ル絹糸ヲ以テ仕掛セントスル、人此下ケ糸ヲ以テ身ヲ「モルチール」ノ跡ニ置キ、「モルチール」ノ巢中ノ位ト的トスル処ノ者ト能ク合迄手子ヲ以テ正準スベシ、

「エレバチー」トハ矢位ノ事ヲ云、此ハ象眼儀ヲ用ユ、其法ハ象眼儀ヲ身ノ上面ニ置キ、「モルチール」ノ筒口ニ突込手子ニテ上下高低スルニ、求ル処ノ矢位象眼儀ニ頭ル、而テ「モルチール」矢位ヲ得タルトキニ、「ステルポート」ヲ下ニ差込ミ、新制ノ「モルチール」ニテハ「リクトマシネ」ヲ用ルナリ、初ノ種々ノ「モルチール」ノ坐板ノ上ニ小刀ヲ以テ筋ヲ付ケ、是ニテ一打二打シタルノチ入念又此筋ニ合ス、「ボンベン」ガ表裏ニ切ル、事ノ知レタル後、此後又筋ヲヨキ加

滅ニ直シ、扱能ケヅリタル木ノ小割ヲ以テ右直セシ筋ニ打付、之ヲ後放発ノ目印トス、「モルチール」如此仕掛タル上ニテ、葉込ハ分量ト手トヲ薬持ニ入テ少シ搗固シ、「ボンベン」ハ外面ノ土砂ヲ能ク払除キ後ニ能ク合シテ、「ボンベン」ノ耳金ノアルヘキ処ニ居ル様ニス、此ハ耳金ニツアルモノノ事ナリ、只一ツノモノハ片ヨラス様ニスヘシ、道火カ巢中ノ軸ト合タルトキハ測量器ヲ以テスヘシ、其後ニ今一度上下左右ノ仕掛ヲ象眼儀並下糸ヲ以テ吟味スヘシ、其後道火ノホンヲ小刀ニテ大事ニ切りホドキテ、早道火繩ヲ引キ出シ終ニ「ボンベン」ノ前面ニ粉薬ヲフリ掛ケルヘシ、此ハ打薬ヨリ火道火ニ伝ル為ナリ、其後ニ筒ノ火門ニ早道ヲ差テ放発スヘシ、

五十「ボンテン、ステーン」ノ「モルチール」ハ打手一人ト手伝四人ヲ用ユ、十六「ボンテン、ステーン」ノ「モルチール」ハ打手一人ト手伝二人ナリ、

「モルチール」ヲ「ボンバルテユンボウデン」ト云船ノ内ニテ用フヘキニハ、此ヲ綿密ニ仕掛ルヲ要ス、船

ノ動かサルヲ緊要トスヘシ、

「モルチール」ヲ的ノ見ヘヌ様ニ土手ノ後口ニ仕掛ルニハ、土手ノ上ニ目的ノ筋ヲ立タル二本ノ立木ヲ以テ助ヲ得テ仕掛ヲナス、然シテ「モルチール」ニ於テ打出スモノハ、「ボンベン」ノ外ニ尚別ノモノアリ、此ハ「ブラドコーゲル」玉燒・「リクトコーゲル」玉光・「スピーゲルガラナード」鏡板付ノ並ニ石ナリ、此ケ条ニ付テハ後ニ云フベシ、

「ブランド、コーゲル」ト「リクトコーゲル」ハ消ス事ノナリ難キ燒薬ニテ造リタル玉ナリ、

「ブランド、コーゲル」ハ、家或ハ火薬庫等ニ火ヲ掛シカ為ニ用ル為ノ者ニシテ、「リクトコーゲル」ハ夜中ニ敵陣ノ様子ヲ照シ見テ其動靜ヲ窺ヒ、然シテ石火矢等ヲ以テ攻撃セン為ニスルモノナリ、此ニツノモノヲ拵ヘタル所以ハ後ニ詳記スヘシ、此玉ヲ打ツノトキニハ、「モルチール」ニテ「ボンベン」ヲ打ツ如ク「モルチール」ニ葉込シ、且仕掛ケタル後ニ「ブランドコーゲル」・「リクトコーゲル」ノ早火繩ノ覆ヲハギ

取り早火道ヲ引出シ、玉ヲ「モルチール」ニ納メ、次ニ「ボンベン」ノ如ク粉薬ヲ振掛ル事ノミヲ云フ、然レトモ此ヲ打ツトキニハ「ボンベン」ノ通り細カナルの中ヲ願フヘカラス、此ハフナリニシテ且ツ其質輕キニ依テナリ、「スピーゲルガラナード」ハ、「モルチール」ヨリ打出ストキハ右同様ニ心得ベシ、薬込ノ上ニ恰モ「モルチール」ニハマリテ、数々ノ穴ヲ穿チタル本ノ鏡ヲ置キ、此ハ薬持ヨリ「ガラナード」ニ火ヲ伝フル為ナリ、

「ガラナード」ノ道火ノ軸ト巢中ノ軸ト平均スル様ニ鏡ノ上ナラビヲ能クス、右如クシテ道火ノホシヲ切りホドキテ粉薬ヲ振り掛クベシ、

又「スピーゲルガラナード」ヲ吹き割ルニハ、此ニ三「ロート」ノ薬ヲ込ル、

石ヲ打ツトキハ左ノ通り心得ベシ、「モルチール」ニ薬込シ且仕掛タル上石ヲ籠テ入テ、「モルチール」ニ其籠ハ「モルチール」ノロト同シ経ニナルベシ、打方ニ用ル石ハ輕トモ五六「ポイント」ノ重サアルベシ、輕

ケレハ敵ニ害ヲナス事少シ、円形ノモノ別テ宜シ、板底ニ組付ケタル籠ハ鏡板ヲ用ルニ及ハス、依之尤モ弁別ナリ、

石ヲ「モルチール」ノロノ上ニツキ出スヘカラス、ロヨリ出ハ動モスレハ台揚ノ上ニ近ク落ツベシ、

石ヲ五十「ポイント」ノ「ステーン、モルチール」ヨリ放発スル事ヲ得ルトモ、元来此為ニ設ケタル百「ポイントン、ステーン」ノ「モルチール」アリ、此ハ「ボンベン」打ツ筒ニアラス、

此ハ十五「ドイム」ノ口径アルニ依テ、余程ノ石ヲ打ツニ能クタクユル者也、此法ニテハ身金ノ火力ヲ受ル事少キ故ニ他ノ筒ヨリハ薄シ、石不足ノトキハ三「ポイント」ノ玉ヲモ用フベシ、「ステーン、モルチール」ハ四十五度ヨリ矢位ニ仕掛ル外ハナシ、依之此ヲ取扱フノ人数ハ五十「ポイントン」ノ「ステーン、モルチール」ニ同シ、則チ小頭一人ニ手伝四人ナリ、

石ヲ打ツ事モ、「スピーゲル、ガラナード」ヲ打ツ事モ只籠城ト攻城トノミナリ、籠城ノトキハ敵堀等ヨリ

城ニ近ツキタルトキ、又ハ彼矢狭ヲ覬ヒ鉄砲ヲ打詰〔詰カ〕トスルニ大功アリ、右同様ニ攻城ノトキハ襲ワント欲スルトキノ為ニス、又追ヒ出ストキノ為ニモ多ノ利アリ、石並ニ「ガラナード」ハ已ニ飛散スルニ依テ仕掛ニ格別念入ニ及ハス、此ヲ打初ムヘキ遠サハ凡ソ三百七十五「パッセン」ナリ三町一反

「モルチール」矢位並葉込

「ボンベン」ノ町着ヲ細密ニ究ルニハ、此カ尽ス処ノ孤線ヲ吞込ム事ヲ明ニスヘシ、総テ直ニ空中ニ擲出スモノハ、進発力ト重力トノ所為ニテハ「バラベリクト」ト云、綿密ヲ尽スト度数学者此法ヲ伝授シテ、夫カ拋出サル、処ノ力ト矢位ニ付テ物ノ下着ノ遠近ヲ勘定ス、

「ブロンデル」並「ベリトル」ト云人ハ、「バラホク」工夫ヲ以テ勘定セリ、然レトモ火薬「ボンベン」ニ与フルカ、則其モノ、始発ノ早力一々ニ分ラス、由テ彼ノ十五度ノ矢位ヲ以テ得タル処ノ町着ヲ規則ニシタリ、此余ハ尽ク導火ノ為ス処ナリ、

然レトモ総テ其只真中ニテノミ「バラベリ」ヲ尽ス、若シ風氣ノ中ニ動テ其モノ此ヨリ遮ラル、トキハ、則此法全クシテ、爰ニ元付ル工夫砲術ノ諸書ニ記シタルモノ全ク不用トナル事ヲ場数ノ功者教ヘタリ、人力ニテ拋出スモノヘ町着ヲ勘定スルニ、風氣ノ支ルヲ目安ニ入ル位ニハ已ニ上達シタリ、求得タル勘定高モ実事ニ掛タルト合事カ、如何入り組タル勘定ニテハ随分ナル位ニ至レリ、然レトモ情考フルニ皆ケ条ノ勘定ハ、假令ハ実ニ符合ストモ業ニ於テハ全ク不用ナリ、如何ナル小頭カ算術ノ奥儀ニ達シタリトモ、台場ニ於テ如此入組タル勘定スルニモ隙ヲ得ヘキヤ、彼工夫ヲ一向ニ知ラスシテ、随分綿密ニ其發明ニ付キテ、「ボンベン」ヲ打処ノモノ、眼ニ笑ヲナサ、ランヤ、場数ノ巧者カ教ニハ、勘定シタル処ノ丁着ハ手ニ掛ケ試得タル処ヨリ甚大ナリ、勘定ニスレハ十町ニ至レトモ葉込ニテハサワ参ラン、「ボンベン」風氣ノ邪魔ニ依テ縮ル故ナリ、

勘定ニテハ十五度ノ矢位ニテ放ス処ノ遠サハ、四十五

度ニテ放ツ処ノ半分ニ着クヘシ、右ノ如ク四十五度ノ矢位カ第一ニ遠丁ニ着テ、四十五度ト上下ノ度数同シケレハ、上下町着モ同シカルヘキナリ、然レトモ此カ決シテ其通ニハアラス、四十五度ヨリ下ノ矢位カ、其同シ度数ノ上ノ矢位ニテ打処ヨリハ遠キ事ヲ着キタリ、扱又最上ニ遠キ町ヲ四十五度ニテ発ス、夫ヨリ少シ下ケテ四十度程ニテノ矢位ニテ之ヲ得ルト場数ノ功者云ヘリ、此処ヨリ考レハ場数ノ功者カ能ク手際ヲ以テ「ボンベン」ヲ打ツ為ノ太切ノ法アリ、如此事多端ニ記セハ、彼是ト順スレハ諸ノ場数ノアル砲術者ハ皆同意ナリ、

「ボンベン」ヲ打ツ為ノ「バラホリー」ノ工夫ハ格別ノ事ニテ、学校ニ於テモ妙ナル工夫トモテハヤサル、然レトモ業ナクテハ無用ノ事ナリ、依之和蘭國ニ於テハ此事ヲ記シテ「ボンベン」ヲ打ツノ發明ニ付テ云フノ事ニ遷ラン、

五十「ボンテン、ステーン」ノ「モルチール」並ニ十六「ポント」ノ「ステーン」ノ「モルチール」ヲ以テ

試放ニテ町着ヲ勘定シタリ、本手ノ打方モセンニハ的ト離ル、処ノ遠サヲモ知ラサレハ叶ワス、隙アラハ則チ量器ヲ以テ此ヲ極ム、若シ然ラサルトキニハ其位ヲ推量スル事肝要トス、

遠近ノ程知レタル上ハ、放サント欲スル処ノ矢位ヲ定メ、イツモ大概ノ四十五度ノ矢位ヲ求ム、此ハ同シ薬ノ分量ニテ凡至極ノ遠丁ニ着ク、扱狂ヲ受ル事少ナキニ依テナリ、然レトモ火薬庫ヲ碎キ高処ヲ碎ントスルニハ、五十度ヨリ六十度迄ノ矢位ヲ用ユ、併シ此時ニハ五十「ポント」ノ「ステーン、モルチール」ヲ用ユヘシ、群衆ノ中ニ打ツニハ三十度ヨリ四十五度迄ノ矢位ヲ宜シトス、大矢位ニ於テハ「ボンベン」カホイ込テ業ヲ為ス事少キ故ナリ、

三十度以下ノ矢位ヲ用ル事ハ稀ナリ、若シ用ルトキハ只十六「ボンテン」ノ「ステーン、モルチール」ノミヲ用ユ、如此小矢位ヲ以テ打ント欲スルトキハ、「ホイイツスル」ヲ用ル方便ナリ、六十度ヨリ大ナル矢位ニテハ容易ク打タス、若シ打ンニハ町数ノ短キ時ナ

リ、扱其矢位常並ニシテ小薬ヲ用フヘシ、高矢位ニテハ台並ニ地板甚痛ムニ由テナリ、矢位ヲ極メタル上ハ相応ノ薬ノ分量ヲ求メ「ボンベン」カ行過レハ少シ減シ、又不及トキハ少シ増シ、同薬量同矢位ニテ至極入念テ、打処ノ町着大ナル違ノ顯ル、ニ付テモ、此ハ左ノ事ニ係ルト目ノ真ニ持ツトキハアヤシミヲ為ス事ナシ、

天氣ノ變態欵了着ニ違ヲ為ス事ナシ、又濕氣ノアル欵必ス薬力ノ減スルノミナラス、シカモ濃氣游氣「ボンベン」ニサワリヲナス事ハ、游氣ノ薄キヨリ甚シ、暖氣ノ加減ノ違右ト同シク了着ニ變ヲ起ス、朝ノ了着ハ日中ヨリ短ク、日中ハ游氣太陽ノ熱ニ依テフクレミツルナリ、此事別テ夏分ニ甚シ、

風ノ模様

薬ノ善惡 此薬ハ彼ヨリモ宜シク又ハ惡シト云フ事ナリ

「モルチール」台並地板ノ具合

「ボンベン」ノ具合、此ハソコノ地金厚ミヲ持ヲ宜シトス、

玉合ノ不同 此ハ元來掛目ノ不同ヨリ生ス

台場ニ於テ打初ル処ノ「ボンベン」ヲ一々ニ掛ケ改メ其大小ヲ吟味スル位ハ随分ナラン、「ボンベン」ニ物ヲ詰メ道火ヲヨク加減シテ其長サニ切ル事、並ニ時トシテ一ツノ桶ニテモ中ノ方ノ薬ハ端ノ方ヨリ宜シナト云フ事ニアリ、由テ一ツ箱ノ薬モ一々ヨク交合スルモ成丈ケハ台場ニ於テナスヘシ、

一ツノ都邑ニテモ打シ為ニ究メタル「ボンベン」ハ、此ヲ放シニハ格別ノ入念ニモ及ハス、此ハ当テント欲スル処ノ的カ十分ニ広キニ由テナリ、此ニ於テ敵舟ニ打掛ントキハ大事ノ上ニモ大事ニスベシ、此ハ的ノクルイ易ク動モスレハ、「ボンベン」全ク無用ノモノトナルニ由テナリ、

「モルチール」ノ台場ニ備ベキ要具

- 一 ボシ柄ニ熊手ノ付キタルサラへ一本
- 一 津幾棒
- 一 齒ノ付キタル手子四本 十六「ボンテン」ステーンモルチールニハ二本
- 一 小出薬桶並薬櫛

一針差並針

一早道火トペイブトペイブ

一口薬入

一火繩

一釣棒十六二本「ボンデンステーン
モルチール」ニハ不用

一鉄刀一ツ

一小刀一本

一象眼鏡一ツ

一下ケ鉛一ツ

一皮二枚砲砲孔ヲヲ用

右ノ外、薬込シタル「ボンベン」並ニ其掩「ボンベ

ン」ヲ台場ニ於テ「詰カ」誦ルトキハ、右ノ外又明カラノ「

ボンベン」ヲ数々

一道火数々

一木ノ槌一本道火ヲ打込
為ノ木槌

一漏戸

一道火ヲ巻立ルモノ少シ

道火ノ長サヲ定ル事

絹糸ノ端ニ細キ重リヲ結付ケタル「セキエンデ、スリ
ンゲル」ヲ用フ、

糸ノ長サハ付元ヨリ玉ノ先キ迄三十八「ドイム」アル

ヘシ日本ノ三尺
二寸余、但シ「レインランツ」ノ尺ニテノ、此

ノ「スリンゲル」ヲ凡ソ十度位ノ弓ヲ尽ス様ニ振ル、

此カ一秒ニ一振りスル下ケ振りナリ、此法ヲ以テ「ボ
ンベン」幾秒ノ間ニ下ルヲ考フベシ、

右ト同時ニ「ドイム」毎ニ穴ヲ明ケタル道火ヲ取テ

火ヲ付ケ、右ノ「セキエンデ、スリンゲル」ノ助ヲ以

テ、此カ是ノ高サ幾秒ニ燃へ出ルヲ吟味スヘシ、右ヲ

記シテ「ボンベン」カ幾秒ニ下ルト知レハ其道火ヲ切

ル、然レトモ此ニ於テ道火ハ常ノ時ヨリモ飛フトキハ、

久シクカ、リテ燃ルト云フ事ニ氣ヲ付クベシ、

道火ハ常ニハスニ切ルヘシ、此ハ発薬ニ火移リ均力モ

弘クシテ、且ツ長キ時モ「ボンベン」ノ底ニ衝キツマ

ラスナリ、五十「ボンテン、ステーン」ノ道火ハ切ラ

ヌ内ニ三十秒ニ燃ル、此レ七「ドイム」ノ長サアリ、

「ボンベン」カ幾久シクカ、リテ墜ルト云フ事ヲ知レ

ハ、道火ノ長サヲ左ノ法ヲ以テ定ムヘシ、

仮令ヘハ「ボンベン」カ十八秒ニテ墜ルトキハ、則チ左ノ比例ヲ用フベシ、

三十一秒

七「ドイム」

七「ドイム」ハ五寸九分五厘、由テ先ツ六寸ト定メ之ニ十八六ヲ掛ケ

三十ヲ以テ割レバ長ヲ知ル

十八秒

求ムル処ノ長サ

此ニ由リテ十八秒ニ七「ドイム」ヲ掛ケ、三十一秒ニテ四「ドイム」、三十一「ドイム」ノ二ヲ得ル、此則今求ル処ノ長サナリ、然ルニ道火ハ常ノ時ヨリモ飛フ内ハ早ク燃ルニ由テ、少シ長サヲ増シテ四「ドイム」半ニ切ルベシ、

「ホーイツルエル」ノ事

「ホーイツル、エル」ハ「カノン」ト「モルチール」ノ中間ノ者ナリ、「カノン」ヨリハ短ク、「モルチール」ヨリハ長シ、

「ホーイツルエル」ニ二様アリ、台場ニテハ十六「ボンテン、ステーション」ナル者ヲ用ヒ、行軍ニテハ二十四「ボンデン」ノ「エイズル」ヲ用フ「エイズル」ハ鉄玉ナリ

「ホーイツルエル」ハ「モルチール」ト同シ趣意ノ場

ニ用フ、此ヨリ打出スモノハ「ゲレナード」ト名付ル

玉ニテ、「ボンベン」同様ニ火薬ヲ詰詰カメタル者ナリ、

台ハ石火矢ト同シ車台ナリ、小矢位ニテ放ツ、此ハ「

モルチール」ヨリモ優レル利アリ、則チ地ノ湿氣アル

処カ、又ハアバケサルトキニ「ゲレナード」ヲ以テド

ベリ打シ、且ハ蒲瀉彈ヲ以テ手際ヨク打出ス事モ出来ルナリ、

「ホーイツルエル」ヲ用ルトキハ二通ノ法アリ、第一ニハ台場ニテハ打手一人ト手伝三人ナリ、込方仕掛ハ「モルチール」同様ニテ放ツ、第二ニハ行軍法ニ用ルトキ此ヲ常ノ行軍砲ト同様ニシ、人数モ夫ト同シ、但シ行軍砲ニハ二十四「ボンテン」ノ「エイズル」ノミヲ用フ、

台場ニ於テハ大概乱レ業ヲ用ユ、遠近ニ從テ加減ス、宜ニ適シ為ナリ、行軍又ハ舟中ニテハ此事行レ難シ、其時ハ一「ボンテ」ノ薬袋ヲ造ル、行軍モ舟中ニテモ右ノ如ク薬ノ分量ヲ究メタルトキハ、只矢位ニテ高下

シ玉着ノ遠近ニ届クヘシ、「ホウイッスル」「エル」ハ「ブリツキトース」石火矢ノ通り大ト小ト二通りニ分ツ、

二十四「ポント」ノ「エイズルホーイッスル」ニハ

大ニハ「ポント」ノ四分ノ玉 二十八

小ニハ六「ロート」ノ玉 百

十六「ポント」ノ「ステーンホーイッスル」ニハ

大ニハ二「ポント」ノ玉 二十

小ニハ半「ポント」ノ玉 七十七

二十四「ポント」ノ「エイズルホーイッスル」ハ「ポント」ノ薬ヲ込、「ホーイッスル」ニテ平面ニ於テ打始ムヘキヨリ、町数ハ千六百「バツス」或ハ二千「バツス」ナリ、

「ホーイッスル」ノ台場ノ要具ハ「モルチール」ト同シ、

「ホーイッスル」ノ十六「ポント」ノ砲、其重サ「アムストルダム」ノ量目ニシテ千六十「ポント」、又ハ千六十五「ポント」アリ、二十四「ポント」

ン」ノ筒ハ六百八十「ポント」アリ、

「ゲスウインドベイピース」

昔時ハ小薬ヲ口薬ニ用ヒタリ、「ゲスウインドベイプ」ヲ用ル事ハ打方ニ目立程ノ速効アリ、其拵方ハ後ニ出セリ、

一枚ノ常ノ彼ノ書記紙ヲ長サニ從テ折レハ、此管二十ニ出来ル、紙ヲ切りタル上少シ打チナラシ、後ニ巻軸ニ巻キ少シ粉ヲ付テホドケルヲ防クベシ、

次ニ此ヲ能ク乾シテ、後ニセマキ紙ニテ帯シ巻キ立ツ、此ヲ打込ノ用ナリ、扱焼酒ニテシメタル粉薬ヲ振り、其後ニ末ツ方ニ苧クツヲ冠ス、其苧クツヲ冠スルハ後ニ付ル、

此ノ「ベイピー」ヲ造ル道具ハ

一直針ノ立チタル台 一ツ

一銅ノクボミタル枺 一ツ

一木槌 一ツ

一卷ク軸 一ツ

「シュントルス」

「シユントルス」ハ筒ニ火ヲ点スルノ用、此ニテ口薬又ハ「ゲズウインド」カ火繩ヨリモ速ニ火ヲ受ルニ由テ石火矢ノ便利トス、此ハ行軍砲ニ大ニ宜シ、舟戦ニハ用ヒサルナリ、

此ヲ製スル藥劑ハ

硝石 十六分

硫黃 九分

粉藥 四分

管一ツ分ノ藥ニ「レインオーリー」二滴ヲ加ヘ調合ス
硫ト硝トハ皆能ク和スル様ニ始ヨリ此ヲ合セ、後ニ粉藥ヲ加ヘテ又能ク交セ、終ニ「レインオーリー」ヲ滴シ、後モ交テ堅ムベシ、

一枚ノ書記紙其厚サ四ツ、薄キハ三ツ出来ル紙ハ短方ニ付テ折タ、ムヘシ、

「ゲスウインド、ロンド」

先ツ大工ニワクヲ造ラセ、其長サ四尺八九寸・幅四尺・骨ノ幅一寸七分許リ其厚サ九分ニスヘシ、次ニ不同ナクチ、マナキ木綿糸ヲ五巻取り、此糸ヲ一ツツ、余

リ堅クナキ様ニ合セ、此ヲ左ノ藥劑ノ中ニ四半時許リノ間ホトハカスヘシ、

百三十目ノ粉藥一「ヒント」^{三百一}ノ燒酒ノ花毛八匁

ノトロケタル「アラビヤゴム」^{十目}ニ八匁ノ樟腦、右ノ藥

劑麥ノ粉菓子ノ地ノ様ナル煉リ餅位ノ加減ニシテ、糸

ヲ此中ニ納レ置後取出シ、ワクニ掛テ乾スベシ、又略

法ハ不同ナキ木綿糸ヲ燒酒ニ浸シ置キ、此ニ粉藥ヲヌ

リ付テ乾シ用ルモ可ナリ、

道火ノ藥劑

二十九「ドイム」ノモノニハ

硝石 四分

硫 二分

粉藥 八分

二十「ドイム」ノモノニハ十五「ドイム」モ同シ、

硝石 四分

硫 二分

粉藥 七分

此ヨリ小ナルモノニハ

硝石 四分

硫 二分

粉薬 六分

「フルキット」ノ薬剂

チャン 三分

黄蠟 二分

ヘット 五厘

松脂 一分

「ブランドコーゲル」ノ薬剂

薬研ノ合薬二十七分

チャン 十分

硝 三分

硫 二分

蠟 二分

苧ササ 一分ノ四ノ三

「リクトコーゲル」ノ薬剂

硝 十六分

硫 六分

粉薬 二分

アンチモニーム一分

蠟 二分

松脂 二分

「ボンベン」ヲ以テ光玉・焼玉ノ代リニ用ントスルニ
ハ、左ノ薬剂ヲ込ム、

「ゲズモルテン、ドイク」ノ薬剂

硝 二分

硫 二分

アンチモニー五厘

右先ツ硫黄ヲトラカシ、其後ニ硝石ト「アンチ」等ヲ
加フ、此剂ニ泡立始ルトキ能ク交合セ、冷ヘザル中ニ

「ボンベン」中ニ込ムヘシ、

「ボンベン」ニ通ル程ノ棒ヲ造リ、此ヲ右ノ「ボンベ

ン」ニ突キ込ミ剂ノ冷ヘタルトキニ此棒ヲ抜キ取り、

此穴ヲ火道ヲ仕掛ル処トス、

此ヲ以テ焼討セントスルトキハ、「ボンベン」ニ此ノ

「ゲズモルテンドイク」ヲ碎キ込ムヘシ、此ヲ碎クニ

ハ「ゲズモルテン」ノ未タ暖カナル中ニ手拭ノ如キモノヲ移シテ、此ヲ絞ルヘシ、

如此スレハ冷ヘタル後ニ碎テ宜シ、

之ヲ焼酒ト樟腦トノ内ニ納レ置ク事、暫時ニシテ此ニ

粉薬ヲマブラシテ「ボンベン」ニ込ムヘシ、

此ノ「ボンベン」ハ「リクトコーゲル、ブランドコー

ゲル」ヨリモ勝テ功力アリ、之ハ其持前ノ重サモ増リ

テ形ノ丸キニ由レハナリ、

右因御執心令相伝モノ也、

天保庚子蠟月日天保十一年

皇国大砲開基

高島四郎太夫

茂敦花押

鳥居平七殿

此一冊、嘉永元年 戊申正月十五日、大砲免許ヲ得テ成
田正右衛門殿ヨリ本書ヲ以騰写シ、子孫ニ伝ベキ趣ナ

リ、

戊申正月廿八日 市來政和

三六二 高島四郎太夫其他連類所刑ノ報

長崎奉行支配諸組与力格・長崎会所調役頭取高島四郎太夫最前於長崎表御吟味有之、去年月江戸表へ下着相成、依之追々右一件ノ者トモ御吟味中、揚屋或ハ牢舎宿預等被仰付、

四郎太夫ハ市橋下總守へ御預ケニ相成ル、

町奉行跡部能登守、組与力原鶴圓門己七・同組与力佐

久間健三郎七六御呼出、一通リ尋ノ上召連人へ預ケ遣

ス、

同四日、甲府勝手小普請酒井安房守支配演中三左衛門

・同淺野中務少輔支配石河疇之丞此兩人ノ者、鳥居甲

斐守悪事ヲ勤番支配へ申立候ニ付、御下知ノ上二月二

十日江戸着、右御呼出御吟味中揚屋入、

同十六日、小普請組松平美作守支配金田啓三郎・天文

方助左衛門悴澁川六藏御呼出揚屋入、

同十九日、鳥居甲斐守元家来本庄茂平次四十、生国肥前長崎於テ罪ヲ犯シ江戸表へ出府、甲斐守家来ニ相履ヒ、其後故有テ退身、甲斐守腹臣ノ者故所々御尋於長州召捕、三月二十七日江戸表へ召連来ル、依之森佐渡守へ御預ケ相成候（長崎報知）、

高島新式砲術ヲ学ヒシ来歴

文明東漸
吏鈔

高島四郎太夫ハ、少壮ヨリ火枝〔技カ〕ニ志シ、之ニ関スル書籍・器械ハ悉ク阿蘭ニ購求シ、訳士ヲ集メテ其術ヲ研究シ略ホ發明スル所アリ、会マ蘭人デヒレニ〔技カ〕ユ一長崎ニ来ル、其人屢々戦地ヲ経歴シテ頗ル火枝〔技カ〕ニ精シト聞キ、從テ其術ヲ講究シ、遂ニ秘訣ヲ極メ業成ルニ及ンテ、日本ノ兵器ハ今日ニ用ユ可ラサルヲ痛論シ、専ラ泰西ノ火術ヲ主張ス、高島識見超邁、常ニ外人ニ接スルヲ以テ殊ニ外情ニ熟ス、英清ノ戦争起ルニ及ヒ、蘭人ノ長崎ニ来ル者アルコトニ意ヲ留メテ、其戦況ヲ探リ、遂ニ長崎奉行ニ由リテ幕府ニ訴ヘテ曰ク、英兵ノ常ニ勝ヲ得テ、支那兵ノ常ニ敗ヲ取ルハ、全ク兵器ノ

精ト否トニ由レリ、今マ我国ハ、即チ支那ト兵器ヲ同フスルモノナリ、一朝外国ト戦ヲ開ク事アラハ、猶ホ支那兵ノ敗ヲ取ルカ如キヲ免レザルベシ、日本在来ノ兵器ハ決シテ今日ノ用ニ当ラザルナリ、宜ク西洋ノ火技ヲ採用シテ、防禦ノ用ニ充テサル可ラスト、幕府已ニ我国ノ火術彼レニ及ハサルヲ知りテ、而シテ西法ヲ得ルニ苦メリ、於是乎止ムヲ得ス試ニ西洋火術ヲ用ユルノ議ヲ起セリ、天保十二年高島命ヲ受ケ大砲四挺・小銃五十挺ヲ携ヘテ江戸ニ来ル、閻老水野氏命シテ武州西台徳丸原ニ其火技ヲ演セシム、有司実見シテ始メテ其利器ナルヲ知り、頗ル之ヲ褒賞シ火術ニ限ラス凡ソ軍備ニ充ツヘキモノハ、猶ホ搜索シテ申訴スベキヲ命シ、白銀二百枚ヲ給シ与力ノ列ニ加フ、此時幕士下曾根金三郎・江川太郎左衛門高島ニ從フテ火術ヲ研究シ悉ク其秘訣ヲ受ク、是レヨリ先キ幕府高島ニ命シテ曰ク、御直參ノ内一人へ火術ヲ伝授シ右名前等届出可申、右ノ外諸家へ猥ニ伝候儀ハ仕間敷云々ト前卷ニ当時本藩ノ実ヲ双記セリ、幕府已ニ国ヲ護ルニ、西洋火技ノ必要ナルヲ知

リテ、而シテ之ヲ全国ニ用ユルヲ許サス、僅カニ幕士
中一人ヲ扱フテ之ヲ伝ヘ、其術ノ諸藩ニ播布セサルヲ
求ム、是レ已ニ日本ナル國ヲ以テ念トセス、徳川ナル
家ヲ以テ主トスルノ意ヲ見ルニ足レリ、其為ル所幾ン
ト兇戯ニ類ス、安ク其レ強寇ニ備フルノ意ナランヤ、
高島ハ長崎ニ帰ルノ後直チニ罪ヲ得テ禁錮セラレシト
云フ、

幕府ハ方サニ泰西ノ火術ニ因テ、國ヲ保護スルノ必要
ヲ悟ルモ、直チニ其法ヲ以テ全國ヲ導ク事能ハス、鳥
居甲斐（耀藏性キニ甲斐守ニ任ス）専ラ事ヲ用ヒ、正人ヲ
讒害シテ其私ヲ濟シ、永ク威福ヲ保タントスルヲ以テ、
苟モ其意ニ忤フモノアレハ、輒チ中傷シテ之ヲ排擠シ、
殊ニ西学者ノ動モスレハ頭角ヲ出サントスルヲ憂ヒ、
主トシテ之ヲ压制セン事ヲ勉メタリ、高島ノ江戸ニ在
ルヤ、常ニ鳥居ト相善カラサル江川等ト往来シ、深ク
相結納シテ又自ラ西洋家ノ一党派ヲ現出シ、隠然己レ
ニ対スルノ勢アリ、且ツ其火術ヲ江戸ニ伝ヘシヨリ、
先識有為ノ士ハ勿論、一時好奇ノ徒皆江川等ヲ推量シ、

西法火術漸ク世ニ行ハレテ益々江川等ノ勢ヲ添ヘント
スルヲ見テ鳥居頗ル不平ヲ抱キ、中ルニ法ヲ以テセン
トスルノ際、本庄茂平次ナル者長崎ヨリ至リ、鳥居ニ
訴フルニ高島ノ事ヲ以テス、初メ高島功ヲ以テ准与力
ニ進ミ長崎ニ帰り、同列福田九郎兵衛之ヲ嫉ミ党ヲ結
ンテ高島ニ抗ス、高島ノ名ハ四郎太夫、福田ノ名ハ九
郎兵衛ト云フヲ以テ四郎ノ白ト九郎ノ黒トニ取り、時
人其党ヲ呼ンテ黑白党ト称シ常ニ相軋轢セリ、本庄茂
平次ハ素ト長崎小吏ノ子ニシテ会テ高島ノ家僕タリ、
罪ヲ高島ニ得テ逃レ後チ再ヒ来リテ高島ニ説テ曰ク、
主公功業甚タ高クシテ褒賞相称ハス、願クハ貨ヲ得テ
權家ニ詣リ主公ノ為メニ説カント、高島怒テ曰ク、吾
家世々國ノ隆恩ニ浴ス、猶ホ之ヲ報スルノ浅キヲ恐ル、
安ソノ請謁ニ因リテ殊寵ヲ購ハント、之ヲ叱退ス、茂
平次遂ニ福田ニ至リ、其高島ノ下ニ屈スルヲ辱チ為メ
ニ遊説セン事ヲ陳フ、福田悦シテ之ヲ貨送ス、茂平次
乃チ東遊シテ鳥居ニ赴キ訴ヘテ曰ク、高島多ク武器ヲ
貯フ幾ント一諸侯ニ比ス高島罪ニ歸リ家産調査
書アリ、中ニ武器多シ可シ、且ツ

其門生ヲ肥後ニ遣リ盛シニ米穀ヲ購ヘリ門人池辺啓太郎ニ罹リタルハ米

教購求、是レ異図アルノ証ナリ、速カニ糾治セスンハ終

ニ大患ヲナサント、鳥居聞テ而シテ大ニ悦ヒ乃チ水野

氏ニ讒シ長崎奉行ニ命シ高島ヲ捕ヘテ獄ニ繋ク、天保

十四年三月江戸ニ檻送シ、鳥居甲斐其獄ヲ治シ認メテ

叛逆トナシ、将サニ死刑ニ処セントス、会マ有司中島

居ノ奸ヲ悪ムモノアリテ参政某ニ陳訴シタルヲ以テ、

僅カニ死ヲ免レテ追放ニ処セラレタリ、然レトモ猶ホ

嫌疑ノ存スルヲ以テ安部某ノ家ニ幽セラル、

編者曰、高島ハ天保十三年ノ冬獄ニ下リ弘化三年裁

判決落シ、後八年ヲ経テ（嘉永六年癸丑ノ年）赦サ

レテ、復タヒ幕府ニ用ヒラレ火術ヲ以テ幕士ヲ教導

シ、大ニ兵制ヲ改革シテ泰西ノ法ニ帰セシム、慶応

二年寿ヲ以テ死ス、年六十九左衛門ノ門ニ入砲術ヲ学ヒ後

塾長トナルヤ高島敷ルニ及ヒ、後江川ニ属シテ教師タリ、時ニ中

原ト交厚ク、嚮キニ讒譁ニ罹リタル願末ニ聞ヒテ記シタルモノアリ

シカ惜カ、

高島ハ遂ニ幽セラレテ其技術ヲ拡張ノ途ヲ絶タレタリ

幕府ハ勿論諸藩ニ於テ西洋火技ヲ伝習スルノ風漸ク盛
ンナルニ至レリ、当時島津侯（齋彬）ノ如キハ窃カニ蘭
人ヲ其封内ニ延キ

「編者曰」、蘭人ヲ封内ニ延キ砲術ヲ講シタルハ誤

ニテ、安政五年ノ春夏ノ間、汽船航海伝習ノ為メ幕

吏木村圖書・勝麟太郎等ノ数名、和蘭人「ハントウ

エーン」ナル者等ト来麗ノ際、公親シク面接、砲台

築造或ハ海防ノコトヲ諮問懇迎シ、而シテ其示ス処

ノ要地鷹濱内神瀬ニ大砲台ヲ建築シタルモ實ニ此ニ

起因セリ、且砲術伝習汽船製造ヲ開キタルハ、嘉永

五年ヨリ連年藩士数十名ヲ長崎ニ出シ和蘭人ニ就テ

伝習セシメラレタリ、其事実ハ嘉永ノ部ニ記スルカ

如シ、

西式ノ兵法ヲ講スル等ノ事アリ、惟フニ高島ノ徒ハ往

キニ華山（筆）・長英等カ西学ヲ主唱シテ世ヲ警醒シタル後

苟クモ知見アル者ハ稍ク其向フ所ヲ知り得タル機会ニ

乗シ、実効ヲ人ノ目前ニ示シ国家防禦急務ノ下ニ西法

ヲ唱道シタルニ由リ、俄然其勢ヲ進メタルナリ、於是

乎西学ハ兵制ノ上ヨリ邦人ノ思想ヲ制シ護国ノ点ヨリ邦人ノ必要ヲ促カセリ、^(華)華山・長英等ハ西洋諸邦ノ制度本邦ニ優ル所アルヲ論セシカ為メ、政府ハ之ヲ罰スルニ迷誤ノ二字ヲ以テセリ、而ルニ二人死亡ノ後幾年ナラスシテ、迷誤ハ二氏ノ迷誤ニ非スシテ政府ノ処置ニテ自証スルニ至レリ、

高島ノ罪ヲ得タル名義ハ、^(華)華山・長英等ト同シカラス、即チ言語文字ニ非スシテ行拳施為ニ在ルモノナリ、然レトモ其罪ヲ得タルノ実因ハ全ク相同シキモノニシテ即チ陋俗ニ安ンシテ泰西ノ学芸ニ^(抗)抗シ正人ヲ排シテ私利ヲ營スル小人ニ忌マレタルニ因ルナリ、高島ノ武器ヲ貯ヘタルハ国家ノ急務ニ応シテ其職任ヲ尽クサンカ為メノミ、其米穀ヲ購ヘルハ凶荒ニ備ヘタルニ過キス、然ルニ其国家ニ尽シ郷党ヲ恤ミタルノ美拳ハ奸徒ノ眼中ニ入りテ惡事ト變シ奸徒ニ由リテ左右セラルルノ政府ハ、国家ノ為メニ未幾ノ技芸ヲ開興セル^(功)巧勞ニ報ユルニ慘刻ナル刑罰ヲ以テセリ、言論ノ世ニ先ンスルモノ、彼レカ如ク行為ノ世ニ先ンスル者亦タ此ノ如シ、

無道ノ世ニ在リテ危言危行アル者其終ヲ善クセサル、大抵此ノ如シ、而ルニ高島カ寿ヲ以テ終ハルヲ得タルハ唯其芸術ノ当世ニ必要ナルニヨレリ、高島ハ殺ス可キモ、併セテ芸術ヲ殺サハ目下ノ急務タル外寇防禦ニ利アラサルヲ以テ、止ムヲ得ス之ヲ赦シタルノミ、是ヲ以テ嘉永ノ末年再ヒ用ヒタルモ幕府外勢ニ逼ラレテ之ニ応スルノ策ニ窮シ、外国ノ学芸必要ノ勢力ヲ社会ニ有スルヲ以テ、僅カニ奄々タル一息ヲ繋キタルノミ、尔後奉仕凡ソ十四年、功ヲ積ミ勞ヲ累ネ大ニ兵制ヲ更革シ泰西火術一流ノ祖ト称セラレタルモ闊閥ナキヲ以テ終身一小吏タルニ過キス、夫レ人識見アリ芸能アルモ、之ヲ施スノ地位ト勢力トヲ有スルニ非スンハ何レノ処ニ向テ其驥足ヲ展ルヲ得ン、然ルニ励精撓マラスンテ泰西ノ芸術ヲ誘キ、国ノ為メニ身ヲ忘レ施為スル所渺カラサリシハ、亦欽スヘク伝フ可キノ行事ト云フ可シ、

「編者曰」天保ノ中頃和蘭人ヨリ伝習シタルヲ長崎奉行ニ訴ヘタル書ト共ニ呈出シタルモノナリ、門人

山本秋村通唱清太郎ニ命シテ本邦武器沿革ヲ論シセシメ

タル書ノ大意ニ、古我国武器ノ最タルハ弓ニ外ナシ、
爰ヲ以テ武士ヲ弓矢取ル身ト呼ビ、或ハ弓馬ノ道或
ハ弓矢ノ道ノ盛衰強弱ヲ唱ヘタルハ、人ヲ数十歩ニ
斃スノ利アルヲ以テナリ、今ヤ之ニ優レル銃砲ハ數
十百歩ノ外ニ効アルハ多言ヲ俟ス、故ニ武士ヲ銃砲
ノ家或ハ銃砲ノ術或ハ精不精ヲ以テ、武備ノ強弱ヲ
論スベキノ世トナリタリ云云、蓋シ此論今ニシテハ
乳臭ノ児童モ弁知スト雖トモ當時未タ弓砲ノ優劣ヲ
論スル人ナカリシニ、斯ノ如ク幕府ヲ諷刺シタルハ
實ニ卓見ト云フヘシ、高島ハ書画ヲ好クシ風雅ノ道
ニ長シタルハ衆ノ知ル処ニシテ、嘉永ノ初赦サレテ
江川氏ノ邸ニアルヤ、中原猶介ヲ以テ五十斤白砲彈
ノ形ニ模シタル茶釜ヲ鑄リ、銘スルニ日本天砲開基
高島秋帆ト彫刻シタルヲ、齊彬公ニ贈リシニ嘉納シ
タリト、或ハ其釜ヲ画キ左ノ歌ヲ記シテ知己人ニ与
ヘタリト、



裏ニ高嶋秋帆ト彫ス

ぼむへんの釜打かけて君が代を

夢のたえまにによふとそおもふ

高島四郎太夫及ヒ連類処刑

松平右京亮家来一学倅

市川熊男へ

其方儀、田口加賀守長崎奉行ノ節在勤ノ供致シ彼地ニ
罷在、同所町年寄高島四郎太夫弟子ニ相成砲術教授ノ
内、同人兼々身分昇進ノ内願有之趣、時々内繕致候迎、
加賀守手許へ出候節、四郎太夫出精ノ趣噂ニ及ヒ、加
賀守ニライテモ四郎太夫常々出精致者ノ由心得居候様
子等同人へ申聞候次第、仮令頼ヲ受仕成シ候儀ニハ無
之候共、身分昇進ノ推挙致候筋ニテ、殊ニ追テ加賀守
帰府ノ上、四郎太夫上勤中、同人ニテ相贈候首物並格
式被仰付候後、為謝礼反物其外相贈候ヲ、其度ニ如何
ノ儀ト乍心得請用致候始末、不埒ニ付押込、

細川越中守家来

池邊啓太へ

其方儀、測量唐学為修行長崎表へ罷越候上、高島四郎
太夫砲術ノ弟子ニ相成、後人參ノ儀外俵物ニ違容易ニ
売込難出来旨同人ヨリ承乍罷在、追テ四郎太夫並元俵
物役所筆者路次等任申、主人在所国産ノ人參又ハ椎茸
等買集俵物役所へ売払貰ヒ、其度ニ 銀致徳用、其上
右人參一手買受ノ儀、同所今鍛治町五兵衛頼ニ任セ世
話致遣候段ハ、国益候儀ヲ存量候次第無謂義ニハ無之
共、同人願ノ趣主人役場ニ於テ聞濟ニ相成、後右挨拶
ノ由ヲ以五兵衛ヨリ反物其外差贈候ヲ如何ノ儀ト乍心
得致受用候始末、不埒ニ付押込、

編者曰、鳥居兄弟カ嫌疑ニ罹リタル所以ハ、当時高
島ハ各藩ヨリノ依頼ニ応シ新式ノ大砲ヲ製造スルニ
依リ銅錫ノ資料ヲ買集スルニ、薩摩国産ノ正錫払下
ケノ尽力ヲナシ既ニ数千斤ヲ弁達シ、尚ホ許多ヲ尺
力セントスルヲ誤聞シ、高島ト謀リ密ニ海外貿易ヲ
図リ、或ハ数多ノ砲器ヲ製シ、或ハ米穀ヲ購求スル
ハ不軌ヲ図ルニアリト讒誣ノ為メ幕吏ノ逮捕セント

スルヲ聞知シ、在邸藩吏保護シテ帰国セシメ辛フシ
テ遁レタリ、而シテ後チ搜索最モ敵ナルカ故亡命踪
跡ヲ知ラサル旨復申シタルヲ以テ成田ト変名セシメ
タリ（藩政中幕府ニ対シ罪アルモノハ、姓名ヲ変シ失踪シ
タル旨届棄ナルコト、往々寡カラサリキ）

松平出羽守家来

尾原定四郎・望月兔毛へ

其方儀、宗次・郡藏並定四郎ハ、主人在所国産人參、
長崎奉行唐方売込ノ儀取扱罷在候処、近年相場下落致
シ、引合兼候トテ高島四郎太夫ト遂内談俵物方掛役人
其外通詞共ヲ以、唐人共へ右相場買進ノ儀申流、且人
参代金渡方等ニ付テモ品々手数相掛候由、右挨拶其心
得ヲ以王人耳^(主)へモ不申聞、銀子或ハ甲冑等ヲ右四郎太
夫へ相贈リ、兔毛ハ重役ノ者差凶ニモ無之、郡藏ヨリ
申越候迄ニテ有之ヲ如何ノ儀ト乍心付、主人申付ノ趣
ヲ以テ右贈物品書等四郎太夫へ相達候始末、一同不埒
ニ付、定四郎押込、兔毛ハ急度叱置、

御代官高木作左衛門元占手代
中島東一郎へ

其方儀、肥前国佐伊津村石本勝之丞借入銀ノ儀、同人親静馬ヨリ同勤塚田平藏外一人頼請、作左衛門勝手入用ノ趣ニ申成シ、長崎市入札商人共調達銀ノ内会所私方ノ掛預リ銀ノ積、右商人共出銀ノ儀對話相整候由ヲ以テ、証文連印ノ儀塚田平藏申付、如何ノ儀ト乍存、同人申ニ任セ右証文へ調印致相済シ候始末、不埒ニ付押込、

五島左衛門尉家来
貞方堅吉へ

其方儀、五島有川外一ヶ浦鯨漁場ノ儀、神代徳次郎兄泰助名前ニテ受負候由ヲ以テ、先納金差立方徳次郎ヨリ頼受候ヲ、同人ハ通詞ノ身分右体ノ儀ニ携候儀如何ノ義ト乍心附、取次遣候始末、不埒ニ付急度叱リ、

五島左衛門尉家来
永留太助へ

其方儀、先達テ同家来山田平吉跡相統抱人ノ推拳イタシ、山田蘇作ハ元彭城清左衛門ト名乗り、小通詞末席勤中不屈有之、長崎表欠落イタシ候モノ、由シ風聞乍承、右抱人ノ儀世話イタシ一向主家ノ用弁ノミ存量、右風聞承込次第ヲ押隠、殊ニ身元糺ノ義家老青木・田宮外一人江申聞、別段糺方モ不致、品能ク取繕申立置候始末、不屈ニ付江戸十里四方追放、

五島左衛門尉家来
宮崎貢へ

其方儀、彭城清左衛門事山田蘇作へ、唐小通詞末席勤中不屈之儀有之、長崎表致欠落候者ノ由不及聞共差働ニモ有之、右之趣ヲ以テ拘入ノ儀、同家来永留太助頼ニ任セ、身元糺方等都テ同人へ任セ置、山田平吉死、失跡へ拘入ノ義取計候始末、不埒ニ付押込、

内藤鉢之丞家来

岩木幸助

鳥居甲斐家来

山口源右衛門

其方儀、及吟味候処不埒ノ儀モ無之ニ付無構、

伊東和五郎

河間八平次

其方儀、元長崎町年寄福田源四郎ハ兼々主人方出入モ相濟居候者ニ有之迎、同人ハ勿論、町年寄内願筋ヲ鳥居甲斐元家来本庄辰輔事茂平次ヨリ頼請、其上長崎表ヘ罷越候筋往返路用ニ、右年寄ヨリ可賄貰合ニテ品々申聞候儀トハ不心付、茂平次日勤向筋ノ模様ヲモ不知承トノ推拳難成趣等、主人ヘモ申聞置候姿ニ取繕、右年寄共ノ内出府ノ儀源四郎ヘ申遣、八平次ハ茂平次事元長崎表出生ノ者ニテ、先達テ御府内ヘ罷出医業渡世中、一旦長崎表ヘ立帰候節、其頃町年寄高島四郎太夫(ツ)退恨ノ筋有之、甲斐御目付勤役中、四郎太夫如何ノ仕業内訴ニ及、心得ノ旨茂平次申聞候迎、四郎太夫退

役ニモ相成候ハ、其身出身ノ手續ニモ可相成義ト存量同人惡事探索方ノ義内話ノ上彼是手筈申合、猶茂平次出府致候後、同所会所向流弊改革及候ハ、四郎太夫並神代徳次郎等退身不相成ハ不行届様、其外ノ者共如何ノ所業及見聞次第等、品々書面ニ取結茂平次方ヘ差遣、猶四郎太夫其外ノ者於彼地吟味ニ相成、追テ甲斐ヘ引渡ニ相成候後モ、兼テ申シツカワシ置候次第、元來四郎太夫等不届ノ所業有之段相違ナク義ニ有之トモ、出身ノ願意可遂トノ心底ヲ以テ仕成シ候段、カレコレ私ノ致方、ソノ上福田源四郎町年寄ノ節同人内願ノ趣又タハ、元会所吟味役ニテ放チ役ニ相成候、旁善右衛門第勤等ノ儀、甲斐方ヘ内願ニヲヨヒ候儀、筋違ノ儀モ弁ヘナカラ、源四郎申スニ任カセ追テ出府ノ節、伊澤美作守長崎表ヨリ出立以前ソレノ歎願イタシ遣シ、殊ニ右推拳ノ手續キ其外同所会所向取締筋等尋ネ受ケ候次第、或ハ四郎太夫如何ノ風聞等見聞ニヲヨヒ廉々美作守等ヘ申立テ置キ候趣キラモ口外ニ及候テ、善右衛門ヘハ右内願ノ義ニ付キ心得方等ノ儀差函、其外美

作守長崎表宿々上会所受ケ弘役ニ相成、兼々ノ内願ノ成就イタシ候テハ全ク甲斐推挙故ノ義ト存候迎テ、謝礼ノ心得ヲ以テ其鯛料等相贈、猶茂平次ヘモ首物差遣シ、剩追テ源四郎等召捕ニ相成候趣キ承リ、四郎太夫等悪事ノ所業及讒訴候次第発見イタシ候義ハ推等致、其身ノ吟味モ遁レカタキ筋ト存量、自殺仕損ノ始末銘々不届ニ付キ和五郎押込、八平次ハ江戸十里四方追放可申付候処、半屋敷近辺出火ノ節放遣候処立帰候ニ付、所払可申付ノ処兩人共病死候間、一件ノ者共其旨可相心得候、

安部虎之助家来

鳥居 湊

吉野官藏

織田織衛

松平相模守家来

辻 彌門

鵜殿 司

富澤喜間太

岩鞆負家来

大坪孫右衛門

太田垣又七郎

木下圖書助家来

野口助之進

石川軍八郎

元会所調役頭取高島四郎太夫・元唐大通詞神代徳次郎
・西村俊三郎・元五島左衛門尉家来山田蘇作義不届ノ筋有之、今般牧野備前守殿依御差図、四郎太夫・徳次郎・俊三郎ハ中追放、蘇作ハ江戸十里四方追放申付・四郎太夫ハ虎之助ヘ、徳次郎ハ相模守、俊三郎ハ鞆負ヘ、蘇作ハ圖書助ヘ銘々引渡遣候間、得其意主人ニ可申聞候、右於評定所寺社奉行久世出雲守・大目付深谷遠江守・町奉行鍋島内匠頭・御勘定奉行久須美佐渡守・御目付稻葉清次郎立会、出雲守・遠江守・内匠頭・佐渡守申渡之、

西丸御留守居

伊澤美作守ヘ

其方儀、長崎表在勤ノ節同所地役人共不屈ノ取計一件、

西丸御留守居

戸川播磨守

鳥居甲斐町奉行ノ節同人掛リ吟味役懸合請立合、会所

役人共呼出相尋候砌、受払役並傳之丞祖父元会所吟味

役盛善右衛門・天利八郎父元掛方役吉野喜右衛門事迷

共、銘々役義勤中不埒ノ所業有之モノトモニ候処、

兩人トモ當時病死イタシ、会所吟味頭取佐藤忠太夫ソ

ノ外ノモノトモ申立候ヲ、実事ニ心得候トモ其筋支配

イタシ候地役人トモ家族ノ義殊ニ兩人トモ悴又ハ孫ト

モ方ニ同居罷在候者ニ候処、生死ノ次第得ト可相糺義

不心付、善右衛門外一人会所貸附銀返納相借候次第ニ

至リ、傳之丞外一人へ相尋ネ口書申付、善右衛門等病

死ノ趣甲斐方江申越シ、其上右一件大目付・御目付立

合三奉行掛申渡、善右衛門呼下シニ相成候節手鎖ニハ

不心附呼出シ、当地へ差下シ追テ甲斐方へ兼テ差越有

之候口書其外齟齬イタシ候段、掛向ヨリ掛向ヨリ掛合

請候迄更ニ不心付罷在候段、重々不束ノ至候、依之御

役御免差扣被仰付之、

其方儀、去ル亥年長崎表在勤ノ節、同年三月中於唐人

屋敷、袂時計其外投捨逃去候者有之、尤晚景ニテ面体

不見留趣ノ届書・伺書、新番・当番津田岩五郎外一人

差出候、後右ハ唐小通詞末席彭城清左衛門事、當時五

島左衛門尉家来山田蘇作仕業ノ趣相聞候ハ、即座ニ

懸吟味候処、家来中西道造取扱ニ任セ置候故、同人義

右届引替等ノ義申談、彼是時日ヲ移候故、既ニ蘇作逃

去候次第ニ至、其外番人共一体取調方モ不行届ノ段不

束ノ事ニ付、依之差扣被 仰付、

右於本庄安藝守御役宅、若年寄中侍坐同人申渡之、御

目付稻葉清次郎・本多隼之助相越、

同廿六日御目附遠山半左衛門差扣伺候処、不及其義旨

被 仰渡、右ハ去ル寅年長崎表へ立合御用罷越在勤中

ノ儀、右一件ニ付不念ノ段恐入候由、

長崎会所諸私役並傳之丞祖父
盛 善右衛門へ

其方儀、長崎会所取締向其外金銀取扱方ノ儀ニ付テハ、
前々奉行所ヨリ申渡候趣モ有之処、元会所吟味役ニテ
雜用方相勤候節、從來ノ流弊ニ泥ミ右預リ金ノ内貸渡
並取替致置分濟方等閑ニ相成居候ヲ不存罷在、殊ニ右
預リ銀ノ内其方借受又ハ差替渡等致買方濟方ヲモ等閑
等ニ致置、其上高島四郎太夫儀、其頃町年寄ニテ会所
向重立相勤候処、品々自己ノ取計有之御不益筋ト見込
ナラハ其段奉行所へ可申立処、同人右体重立居候義ニ
付、露頭致候テハ品々寄身分ニモ可拘哉ナト、如何ノ
心得ヲ以唐・紅毛人船王渡銀共五ヶ所宿屋共荷払代銀
納方取締筋等ニ事寄せ、四郎太夫自儘之取計ニ及候趣、
無銘ノ書物書綴リ在勤ノ御勘定方旅宿へ捨訴等致候儀
ハ、追々其身不束有之、役儀差免ニ相成候ヲ右捨訴致
候儀ヲ四郎太夫承リ込、同人奸曲ノ取計ヲ以右体察度
請候様仕成シ候儀ニモ可有之哉ト致疑惑、同人へ遺恨
ヲ相含且四郎太夫重立会所向取扱居候テハ、往々身分

再勤ノ障ニ可相成トノ義モ懸念イタシ、本庄茂平次方
へ度々文通及、其後筋違ノ儀トモ相心得、同人推察ヲ
以身分再勤ノ儀甲斐へ歎願致、猶同人聞請宜様可致ト
音物等相贈、殊ニ河間八平次義、茂平次俱ニ其方身分
再勤ノ儀甲斐並美作守へ厚歎願ノ趣ヲ以、彼是実意ニ
申聞候段、八平次ハ再勤イタシ、其身ハ役所ノ沙汰モ
無之故、同人申歎候儀ハ不快ニ存、又ハ同人申含四郎
太夫其外ノ者共及讒訴候ヨリ、会所役人共一同吟味ニ
相成候趣、市中風聞有之迎其外ノ不束ヲ覆ヒ、八平次
へ難義相懸リ候心得ヲ以テ、同人並ニ茂平次等ニ引合、
又^マ等、其砌在勤ノ御勘定方へ差出候始末、旁不届ニ
付キ江戸四方追放、

唐大通詞

神代徳次郎

其方儀、高島四郎太夫町年寄勤役中ヨリ出身ノ儀ハ勿
論、四郎太夫昇進ノ儀ヲモ在勤中ノ奉行家来共ノ内へ
追々厚ク内願及ヒ、時々音物等相贈或ハ持渡品ノ内町

年寄共所望ノ品ハ通詞トモ代銀受取、代リノ品相調唐商共へ相渡引替仕来ニテ、四郎太夫所望ノ品都テ引請取計、格別出割ニ可相成_レ品ハ、同人所望ノ名目ニテ其身引取名目ニイタシ、元代ヲ以テ引取売払、右利潤四郎太夫ニ相渡、又ハ同様ノ名目ニテ其身引取、江戸表ニ相廻シ売払、多分ノ利潤貪取、又ハ五島左衛門尉家来山口蘇作ハ先達テ不届有之長崎表出家イタシ、唐小通詞末席彭城清左衛門ニテ身分ノ偽仕官イタシ候者ニハ乍存、同人並西野清吉其外ノモノ共ヨリ左衛門尉領分肥前国五島浦鯨漁場請負金之儀頼請、通詞ノ身分如何ノ義ト乍心付、是又利潤ニ拘リ八幡町泰輔名目ヲ以テ一旦年季致請負、其上遊女唐綾懷妊致候儀ニ付テハ、夫々掟ソ趣モ有之処寄合廉平ノ在留ノ唐船主因藩亭弊ニテ、今紺屋町徳三郎人別取扱内々引取置候次第乍存、因藩亭頼ニ任セ廉平ヲ四郎太夫手代、次ハ実子ノ趣ニ取扱、反物目利寄合町駒作方へ養子ニ世話イタシ遣シ殊ニ廉平為手当因藩亭ヨリ銀札差贈度旨ノ願書並右銀札、其筋ノ唐船主財副揚少棠ヨリ請取処、右書面筋違

へ差出候テハ廉平身分ノ儀可致露頭ト其儘預リ置、右銀札ハ唐人屋敷乙名青柳彌三太ニ相頼ミ、名前贖差紙取拵、追テ遊女初紫養育料ノ名目ニイタシ、今鍛冶町忠兵衛ニ預、又浦五島町友三郎へ右忠兵衛ヨリ用立候銀子引当等ニ致候段、何レモ自儘ノ取計ニテ、剩唐人共常々私ノ馳走懇意ヲ結ヒ、音物等贈答致候儀ハ御国禁ノ段、下弁利潤ヲ存量リ、在留ノ唐人共へ懇意ヲ結ヒ、俵物取替渡等ノ儀ニ付認取替へ遣シ、漢文ニテ綴、四郎太夫へノ相談夫々書面出来ノ上、右願書差遣候節品能評議イタシ呉候様頼、同人へ相願、惣体私忍ヲ絶シ為謝礼、唐船主トモヨリ銀札申請、殊ニ右銀札唐館持出方ニ差支候トテ、唐船トモ引合品物等引替定例請取ノ姿相拵館内差出候始末、重々不届至極ニ付唐人屋敷前ニライテ^{〔陳カ〕}礮可申付処、牢屋敷近辺出火ノ砌放遣シ候処、兩度トモ立チ婦へリ候ニ付、中追放、

但此者難手放者ニ付、松平相模守へ永御預ニ相成、相模守在所下總国香取郡多湖へ遣置、

唐大通詞

西村俊三郎

其方儀、都テ唐人共ヨリ私ノ懇意ヲ結ヒ音信贈答等致候儀、御国禁ノ段ハ乍弁在留唐人共ニ懇意ヲ結ヒ、売買方其外等ノ世話イタシ遣シ、為謝礼唐船主ヨリ持渡ノ品或ハ銀札等貰受、殊ニ右銀札唐館ヨリ持出方差支候トテ、同勤神代徳次郎ヲ頼品物ト引替貰ヒ、又ハ唐人共頼ニ任セ其筋ヘ不申出願書案認遣シ、剩俵物取替渡等ノ臨時願書案取調方ノ儀、唐人共ヨリ頼受候由ヲ以、右ノ大意書取徳次郎差越候ヲ漢文ニ取直シ具候様申聞ヲ如何ノ儀ト乍存、同人ハ平日商売筋其外ノ儀ニ付世話請、断ニテ及兼候トテ、右草移認遣又ハ一己ノ存付ヲ以右願書四郎太夫ヘ及相談、当表立差出後品能評議致具候様頼遣候段、通詞ノ身分不届至極ニ付、放唐〔於カ〕人屋敷前獄門可申付処、牢屋敷近辺出火放遣候処、兩度共立帰り候ニ付、中追放、

但此者難手放者ニ付山名鞆負ヘ永御預、同人家来ヘ引渡、

五島左衛門尉家来

山田蘇作ヘ

其方儀、唐通詞末席中唐物売買ノ儀ハ重キ御国禁ノ段乍弁、利潤ヲ量リ在留船主施世第ヨリ使時計売捌方頼受、殊ニ唐館ヨリ右品物持出シ候節、新番所当番ノ者ニ被差押、奉行所ヘ吟味ヲ可通ト長崎表致出奔、其上右ノ次第ハ押隠、左衛門尉家来永留太助推挙ヲ以テ同家来山田平吉名跡相統致シ、猶名前押包主人領分浦々鯨漁場請負全主ノ儀ニ付、長崎演野町清吉等申ニ任セ、唐通詞神代徳次郎方ヘ及書通候段 公儀ヲ不恐致方不届至極ニ付、唐人屋敷於門前獄門ニ可申付処、牢屋敷近辺出火ノ節放遣シ三度迄立帰り候ニ付、江戸十里四方追放申付、

但難手放者ニ付、木下圖書助ヘ御預、同人家来ヘ引渡、

塚田平藏並水野應助吟味中致病死候間其旨可存、

戸川播摩守家来
中西道造へ

其方儀、戸川播摩守長崎奉行ノ節に勤ノ供致シ彼地ニ罷在候内、唐館内見廻候節怪敷モノ見受相改候処、袂時計其外投捨逃去候モノ有之、尤西体等見受不申趣届書同所大門新番所当番高尾恭太夫外一人差出後、右ハ五島左衛門尉家来山田蘇作ハ元名彭城清左衛門ト申唐小通詞末席勤中同人仕業ノ趣風聞承込、其砌長崎町年寄高島四郎太夫探索、高申談事実相分候ハ、猶予ノ取計難相成処、同人申ニ泥ミ主人へ申聞候義トハ乍申、彼是ノ取計及時日ヲ移候故、既ニ清左衛門逃去候次第ニ至リ、殊ニ右恭太夫外一人一旦相違ノ書面差出候ハ全ク心得違ヒマテニテ、事実ヲモ申立候上ハ、右廉別段吟味ニモ及ヒマシク義ト心得、其段播摩守へ申聞、其上鳥居甲斐町奉行ノ節同人掛吟味中、右体不束ノ取計ニ及候ヨリ吟味ニ相成、主人播摩守へ対シ恐入候儀ト存候迎自殺仕損候始末、不埒ニ付押込、

戸川播磨守家来
三澤半次

其方儀、同家中中西道造吟味筋有之、鳥居甲斐元町奉行ノ節、同人彼役宅へ召連罷出候砌、道造便所へ罷越度申聞候ハ、卒示無之様可心附処、其義無之、既ニ同人取昇セ同所統緑頬ニテ帯居候脇差ヲ拔、咽元へ疵付候次第ニ至候始末、不埒ニ付押込、

四郎太夫悴
高島淺五郎へ

其方儀、父四郎太夫申ニ任セ、御代官高木作左衛門娘カツテ内々妻ニ貰受、其後男子出生致候節妾服ノ趣相違ノ届書差出候、何トモ父四郎太夫差図ニ罷在候儀トハ乍申、右始末不埒ニ付押込、

無宿浪人

金王敬之進

其方儀、先達テ不届有之重追放相成候以前、久世伊勢

守長崎奉行ノ供致シ彼地ニ罷在候砌、同町年寄高島四郎太夫其外神代徳次郎へ懇意ヒ結ヲ、右ノ者共頼ニ任セ身分昇進ノ趣世話致遣シ、伊勢守へモ音物等度々取次差出、殊ニ其身モ受用致其上同人転役後モ四郎太夫聞受宜様可致ト、右内願筋ノ儀跡奉行へ申送ニ相成候杯品能取結ヒ及文通、又ハ水野美濃守勤役中同家来山田仲右衛門へ四郎太夫内願ノ儀頼入置候趣ヲ以、同人格式被 仰付候節、田口加賀守へ御渡ニ相成候御書付写、仲右衛門ヨリ差越候ヲ其儘彼地へ相達、其外右徳次郎ヨリ及通達度々唐物等取集売払、多分ノ利潤貪取候段、遠国奉行家来勤中儀右始末別テ不届ニ付、遠島可申付処、牢屋敷近辺出火ノ節放遣候処立帰候付、是迄ノ御仕置相守御捧場徘徊致間敷候、

三六三 〔家齊公薨去記事〕

閏正月晦日 大御所様家齊公 薨御

御年六十九

御内実ハ七日夜薨御ト云、

三月十三日御諡 文恭院殿贈正一位大相国

二月廿日御出棺、即日東叡山御葬送、御別当信解院

御機嫌伺惣出仕、普請・鳴物停止等

御通館之御道筋へ九尺間ニ白張提灯一ツ出ス云云、

大御臺様御事 廣大院様ト可奉称旨

二月廿二日

二月十八日曇卯

一大御所様薨御ニ付、漁獵十日、普請二十日、鳴物殺生五十日御停止被仰出候事、

三六四 水野越前守忠邦 改革布令

食物ノ事ニ付町触

近年町方へハ在方ニテ菓子類料理等無益ノ手数ヲ掛結構ニ致候者有之由、風俗奢侈ニ相成不宜、武家方ヨリ誂候分ハ格別、其外高直之品売買致間敷候、右違背ノ者モ候ハ、吟味ノ上急度咎メ申付候条、此旨町中不

泄様可触知モノナリ、

五月十七日

六月

三六七 越前守殿御渡

三六五 小十人本 大野權之丞御仕置
多在京組
其方儀、御政務筋ニ拘リ不容易事共彫割致シ、本屋伊助へ相渡遣候段不届之至、依之九鬼式部少輔へ御預被仰付候、

六月十日

此一件ハ、泰平年表及殿居囊・青表紙等著述之罪科ナリト云、

三六六 越前守殿御書取

質素節儉其外心得方之儀、天保九年戌年四月相達候処、猶又去子年十二月相達置候間、万石以上以下共奢ケ間敷儀無之、衣服・飲食之儀ハ勿論都テ無益之費ヲ省キ、武備非常ノ手当第一ニ可被心掛ニハ候ヘトモ、此度厚御沙汰モ有之ニ付、弥質素節儉相守御趣意ニ不違様可被相心得候、

諸家之足輕絹羽織著為致候儀、御法令之内、弓・鉄砲之者ハ紬布・木綿ト有之候、相触候間向後絹羽織相止木綿相用候様寄々可被達候、尤此節一時ニ改候儀ハ差支モ可有之候間改候^マ可被達候、

七月十三日

三六八 高家衆へ達書

堂上方へ於途中行逢候節、会釈之趣別ニ礼節モ無之事ニ候間、於旅中モ当地之通被心得、攝家・親王・門跡方ハ乘輿之儘片寄り控被罷在見計致通行、伝奏衆其外ハ差控ニ不及、片寄り不相障様通行可被致候、去ル亥年右会釈之儀ニ付キ何レモヨリ伝奏衆へモ申遣候事ニ候間、亥年承合候趣ハ向後相用被申間敷候、以来右様之儀一体ニ保候品被承合候ハ、伺迄ニテ掛合ニ不及候様可被致候事、

九月十七日

三六九 幕府非常節儉ヲ令ス

大目付へ御書付

此度敵數御儉約被 仰出候上ハ 公儀ノミニモ無之諸
 大名迪モ万端入用少ク、各安心致シ相勤候様有之度、
 勤向トハ乍申御武事ニ付候儀ハ、仮令存外之散財有之
 候共、元來銘々覺悟之儀ニ付、別段可達品モ無之候へ
 共、平常之勤向並献上物等無益之費用ハ可成丈相省様
 有之度候、献上物之儀ニ付テハ度々手輕之方ニ被 仰
 出候へ共、古今同種之価モ時勢ニ寄リテハ、高下可有
 之事ニ候得ハ、仕來候献上物之内ニモ、江戸表ニテ調
 達之品ヲ在所ニ引替、又ハ国産之品モ江戸表之調達ニ
 替候方勝手之向モ候ハ、聊斟酌ナク可被相伺候、御
 用向無御差支分ハ申立通ニモ可相成候、且又年中定式
 臨時御祝儀事ニ付、鮮鯛献上之節暑中或ハ連日風雨等
 之砌、品物調兼心配、其上不相当之入用モ有之趣ニ相
 聞、且ハ温暑之時分杯ハ猶更厚心配可有之候へ共、差

上候以後時刻モ移候儀ニ付、御用ニ相立兼候義モ有之、
 旁以諸家無益之失費ニ候間、御樽代・續代等之附例ヲ
 以、向後鮮鯛献上之節十万石以上ハ金二千疋、五万石
 以上金千疋、五万石以下金五百疋代金相納候様可被致
 候、

諸家鮮鯛献上ハ代金ヲ以差上候方ニ相成候へトモ、老
 中下總守間部・河内守井上・堀大和守親黨、兩丸
 若年寄中へ一紙目錄ヲ以差上候鮮鯛ハ、矢張是迄之通
 鮮鯛ニテ差上可申候、尤連日風雨或ハ炎暑之時分杯鮮
 鯛調兼候節ハ、其時ニ被相同上代金ニテ相納候儀モ可
 有之候、

九月十八日

右申合、同十三年三月二十一日至、右代金老中ヨリ十
 万石以上ヨリ金千疋・五万石以上ヨリ五百疋・五万石
 以下同三疋代金ヲ以相贈候様、

三七〇 米米ノ令

近年凶作等続キ候処、兩三年以來作方モ多分宜敷候ニ

付、非常之備自然ト等閑ニ可相成哉ニ候、御料所ニテ
ヒテモ困糶被 仰付候間、私領之分モ一万石ニ付キ糶
百石之割合ヲ以、当丑年ヨリ巳年 弘化ニ
乙巳年迄テ五ヶ年
之間面々領邑ニ困置候様被 仰出候、一統節儉相用、
其段領邑ニ込用之備等可有之候ヘトモ、天下ノ御備ヘ
ニ相当リ御安心思召候、寛政度厚御趣意ヲ以被 仰出
候間、困穀之分不得止事用途ニ遣ヒ払ヒ、詰戻未相濟
候面々ハ可相成丈当丑年詰戻、来寅年ヨリ前書割合之
通年々困増候様可被致候、

十月十日

這布令ニ対シテ各藩兪石高ニ応シ困糶ヲナセリ、本藩モ
各郷毎ニ地頭飯屋又ハ各村庄屋役所等ニ大小飯倉ヲ建テ
困ヒタリ、而シテ年々新古詰替藩庁モ之ヲ恣ニスルコト
ヲ得サリキ、明治四年辛未年廢藩ニ至テ之ヲ解キ其郡村
ノ協有ニ与ヘタリ、

三七一 幕府節儉令

一不益ニ手間掛リ候高直之菓子類・料理等向後無用ニ候

是迄拵成シ候共相止メ可申候、
一能装束結構ナルモ相見ヘ候間、向後手輕之品相用可申
候、

一破魔・弓・菖蒲・兜・刀或ハ、ハコ板類金銀・カナ物
並箔ナトヲ用申間敷、
〔事脱カ〕

一雛並翫人形類高サ八寸以上之品可為無用候、

一右以下之分匱末之金入純子類之裝束ハ不苦候、
〔簞子カ〕

一雛道具・梨子地ハ勿論、蒔絵ニ候トモ紋所之外無用之
事、高直之鉢植物売買令停止候事、

一烟管タハコ入其外翫物同様之品々金銀ヲ遣ヒ候義ハ勿
論、彫物・象眼之類並蒔絵等結構ニ致間敷事、

一女之衣類大造之織物・縫紋物可為無用候、縫金糸等入
候テモ小袖表一ツニ付代銀三百目、染模様小袖一ツニ
付代銀百五十目ヲ限リ、夫レヨリ高直之品売買致間敷
候、
〔雜カ〕
尤惟子モ右ニ准シ可申事、

一町人一統花美ノ儀無之様イタシ、自今町人男女共ニ不
限、分限不相応結構之品無用、又ハ髪ノ飾等迄大造成
品相用候者於有之ハ、組之者見掛次第居所名前等承

糺シ、町役人差添サセ直ニ奉行所へ召連致吟味候間、兼テ左様可心得候、

一櫛並簪類金銀ハ勿論不相成、鼈甲モ細工入但高直之品相止、櫛代銀百目ヲ限、並簪モ右ニ准シ、下直ノ品仕込可申事、但シ女髮結ニ縮緬之色切ヲ拵、又ハ女子共相用候履物鼻絹等^{〔緒カ〕}高直之品売買致間敷候、

右之通享保・寛政之度並其後モ相触候趣有之候処、累年世上花美ニ相成、銘々身分ヲモ不弁立派ヲ競ヒ、

且又外見ハ不目立様ニテモ内実高金之品々猥ニ売買致候者有之由候、仮令翫ヒノ品ニ無之候迎モ、度々触置候儀ヲ当座之事之様相心得候ヨリ、畢竟等閑ニ成行法度ヲ背候段不届之至ニ候、併是迄之儀ハ格別之御宥免ヲ以テ、先ツ御咎之不被及御沙汰候条難有奉存、今般厚御趣意ヲ以風俗改候様被 仰出候儀ニ付不輕相心得可申候、尤是迄仕込置候品モ有之候ニ付来寅^{天保十二}辛丑年^{〔マ〕}年ヨリ急度可為停止候条、触面之趣相背候者於有之ハ役人共相廻遂穿鑿無用捨蔽重咎申付候、尤紛敷改方致者、或ハ途中ニテ往来之者ヲ

捕改候儀ハ無之事ニ候、若右体之者有之候ハ、其者ヲ留置早々可訴出候、奢侈高価之品ハ武家方ニ候共 誂ノ者有之候ハ、奉行所へ相伺可任差図候、右之通町々ハ相触候条被得其意、惣テ花美^{〔マ〕}高高価之品誂申間敷候、此度之御趣意愈相心得、諸事奢ケ間敷儀無之様可被致候、

十月二十五日

三七二 水野越前守殿ヨリ町奉行へ御渡御書付

此度都テ御改革被 仰出候ニ付テハ、市中風俗之儀迄モ改候様ニトノ御趣意ニ有之候処、近来狂言役者共芝居近辺ニ住居イタシ町家ノ者共同様ニ立交リ、殊ニ三芝居^{當時江戸中ニ芝居三ヶ所アリ}共狂言仕組甚猥ニ相成、右ニ付テハ自然ト市中へモ風俗押移リ近来別テ野鄙ニ相成、又ハ時之流行事杯多クハ芝居ヨリ起リ候儀ニ付、往古ハ兔毛角モ、当時ハ御城近キ市中ニ差置候テハ御趣意ニモ相戻事ニ候、一体役者共之儀ハ身分差別モ有之候処イツトナク其隔モ無之様ニ相成候ハ不取締之事ニ候、

此節堺町・葺屋町狂言座並操芝居其外右ニ携候町家之分不残引払被 仰付候、乍併二百年來古著ノ地相離候付テハ品々難儀ノ筋モ可有之哉ニ付、相応之御手当モ可被下、替地之儀ハ浅草・今戸、聖天町近辺 浅草猿 若町ニテ可成丈一繰ニ可相成場所取調可被相伺候、尤木挽町芝居之儀モ追テ類焼致候欵普請大破ニ及芝居為引払候間、其心得ヲ以替地取調可被申聞候、且又芝居ニ携候町家之分モ町々ノ儀モ入替致候積リ、地坪並御手当金之儀取調可被申聞、尤何レノ場所ニテモ、取締不行届候テハ猶又市中風俗ニモ移候儀ニ付、引移候迄之狂言仕組並役者共素人ニ不立交様、取締之儀取調可被申聞候、

十二月十八日

右ニ付町奉行遠山左衛門尉於御役所申渡覚、堺町専助店狂言座勘三郎・同人抱役者座頭彦三郎・葺屋町新六店狂言座元羽左衛門・同人抱役者座頭歌右衛門煩ニ付代頭取橋十郎・木挽町五丁目伊三郎店頭取權之助・同人抱役者納升煩ニ付代頭取鯛助へ

此度市中風俗改候様ニトノ御趣意ニ有之候処、近來役者共芝居近辺ニ住居イタシ町家之者同様立交リ、殊ニ芝居共狂言仕組甚猥ニ相成、右ニ付テハ自然ト市中ニモ風俗押移リ、近來別テ野鄙ニ相成、又々時々流行之事杯多クハ芝居ヨリ事起リ候儀ニ付、依之往古ハ兎モ角モ、當時御城下市中ニ差置テハ御趣意ニモ相戻候事ニ候、一体役者共儀ハ身分差別モ有之候処、イツトナク其隔モ無之様ニ相成候ハ不取締之事ニ付、此節堺町・葺屋町兩狂言座並操屋其外右ニ携候町家之分ハ、不残引払被仰出候、併二百年來古着之地相離候ニ付テハ品々難儀之筋モ可有之哉ニ付、相当之御手当可被下候、替地之儀ハ取調追テ可被及御沙汰候、木挽町芝居之儀モ追テ類焼致候欵普請大破ニ及候節ハ、是又引払可申付間、兼テ其旨可存候、尤權之助狂言座之儀來春興行相始候ハ、狂言仕組方役者共猥ニ素人へ不立交様取締之儀厚可相心得候、

堺町専助店狂言座勘三郎外六人へ申渡、今般堺町・葺屋町兩狂言座並操芝居其外右ニ携候町家之分、不残引

弘被 仰付候、替地之儀ハ浅草・聖天町・山之宿町兩

裏ニ有之候小出伊勢守 英常乎、丹波國部
二万六千石余 下屋敷坪数一万

七十八坪之地所被下候間、右へ引移可申候、尤先達テ

申渡候通為御手当金五千兩被下候間、難有可奉存候、

正月十一日

此時小出伊勢守へハ銀三百枚被下之、

寅二月朔日眞田信濃守殿ヨリ町奉行へ御渡、

三七三 京都町触

眞田信濃守殿ヨリ町奉行へ御渡御書付

最前界町・葺屋町兩芝居並操芝居引弘ニ付、為替地浅

草山之宿小出伊勢守下屋敷一万七十八坪被下候処、改

出之分千四百二十二坪余有之ニ付、右之儀モ被下候間

芝居へ携候者トモ一繰ニイタシ差置候様可致旨、尤御

普請奉行可申談候、

十二月十八日

三七四 女髮結ニ関スル令

十二月町触

前々ヨリ女髮結ト申女ノ髮ヲ結ヒ渡世ニ致候者モ無之

代錢ヲ出シ為結候女モ無之候処、近来専女髮結所々ニ

有之、遊女並歌舞妓役者女形風ニ結ヒ立、右ニ准シ衣

類等迄花美ニ取筋、風俗ヲ乱シ如何之事ニ候、右為結

候女ノ父母夫ハ何ト相心得罷在候哉、女ハ万事自分相

応之身嗜可致儀ヲ可心掛事ニ候、以来輕キ者共ノ妻・

娘トモ自身髮ヲ結、女髮結ニ為結不申候様可心掛候、

是レマテ女髮結渡世致候者ハ、家業ヲ替仕立物洗濯其

外女ノ手業ヲ以テ渡世ヲ替候様是又追々可心掛候、右

之通り寛政七卯年十月申渡置候処、年数相立候故等閑

ニ相心得、当時専女髮結流行イタシ裏家住居之賤キ者

迄モ相雇無益之錢ヲ費シ候趣相聞、マヤ必竟右等之事ヨリ、

町家ノ娘子供奢侈ノ風俗ニ成行以之外不埒之事ニ候、

以来右渡世ハ堅相止外之手業當候様町役人共厚ク世話

致可遣候、若見遁置候者於有之ハ、急度咎可申付条銘

々堅可心附候、

櫛・簪又ハ手拭其外之翫様ノ物ニ歌舞伎役者之役所付

之儀是又風俗ノ妨ニモ相成候間、以來右之樣品々役者
紋付之儀堅致間敷候、

御内府モ場末之町ハ髮結所ニ妻ヲ下刺ト唱遣候処モ有
之由相聞、右ハ女髮結ニ紛敷相見候ニ付、以來下刺ト
唱候妻ヲ差出候儀致間敷旨申渡、

十二月

三七五 琉球人參府ニ就キ拝借金

七月二日

松平豐後守齊興
名代 遠山美濃守

來年琉球人召連參府之処、彼地引続凶年並領分モ近年
多分之損毛等有之、拝借金之儀被相願候、近來度々拝
借被

仰付未返納殘金モ有之事ニ候得共、申立候趣無余儀相
聞候旨、格別之以
思召金壹万兩拝借被 仰付候、返納之儀ハ御勘定奉行
可被談候、

七月二日

三七六 分銅改達書

六月廿八日

分銅改

金銀掛合候分銅寛文中改、已前之古分銅兩替仲ケ間
ニテ遣候由相聞候ニ付、京・大坂・堺・近江之分潰等迄
外ニテ売買不致、潰直段ヲ以後藤四郎兵衛方へ買請サ
セ、目輕キ古分銅内々ニテ売買致間敷旨度々相触候処、
今以西国並長崎筋ニテハ古分銅多ク売買致シ用候由相
聞候、此已後内々ニテ売買イタシ候儀ハ勿論不隱置四
郎兵衛方へ可相渡候、尤四郎兵衛方ヨリ分銅改役人相
廻リ紛敷分銅ハ取上候筈ニ候、其趣急度可相守者也、
右之通先年ヨリ度々相触後藤四郎兵衛役人相廻リ改候
処、近來紛敷分銅ヲモ用候由相聞候ニ付、此度四郎兵
衛方ヨリ分銅改役人相廻リ紛敷分銅ハ取上候筈ニ候間
其趣急度可相守モノナリ、

卯六月

右之通相触候間可存其趣候、

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

天保十三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事映掌史料（紙数九六枚）」の記載あり〕

目録

- 一 年頭祝儀
- 一 廣大院様従一位御叙任
- 一 水野越前守（忠邦）大改革
- 一 〔松崎慊堂記事〕
- 一 島津久明家記鈔
- 一 洋式砲術拡張ノ由来
- 一 高島四郎太夫ノ砲術採用

- 一 高島四郎太夫新納主税ニ海備ノ必要ナルヲ説ク
- 一 加州金澤商人外国密商所刑
- 一 改曆布告
- 〔参考 島津久明家記鈔〕
- 一 御意之覚
- 一 洋式大小砲術上覧
- 一 近衛家精姫君及ヒ岡山公御逝去ノ報
- 一 松平伊豫守卒去
- 一 大熊善太郎等賞与
- 一 大慈公御遺物
- 一 島津和泉旅行
- 一 高島砲術伝授制限ヲ解ク
- 一 島津和泉相談掛リ
- 一 島津和泉御名代
- 一 御代参
- 一 拝借金ノ件
- 一 松平大隅守拝借金
- 一 琉球謝恩使登營

一 江田平藏家記抄

一 琉球人登宮行列

一 種子島六郎御用掛拜命

一 異国船処分變更令

一 種子島六郎御供拜命

〔錢相場に関する達書〕

一 首途

一 齊興公琉球王子ヲ率ヒテ出府ス

一 鎌田正純日記抄

一 百姓之掟

一 異国船渡来備防令

一 種子島六郎代参

一 種子島六郎ノ從者増加

一 異国船渡来ノ節防禦方達書

一 二ノ宮尊徳被召出

一 発途宿割

一 戯作書停止達書

一 異国船擬造ノ帆ヲ止ム

〔町名變更に関する達〕

一 御前様御登城

一 海防ノ為拜借金

一 墮胎ノ惡習禁令

一 報七郎殿御下著祝詞

一 種子島六郎ニ出府

一 寶鏡院へ月次登城報知

一 御機嫌伺

一 井伊家参勤供列ノ美麗ヲ誠ム

一 天文方山路彌左衛門等所刑

天保十三年 壬寅 清曆道光二十二年
西曆千八百四十二年

紀元二千五百二年

仁孝天皇 第百十九
ヲヤヒト 即位二十六年
世恵仁

將軍家慶公 第十
ニ 襲職六年

齊興公 第二十
七世 知政三十四年

三七七 年頭祝儀 (島津久明家記抄)

正月十五日

御太刀目録

松平大隅守

右年頭之御祝儀差合ニ付延引、今日以使者差上之、御
差図ニ付於檜之間謁牧野山城守、

一種御樽代

同 人

右同断ニ付

廣大院様へ差上之、於同席謁御留守居、

時服式

同 人

右歳暮之御祝儀差合ニ付延引、今日以使者差上之、伺
之上於同席謁牧野山城守

増山彈正少弼今日登 城無之、

三七八 廣大院様從一位御叙任

宣旨勅使清岡少納言・青木中務少輔・平田少内記等持
参、同廿五日殊叙ノ御規式有リ、依テ向後一位様ト可
奉称旨被 仰出タリ、

二月朔日

廣大院殿ハ重豪公第三女(茂子)安永二巳六月十七日鹿

兒島城ニ生ル、母ハ市田氏○重豪公ハ十二男十四女ヲ

生ム、茂姫君ハ第三女、齊宣公ノ姉君ナリ、第一女ハ恰

姫君(早世)、第二女敬姫君(生母茂姫君ニ同シ)、第四

女厚姫君(早世、生母茂姫君ニ同シ)、第五女克姫(生母

堤前中納言代長卿女)、第六女牧姫君(生母克姫君ニ同シ)

第七女明姫君(生母克姫君ニ同シ)、第八女富姫君(早世

生母マ、第九女壽姫君(生母谷周左衛門女、松平越中

守ニ嫁ス)、第十女種姫君(生母宇野氏)、第十一女定姫

君(生母種姫君ニ同シ)、第十二女立姫君(生母マ)

水野壹岐守ニ嫁ス、第十三女壽姫君(生母マ)協坂

中務大輔ニ嫁ス、

男子ニハ第一齊宣公(御本腹堤前中納言代長卿女)、第二

男富之進君(生母市田氏、茂姫君ニ同)奥平大膳大夫養子

第三男龜五郎君(早世、生母マ)、第四男感之助君

早世(生母マ)、第五男雄五郎君(生母市田氏、島津

因幡養子、後山松ト号ス)、第六男時之丞君(生母マ

有馬佐兵衛佐養子トナリ、故アリテ離別鹿兒島ニ歸リ住ス、左

近ト唱ヘタリ)、第七男爲次郎君早世(生母有川六左衛門女)、第八男宗之助君早世(生母^マ)、第九男蓬之進君早世(生母杉浦作左衛門女)、第十男豹治郎君早世(生母^マ)、第十一男桃次郎君(生母^マ) 福岡侯養子トナル、則美濃守長溥公)、第十二男虎之助君(後徳之丞、八戸侯ノ養子トナル、則遠江守信順公)以上十二男ナリ、

因ニ記、市田氏ノ祖先ハ江州佐々木ノ支流市田治部之丞カ末流ナリ、近代零落シテ大坂藩邸ノ足輕職喜内ノ女ナリ、廣大院殿將軍家齊ノ御台所ニ入與セラレシ後寄合一所ノ班ニ陞セ、兄ナル勘解由盛長ハ御家老職ニ進メラレタリ、

三七九 水野越前守(忠邦) 大改革

江戸・大坂・京都其他諸所之富興行被停、

三月八日

文身之禁令

輕キ者共彫物ト唱惣身ニ種々之繪又ハ文字等ノ彫墨ヲ入或ハ彩色等致候類有之由、右体之儀ハ風俗ニ拘リ無疵之惣身ヘ疵付ケ候儀ハ銘々恥可申処、若キ者共却テ伊達^{俗ニメ}ト心得候哉、諸人陰ニ嘲笑候ヲモ不存、右様彫物致候ハ不宜事ニ候間、向後手足ハ勿論惣身ヘ彫物致間敷候、此段町役人共ヨリモ能々為申開心得違無之様可申論候、且又右彫物致シ遣シ候ハ人々頼ニ任セ候トハ乍申忌嫌フヘキ事ヲ不差構好ミニ随ヒ彫リ遣シ候ハ別テ不埒之事ニ候、右之段文化八末年申渡置候処、亦々近頃増長イタシ世間人足・駕籠昇渡世之者共彫物無之候テハ仲ケ間入不相成様成行候趣相聞、右体之儀モ有之間敷事ニ候、自今心得違新ニ彫物致候者於有之ハ、彫リ遣シ候者ハ勿論其者召捕急度可申付候、其次第ニ寄候テハ町役人共迄モ咎可申付候、

三月八日

市中女ニテ武士町人へ唄・淨溜理^{〔マ〕}・三味線等ヲ教、其中ニハ猥ケ敷風聞モ有之如何之事ニ候、男ハ男ニ可教

別テ帶刀致候者ハ女師匠決テ弟子ニ取申間敷、縦ヘ町人ニテモ女師匠ハ男ノ弟子取申間敷候、且又師匠ニ金子サヘ遣候ヘハ芸之善悪幼年之無差別芸名差免候故、追年名取ノ者多ク、尤名弘メ等差留候筋ニハ無之候ヘ共、贈物又ハ口上書ニ品物ヲ添配リ候モ有之由ニ相聞、右ハ花会ニ紛敷仕形不埒之至ニ候、右様之所業向後堅致間敷候、

三月十五日

料理茶屋・水茶屋渡世致候者之内、酌取女・茶汲女等年古ク召抱置候者共近年猥ニ相成候趣相聞候、一体新吉原町之外ハ深川永代寺門前ヲ始都テ隠売女ニ候ハ勿論之儀ニ付、此度諸事御改革之折柄風俗ニ拘リ候間、右場所々ハ此節速ニ不残取払可被及 御沙汰、商売替之儀御免被成候間難有奉存、当八月迄之内速ニ商売替致シ正路之渡世可致候、併抱女致シ料理茶屋・水茶屋〔候脱カ〕之分端々数多可有之候間、相对ヲ以テ右女子トモ新吉原ヘ奉公住替ヘ差遣候儀并ニ右渡世ノ者トモ吉原町ノ

人列ニ加ハリ遊女屋商売ヲイタシ候儀ハ勝手次第ノ事ニ候、尤モ吉原町之者モ奉公人住替之儀申来候ハ、錢金等ノ儀不相当之取計致間敷、引越来候モノヘ及対談遊女屋相始候ヲ無謂差障候儀無之様可致候、此上不致商売替在来之場所ニテ隠売女渡世致候者、且他ノ場所ニヨイテモ右同様之儀於有之ハ、夫々嚴重之仕置可申付候、地主ハ武士地・寺社門前地之無差別、其地面永代被 召上、家主・名主モ敵科ニ可被所候条、兼テ〔免カ〕其旨ヲ存被 仰出候儀嚴重可相守之候、

三月十八日

此時芳町・湯島・八丁堀辺ニ有之少年女形之男色ヲモ禁セラレタリ、

三八〇 「松崎慊堂記事」

三月十一日

儒業宜仕候趣達 御聽、依之 成次祖父隠居 松崎 慊堂
右於躑躅之間越前守申渡候、若年寄中侍座、

但四月朔日扇子献上、御納戸構ニテ 御目見被仰付

候事、

三八五 加州金澤商人外国密商所刑

加州栗ヶ崎

木屋藤左衛門

同 藤 藏

三八一 島津久明家記鈔

同人粹

佐次右衛門

三月十八日

太守齊興様御事、於中村御茶屋炮術御覽ニ付、和泉様ニ

右三人兼テ加州家へ御預ノ処御仕置

ハ五ツ時ヨリ御出被遊七ツ過御婦リ之事、

右ノ者トモ近来異国へ交易イタシ候義不届ニ付、今

日排ヶ坂ニヲキテ礮ニ被行○右藤右衛門家欠所ニ相

三八二 洋式砲術拡張ノ由来 (石室秘稿鈔、以下同)

成候処、所持ノ在金小判ニテ百十九万三千両、式步

○本文書は、第三三四号文書の一部と同文により略す。

判三十七万三千両、南鐐三十七万八千両、百両大判

七千九百両、小玉銀二十万八千貫目、此金四万八千

三八三 高島四郎太夫ノ砲術採用 (石室秘稿鈔)

両、丁銀六万八千貫目、此金九万六千七十五両○米

○本文書は、第三三四号文書の一部と同文により略す。

二百十万七千石、此代金二百万七千両、惣金ニシテ

三百九十八万五千五百二十五兩ナリシト云、

三八四 高島四郎太夫、新納主税ニ海備ノ必要ナ

ルヲ説ク (海老原清熙記録)

三八六 改曆布告

○本文書は、第三三四号文書の一部と同文により略す。

貞享曆・寶曆甲戌ノ曆ハ各儒者ノ自序有之、寛政曆

ハ序文無之、繕旨有之候、右ハ体載不宜 思召ニ候

間、新曆序文ノ儀此度ハ土御門家へ被 仰付、則別
書差越候間可達候、

三月十九日

這布令ニ対シ藩曆モ改正セラレタリ(藩曆ノ来由ハ明治
元年藩制改革ノ部ニ詳記ス)、

三八七 参考 島津久明家記鈔

久風島津
但馬主御役中

天保十三寅三月ヨリ

桐之頭御紋所御拝領、三月十七日御前下り、押手御紋
十七日之場ニ入ル云々、

三八八 御意之覚

御上下一具

御紋桐

島津和泉

右ハ別段之以

思召御家老職被 仰付候処、多年致精勤殊ニ御勝手方

江被掛置、当時專引受出精相勤旁 御満足被

思召ヲ以右之通拝領被 仰付候、右桐

御紋嫡々代々定紋同前相用候様被仰付候、

寅三月

御取次

碓山將曹

右御休息所於牡丹之間御拝領有之、御懇之 御意御承
知之事、

三八九 洋式大小砲術上覽

三月十八日齊興公中村御茶屋

一名騎
射場

下海浜ニ於テ西

洋流

一名高
島流

砲術臼砲・忽砲・野戰砲

銃 ナポレオン
式燧石機銃

等ノ演習ヲ初テ見玉フ、国老島津但馬久其外陪覽ス○

此時野戰砲手負傷ス、永山直次郎・丸田喜平太・千葉

喜太郎等数名負傷ス、

此日用ヒタル大小砲及ヒ彈丸ノ種類ハ二十拇臼砲(

銅製)、十五拇忽砲(同上)、十三拇臼砲(同上島津忠務所

有)、五百錢野戰重砲(一名攻城砲、銅製)、百五十錢一

門(島津中務所有)、同一門(町田助太郎所有)以上六門、

彈丸ハ白砲ニハ「ボムヘン」彈各六発、燒彈各三発、光
 彈各三発、忽砲ハ榴散彈三発、榴彈三発、ブリツキド
 ース五発、野戰砲ハ各「ブリツキドース」六発、実彈
 各十発（的射）、小銃四十八手（舶來）ヲ一隊ニ作り野戰
 砲ヲ左右翼ニ備ヘ銃隊ト俱ニ進退運動放發セリ、此時
 野戰百五十錢砲ノ藥囊ニ軋火シテ負傷者数名アリ（永
 山直次郎・深津某・千葉喜太郎ノ三名）○砲銃士ノ服装ハ
 洋服ニ擬シ、細ソノ半天・股引・立揚袴ヲ用ヒ（大刀ハ帶
 セス小刀ノミヲ帶シタリ）是ヲ鎧具ヲ用ヒス演習ノ初トス
 ○此突袖半衣ヲ籠袖又筒袖半天トモ唱ヘタリ、地布
 ハ木綿又ハ粗毛布ノ類ヲ用ヒタリ（高島カ長崎ニ於テ用
 ヒ初メタリト云）、冠ハ魚頭形ノ陳笠ヲ用ヒタリ（鮪魚頭
 ト綽唱セリ、之モ高島カ發明シタリト、一名「ペレットシ」笠ト
 モ唱ヘタリ）、此日老幼ヲ携ヘ見物ニ出タルモノ夥シク、
 心アル者ハ其術ノ精妙ニ感シタルモ、或ハ古陋頑僻ノ
 モノハ誹謗シ交々一ナラス、公ハ其妙技ヲ感シ玉ヒ、
 而シテ後御流儀ノ名ヲ命シ一国一般ノ軍備ニ供セラレ
 ムト特命セラレタリ、其事實ハ天保十五年ノ部ニ詳記

ス、

三九〇 近衛家精姫君及ヒ岡山公御逝去ノ報

四月廿六日碓山將曹ヨリ種子島六郎ヘ書狀

前文略

一 近衛精君 近衛家ノ姫君 并岡山様 齊彬公御會弟齊敏公 御逝去ニ付、

表向御弘メ有之筈御座候処、少々御差支之儀被為在
 後日御弘メ有之趣取扱可仕旨唯今九ツ過承知仕、夫
 故今日御弘メ無之後日御弘メ之筈ニ御座候、別文相
 認置候付此段申上候以上、

岡山侯松平伊豫守齊敏公ハ、齊興公ノ御二男 齊彬公御同腹

二弟 母公ハ鳥取侯松平相模守治道公ノ第四女ナリ、

齊敏公ハ文化八辛未四月八日芝藩邸ニ御誕生 齊彬公ハ文化

六巳巳九月廿八日同邸ニ御誕生、幕府ヘ御届ハ同七年庚午三月廿八日ナリ 御幼名治五郎君ト称

ス、文政九丙戌十月二日 十六歳 岡山侯從四位下左近衛

少將上總介齊政公 後政久ト改メラルルノ婿養子ノ約成リ、同年

十二月四日岡山邸ニ入り同日結婚 御鷹中金子ト称ス當年丁丑十一月十日岡 齊敏公知政凡十四年、天保十三壬寅

山ニ於テ生レ玉フ

正月晦日岡山城ニ於テ御逝去、年三十二才、雄国院
威山常光大居士ト諡シ備前国上道郡岡山村曹源禪寺
後ノ山正覺谷ニ葬ル、明治三年神祭ニ改メ早出靈齊
政命ト諡ス○公ハ敏顯ニシテ勇アリ仁アリ、幼ヨリ
齊彬公ニ讓ラス、

岡山侯其名ヲ聞ヒテ請フテ養子トセラレタリシト
云フ、知政見ルヘキナシト雖モ養父公ノ治蹟ヲ革
メサルヲ主トシ玉ヒントナム、惜ヒ哉、天年ヲ藉
サス自ラ進ンテ治ヲ布キ玉フコト能ワサリシト、
齊彬公訃音ニ接シ、宜ク三年ヲ出スシテ岡山ノ藩
政頗ル見ルヘキニ至ルヘキヲ、或ハ公カ一腕ヲ失
ヒタリト歎惜シ玉ヒントナム、

三九一 松平伊豫守卒去 (岡山城主、齊彬公御二弟)

四月晦日

松平伊豫守様去ル二日御卒去

近衛精君様去ル五日薨去ニ付

太守様

少将様御定式之御忌服被遊御受咎候得共、日教打過候
付一日御遠慮被遊候、依之今日御登城伺御機嫌被仰上
候様被仰渡、八ツ半時分
又六郎様御登城伺御機嫌
御両殿様江被仰上候事、

三九二 大熊善太郎等賞与

寅五月二日

一 銀七枚

御勘定組頭

大熊善太郎

一同五枚ツ、

御勘定
評定所留役

松井助左衛門

井上新右衛門

同
同助

増田作右衛門

町奉行鳥居甲斐守組元与力仁杉五郎左衛門其外之

者共一件、吟味取扱骨折候ニ付被下候、

右於御右筆部屋縁頼越前守申渡候、

但右之外略ス、

三九三 大慈公御遺物

五月二十日

一御懸物探幽筆 式幅対

左 下龍

右 昇龍

右

〔齊東公〕
大慈院様為御遺物今日於 御殿 和泉様御拜領被遊

候事、

三九四 島津和泉旅行

六月中旬

島津和泉殿

右ハ旅行之節箱根其外御関所乗物ニテ罷通候儀但馬ニ
テ御届有之候処、御関所預江被仰達候段申来候条、此
旨被承置候様可申渡候、

六月 央 〔猪飼尚敏〕

三九五 高島砲術伝授制限ヲ解ク

高島四郎太夫先達テ出府ノ節兼テ心得罷在候火術伝来

ノ秘事マテ不残御直参 幕府廳下ノ通称ノ内執心ノ者一人ヘ

致伝授、右ノ外諸家ヘ猥ニ相伝ノ義仕間敷旨申渡置候

処、以来不及其儀候、御直参ハ勿論諸家執心ノ者ヘハ

勝手次第伝授可仕旨可被申渡候、尤異様ノ冠物衣服等

洋風ニ擬シタル袖小ノ
着服ヲ用ヒタリシヲ云 不相用、常体ノ笠或ハ陣笠・野服

・小袴・陣羽織等ニテ為致稽古候様可被致候、嘉永元

年西洋流ト唱候分向後高島流ト可唱旨被布達セラル、
〔マ〕

六月十一日

三九六 島津和泉相談掛リ

六月中旬

島津和泉

右ハ

報七郎様御事、種子島伊勢名跡相統被 仰出儀モ可有

之候付、島津石見江御用掛被仰付候、就右相談承掛同

様相心得候様被 仰付候、

但

御代参被遊御勤候事、

但

当分御病氣ニテ御出勤無之候付、菱刈安房様御名

御着服御長袴

代ヲ以御承知之事、

御行列年頭之通、

六月 央

三九九 拝借金ノ件

七月

三九七 島津和泉御名代

六月中旬(旧邦秘録)

当秋琉球人被召列

島津和泉

御参府ニ付御拝借金米御願立有之候処、去ル二日

右来月晦日 御首途

太守様為御名代御一類様被為

御名代被 仰付候、

召、秋月筑前守様御登 城之処、御金貳万兩御拝借被

六月 央

仰付候旨、御用番堀田備中守様ヨリ被仰渡候、御祝詞

申上候、

三九八 御代参

七月

御名

六月廿八日

内

旦那様御事

一唯様久保公御位牌御取繕相濟

四〇〇 松平大隅守拝借金

御点眼御供養ニ付谷山皇徳寺江

当秋琉球人召連可為参府処、彼国吉凶及不作打統手当

調兼、其上領分度々洪水不毛ニ付、願之通出格之詔ヲ
以金一万兩拜借被 仰付、

七月二日

四〇一 琉球謝恩使登營

琉球人登 城御礼

御譜代大名并布衣以上御役人登 城何レモ直垂・狩衣
着用云云、

十一月十九日

四〇二 参考 江田平藏家記抄

○本文書は、第四〇九号文書と同文により略す。

四〇三 琉球人登營行列

下乗迄
足輕

長袴

御留守居手廻召連
寺尾庄兵衛

長袴

御家老手廻召連
調所笑左衛門

下馬迄触番二人付

下乗迄
足輕

上三同

二

長袴

御用人手廻召連
島津權五郎

御用人下乗へ待合、王子へ相付
御玄喚迄參殿、上ノ間へ伺公

下馬迄
足輕

同 同

三同

下馬迄

中小姓 麻袴

四

御付人足

儀衛正
ギエシヤウ

行列方并路次樂ヲ司候役職ニテ候

騎馬唐裝束
譜久山親雲上

御付人足

五同

御玄関迄

中小姓 麻袴

下馬迄 持人
傘 サナ 人足

下馬迄
小人

六跟伴
コンバン

琉球人供人之事

兩掛之事

御玄喚迄

足輕

下馬迄 持人
衣家 イキヤア 人足

下馬迄
小人

九

樂人押下馬迄
中小姓
麻袴

銅角トウカク 下馬迄 才領 小人
唳叭ウシホウ 下馬迄 才領 小人

張旗チヤンギイ 下馬迄 才領 小人
阿班リヤウハン 下馬迄 才領 小人

八

樂人押下馬迄
中小姓
麻袴

張旗チヤンギイ 下馬迄 才領 小人
銅鑼ドンロウ 下馬迄 才領 小人

七沓籠

琉人方
合羽籠 同 同 同

下馬迄 才領 小人
鞭ムチ 才領 小人

下馬迄 才領 小人
朱塗割竹長サ六尺計

十一

樂人押下馬迄
中小姓
麻袴

鼓 才領 小人
虎トラ 下馬迄 才領 小人

樂人押下馬迄
中小姓
麻袴

唳叭ウシホウ 下馬迄 才領 小人
鼓 下馬迄 才領 小人

十 樂人押下馬迄
中小姓
麻袴

銅角トウカク 下馬迄 才領 小人
唳叭ウシホウ 下馬迄 才領 小人
鼓カネ 下馬迄 才領 小人

十二 乘人押下馬迄
中小姓 麻袴
下馬迄 御玄喚迄
足輕 牌
才領 琉人 小人

乘人押下馬迄
中小姓 麻袴
下馬迄 御玄喚迄
足輕 牌
才領 琉人 小人

十三 御玄喚迄
中小姓 麻袴
御附人足
御玄喚迄
中小姓 麻袴

掌翰史
與那霸親雲上
書翰ヲ掌候役職ニテ候
御附人足
騎馬唐装束書翰掛ル

十四 御玄喚迄
中小姓 麻袴
下馬迄
傘
人足
下馬迄
小人
御玄喚迄
中小姓 麻袴

十五 跟伴
沓籠 琉人方
合羽籠

下馬迄
衣家 人足
御玄喚迄
足輕
下馬迄
足輕
同 同 同 同 同

十六 同
下馬迄
足輕

下馬迄
足輕
同 同 同 同 同

御玄喚迄
御馬廻
熨斗目半袴

十七 御玄喚迄
涼傘
カサボコト云
才領 琉人 二人
小人 二人

御玄喚迄
御馬廻
熨斗目半袴

十八
御玄關迄
中小姓 麻袴

十九ギヤウ輜正使 唐裝束 豐見城王子 御玄喚迄 用達 麻袴 小人

御玄喚迄 用達 麻袴 小人

御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

廿 贊度使 從者之事 同 跟伴 御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

廿一 贊度使 同 跟伴 御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

廿二 中下馬迄小姓 麻袴 御玄喚迄 足輕

下馬迄 才領 小人 御玄喚迄 足輕

御玄喚迄 足輕 御玄喚迄 傘 才領 小人

下馬迄 龍刀 才領 小人

廿三 中下馬迄小姓 麻袴 御玄喚迄 足輕

廿四 茶庫 下馬迄 才領 小人 御玄喚迄 足輕

小人

牽添馬 杏籠

廿五 御玄喚迄 持人 人足 才領 小人

御馬廻一人之供之者 鑰挾箱 合羽籠 馬杏籠 押足輕

輜廻中下馬迄小姓之供鑰

廿六 合羽籠 同 同 同 同

輜廻中下馬迄小姓之供鑰

御馬廻一人之供之者 鑰挾箱 合羽籠 馬杏籠 押足輕

廿七 足輕 同 同 同 御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

廿八 足輕 同 御玄喚迄 副使 乘物唐裝束 澤眠親方 小人

廿九 足輕 同 同 同 御玄喚迄 麻袴 中下馬迄小姓

下馬迄 中下馬迄小姓 麻袴 御玄喚迄 足輕 中下馬迄小姓 麻袴 御玄喚迄 足輕 小人

三十 跟伴 同 御玄喚迄

卅一 跟伴 同

傘 持人
琉人

卅二 下馬迄
中小姓 麻袴

下馬迄
中小姓 麻袴
御玄喚迄
衣家 人足

卅七 跟伴 下馬迄
衣家 人足

御玄喚迄
足輕

卅六 跟伴 下馬迄
傘 人足

沓籠 同

御玄喚迄
足輕

人足

卅三 下馬迄
小人三人 牽添馬 沓籠 合羽籠 同

御玄喚迄
足輕

卅八 樂正 御附人足
國王側勤座率歌樂ヲ司候役職ニテ候

騎馬唐裝束
伊舍堂親雲上
小人

御玄喚迄
中小姓 麻袴

卅九 跟伴 下馬迄
傘 人足

下馬迄
小人二人

卅四 同 乘物廻中小姓 御附人足
供鍵 贊儀官 王子取次役 御附人足
騎馬唐裝束 小祿親雲上 小人

御玄喚迄
中小姓 麻袴

沓籠 合羽籠

卅四 跟伴 御玄喚迄
衣家 人足

御玄喚迄
足輕

卅五 跟伴 下馬迄
鍵 人足 下馬迄
小人二人

下馬迄
中小姓 麻袴

御玄喚迄
中小姓 麻袴

御附人足

卅五同

樂童子
國王小姓ノ内ヨリ相勤候

騎馬

譜久村里之子

小人

御附人足

下馬迄

中小姓

麻袴

卅六跟伴

下馬迄
傘

人足

御玄喚迄
足輕

杏籠

卅七下馬迄
小人

下馬迄
衣家 人足

卅七
下馬迄
傘 人足

御附人足

四十樂童子

騎馬

登川里之子

下馬迄
中小姓 麻袴

下馬迄
小人

下馬迄
小人

御玄喚迄
足輕

下馬迄
衣家 人足

御玄喚迄
中小姓 麻袴

跟伴

御附人足

卅八樂童子

騎馬
濱元里之子

御玄喚迄
中小姓

麻袴

跟伴

御附人足

下馬迄
小人

下馬迄
中小姓

麻袴

下馬迄
小人

下馬迄
傘

人足

卅三
下馬迄
衣家

杏籠 合羽籠

樂童子

御附人足

卅三
御玄喚迄
中小姓 麻袴

跟伴

下馬迄
傘 人足

卅四
騎馬
宇地原里之子

御玄喚迄
足輕

小人

卅五
下馬迄
中小姓 麻袴

下馬迄
小人

下馬迄
衣家 人足

卅九
御玄喚迄
足輕

杏籠 合羽籠 同

御玄喚迄
中小姓
麻袴

卒
御玄喚迄
足輕

香籠 合羽籠 同

四六 香籠 合羽籠 同 樂童子

騎馬
富永里之子
小人

下馬迄
衣家
人足

御附人足

御附人足

御玄喚迄
中小姓
麻袴

跟伴

四七 跟伴

下馬迄
傘
人足

五一 樂師

騎馬
病死三付
此場欠ル

御附人足

下馬迄
中小姓
麻袴

下馬迄
小人

御玄喚迄
足輕

香籠 合羽籠

五三

下馬迄
傘
人足

四六 下馬迄
小人

下馬迄
衣家
人足

御玄喚迄
麻袴
中小姓

跟伴

五三 御玄喚迄
足輕

香籠 合羽籠 同

四九 樂童子

騎馬
小祿里之子

御附人足

小人

下馬迄
麻袴
中小姓

下馬迄
小人

五四 御附人夫

騎馬

池城親雲上

御玄喚迄
足輕

御附人足

小人

下馬迄
傘
人足

下馬迄 下馬迄
傘 人足
下馬迄
中小姓 麻袴
下馬迄
小人

杏籠 合羽籠 同 樂師

五七 下馬迄
衣家 人足

御玄喚迄 麻袴
中小姓 跟伴

五六 御附人足 騎馬

内間親雲上 御玄喚迄
足輕

五九 御附人足

下馬迄 小人
中小姓 麻袴 下馬迄
小人

六 下馬迄
傘 人足

杏籠 合羽籠 樂師

六一 下馬迄
衣家 人足

六三 御玄喚迄 麻袴
中小姓 跟伴 下馬迄
傘 人足

御附人足

六三 騎馬 具志川親雲上 御玄喚迄
足輕

御附人足

六四 下馬迄 下馬迄
中小姓 麻袴 小人 下馬迄
衣家 人足

御附人足 中小姓 麻袴

六五 杏籠 合羽籠 樂師

騎馬 御附人足
城間親雲上 御附人足
御玄喚迄 麻袴
中小姓

跟伴 下馬迄
傘 人足

六六 御玄喚迄 足輕 杏籠

六七 下馬迄 下馬迄
小人 衣家 人足

御玄喚迄 麻袴
中小姓

六六 合羽籠 正使之使贊
御附人足 騎馬 與儀親雲上

六九 跟伴 下馬迄 傘 人足
御附人足 下馬迄 中小姓 麻袴

御玄喚迄 足輕 沓籠

七〇 下馬迄 小人 下馬迄 衣家 人足

七一 琉人方 御兵具方 御厩方 同 同 正使之使贊

七二 御玄喚迄 中小姓 麻袴 跟伴 下馬迄 傘 人足

七三 騎馬 御附人足 玉城親雲上 御玄喚迄 足輕

七四 御附人足 下馬迄 中小姓 麻袴 下馬迄 小人 下馬迄 衣家 人足

七五 沓籠 合羽籠 正使之使贊 浦崎親雲上 騎馬 御付人足 御玄喚迄 中小姓 麻袴

七六 跟伴 下馬迄 衣家 人足 下馬迄 傘 下馬迄 中小姓 麻袴

御玄喚迄 足輕 沓籠

七七 下馬迄 小人 下馬迄 衣家 人足

七八 琉人方 御兵具方 御玄喚迄 中小姓 麻袴 同 正使之使贊 騎馬 讀谷山親雲上 御附人足

六五 跟伴

下馬迄 人足 傘

下馬迄 中小姓 麻袴

六六

御玄喚迄 足輕

沓籠 琉人方 合羽籠

六七 下馬迄 小人

下馬迄 衣家 人足

御玄喚迄 中小姓 麻袴

六八

御兵具方 御厩方 同

正使之使贊 騎馬 眞榮平親雲上

御附人足

御玄喚迄 中小姓 麻袴

御附人足 中小姓 麻袴

六九 跟伴

下馬迄 人足 傘

下馬迄 中小姓 麻袴

御玄喚迄 足輕

沓籠 合羽籠

七〇 下馬迄 小人

下馬迄 衣家 人足

七一

御玄喚迄 御附人足

中小姓 麻袴

跟伴

七二 副使之使贊 騎馬 與古田親雲上

御附人足

御玄喚迄 足輕

下馬迄 御附人足

中小姓 麻袴

下馬迄 小人

七三 下馬迄 傘 人足

御附人足

御玄喚迄 中小姓 麻袴

七四

沓籠 副使之使贊

騎馬 小波藏親雲上

七五 下馬迄 衣家 人足

御附人足 中小姓

麻袴

七六 跟伴

下馬迄 傘 人足

七七

御玄喚迄 足輕

沓籠 琉人方 合羽籠

七八 下馬迄 小人

下馬迄 衣家 人足

下馬迄 足輕 杖突

六三 御兵具方 御殿方
同 同

下馬迄
惣押

下馬迄 杖突
足輕

六九 下馬迄 御馬廻手廻召連 御馬廻同
御馬廻同

下馬迄 御馬廻同

下馬迄備押 御兵具方肝煎 麻袴

六四 熨斗目半袴 物頭手廻召連

下馬迄足輕羽織袴 備鑓式十本

百 下馬迄 御馬廻同 御馬廻同 御馬廻同
御馬廻同 御馬廻同 御馬廻同

伊集院準衛 替々

手替足輕二十人

下馬迄備押

御兵具方肝煎 麻袴

六五 同 同

百一 下馬迄 御馬廻同 長袴 御用人手廻召連 御側役手廻召列

六六 御兵具方仕出 合羽籠 同 同 下馬迄 惣押

同

喜入多門

種子島六郎 疏人方引請

六七 同 同

御馬廻十人ノ内二人下馬
ヨリ下乗マテ差越

百二 長袴 御家老手廻召連 下馬迄 本道医師 手廻召連

猪飼央

替々

六八 熨斗目半袴 物頭手廻召列 御目付之内 下馬迄 御馬廻手廻召列 御馬廻手廻召列 岩切彦太夫 替々 熨斗目半袴 熨斗目半袴

下馬迄 杖突 足輕

百九 足輕二人付

百八 足輕二人付

合羽籠 同 同 釣ワク三挺
但差傘積用

百七 足輕二人付

百六 足輕二人付

下馬迄
足輕 同

百五 下馬迄

用心乗物四挺

百廿三

下馬迄

足輕 同

〔一〕百廿三ノ数字ハ朱書ナリ

四〇四 種子島六郎御用掛拜命

寅七月廿五日

右当秋

齊宣公御子報七郎様御国許へ御下向之御内定ニ付、御用掛被仰付候条可申渡候、

七月

右之通天保十三年寅七月廿五日御側御用人猿渡彦左衛門御取次ヲ以被仰渡候事、

種子島六郎

四〇五 異国船処分変更令

異国船渡来之節無二念打払可申旨文政八年被 仰出候然ル処当時万事御改正ニテ享保・寛政度之御政事ニ被復不寄何事御仁政ヲ被施度トノ難有 思召ニ候、右ニ付テモ外国之者難風ニ逢漂流等ニテ食物薪水ヲ乞ヒ候迄ニ渡来候ヲ、其事情ヲ不察一凶ニ打払候テハ、万国へ被対候御所置トモ不被思召候、依之文化三年異国船渡来之節取計方之儀ニ付、被 仰出候趣ニ相復候様被仰出候間、異国船ト見受候ハ、篤ト様子相糺シ食料薪水等相与急度帰帆難成趣ニ候ハ、望之品相応ニ与へ帰帆可致旨申諭、尤上陸ハ為致間敷候、併此通被 仰出候ニ付テハ海岸防禦之手当緩カセニ致置宜敷抔ト心得違又ハ猥ニ異国人ニ親ミ候儀致間敷筋ニ付、警衛向之儀ハ弥嚴重ニ致人数并武器手当之儀ハ是迄ヨリ一段

手厚聊ニテモ心配無之様相心得可申候、若異国船ヨリ海岸之様子ヲ伺ヒ其場所人心之動靜ヲ試候為杯ニ鉄砲ヲ打掛候類可有之哉モ難計候ヘトモ、夫等之事ニ動搖致サス渡来之事実能々相分御憐愍之御主意貫キ候様取計可申候、サレトモ彼方ヨリ乱妨之始末有之候欤、望ノ品与ヘ候テモ不致帰帆及異儀候ハ、速ニ臨機之取計ハ勿論之事ニ候、備向手当之儀ハ猶ホ追々相達候次第モ可有之候、

文化三年相触候趣、先達テオロシヤ船長崎ヘ渡来、致通商之儀相願候ヘトモ難相成筋ニ付、其旨申諭先年与ヘ置キ候信牌ヲモ取上ケ、以来乘リ渡間敷旨堅申渡帰帆為致候ニ付、再渡ハイタン間敷候ヘトモ、此後万一漂流ニ事寄セ乗渡何レノ浦方ヘ船ヲ繋キ申間敷モノニテモ無之候間、異国船ト見受候ハ、早々手当イタシ、人数差シ配リ見分ケノモノ差出シ篤ト様子相糺シ、弥オロシヤ船ニ相違ナク相聞ヘ候ハ、能々申諭シ成ルタケ穩ニ帰帆イタン候様可取計候、尤モ実々難風ニ逢ヒ漂流イタシ候様子ニテ、食物薪水ニ乏シク直ニ帰帆

相成カタキ次第ニ候ハ、相応ニ其品相与ヘ可為致帰帆、尤モ何程相願候テモ上陸不為致、帰帆迄番船附置見物等ヲ禁シ其段早々可有注進候、尤再応申諭候テモ相拒不致帰帆及異儀候ハ、時宜ニ応シ不伺及打払其旨可被申聞候、右体之始末ニ至候節ハ諸事寛政三年異国船之儀相触候趣ニ准シ取計可申候、

七月二十六日

四〇六 種子島六郎御供拜命

八月七日

右ハ 報七郎様御下向之御内定ニ付、御側御用人ノ場ニテ御供被仰付候条可申渡候、

寅八月七日 笑左衛門

右御側御用人平田直之丞御取次ヲ以被仰渡候事、

種子島六郎

四〇七 〔銭相場に関する達書〕

此節銭相場下直ニテ諸色直段ニモ相響下々致難儀、其

上問合組合停止後ハ相場不同ニテ所々ヨリ取引之約錢〔屋カ〕
区々ニ相成候趣相聞候間、以来金一兩ニ付錢六貫五百
文之積ヲ以売買可致候、
諸色直段引下高莫太ニ相認、見世先へ張出シ置可被申
候、

八月十五日

四〇八 首途

八月廿一日

一五月廿五日

御首途、

一十月六日

御発輿、

八月廿一日

今日御旅方御座立、御式台脇供屋二階へ被差立、笑
左衛門殿初掛リ御役々其外出席御酒等被成下候事、

四〇九 齊興公琉球王子ヲ率ヒテ出府ス

天保十三年寅八月廿二日 太守齊興公御発駕ニ付、中
山王賀慶正使浦添王子副使座喜味親方初惣琉人并御家
老之場ニテ大目附赤松主水殿初被召附候御役々出立、
伊集院町泊、翌廿三日水引大小路著ニテ廿五日迄滞在、
同廿六日川下リ久見崎本船根占丸乗付九月朔日川口出
帆、十月九日大坂木津川月正島、同十一日大坂御屋鋪
著十四日迄滞坂、十五日川登リ枚方船舶十六日伏見著
十九日迄滞在、同廿日伏見立美濃路・東海道通行ニテ
十一月八日江戸著、兩度之登城其外勤事等諸事至極都
合能相濟候事、

壬寅天保十三年琉人立 上様八月廿二日御発駕、琉人
モ同日発足、浦添王子トイフ、癸卯三月二日球人著、
太夫島津主計豊後
旧名 殿城下奏案、

四一〇 参考 鎌田正純日記抄

天保十三年壬寅八月廿四日一番組御小姓組番頭〔番カ〕へ御役
替、奏者番兼務是迄之通被仰付、御家者猪飼央尚敏ヲ

以テ被命之、

同十四年癸卯正月十一日千眼寺火消被成御免、御家老

菱州安房隆觀御用人吉利仲久包ヲ以承知之、

同年六月朔日御太刀馬代進上於

御前小姓組番頭御役之御礼、奏者鎌田柰之丞政典披露

且同断ニ付

少將齊彬公へ御太刀馬代進上、

天保十四年五月十一日

大守様九ツ過御著城

同 十五年十二月六日

大守様御発駕

同 年五月朔日

大守様御参府御礼 日光御社参御発駕并御帰府御祝儀

同年八月朔日於御書院

大守齊興公へ謁見、家ニ付持参大刀著坐御祝儀申上候、

四一 百姓之掟

百姓之儀ハ龜服ヲ着シ髪モ藁ヲ以束ネ候事古来之風儀

ニ候処、近来奢ニ長シ身分不相応之品著用イタシ、髪

モ油元結ヲ用候ノミナラス流行之風俗ヲ学ヒ、其外兩

具モ蓑笠ヲ用候処当時ハ傘合羽ヲ用ヒ、其余之儀万端

是ニ准シ無益之失費多ク、先祖ヨリ伝来之田畑モ他人

ニ渡候儀歎敷事ニ候、一体百姓ニテ余業之酒食商ヒ等

致候類、又ハ湯屋・髪結床有之候儀、畢竟近来之儀ニ

テ、若者トモ自然ト能カラヌ道ニ携リ、柔弱且放埒之

基候間、弥以テ古代ノ風儀ヲ不致忘却、物每質素ニイ

タシ農業相励候儀肝要ニ候、先達テ菱垣廻船積問屋共

其外諸仲ケ間組合一統停止被 仰出、於御府内同商売

何軒ニテモ相成候ニ付、自然ト在方ヘモ相移候哉ニ相

聞候、御府内町々在方モ一様ニ存候ハ心得違ニテ候、

百姓等ハ専耕作ニ力ヲ可用身分ニテ、余業ニ移リ町人

之商売ヲ始候儀ハ決テ不相成事ニ候、

近年男女共作奉公人少ク自然ト高給ニ相成、殊ニ機織

下女ト唱候者別テ過分之給金ヲ取候由、是又余業ニ走

リ候故之儀ニテ本末取失候事ニ候、元来百姓共ハ商向
当座之利潤ヲ以営ミ町人共ヨリハ格別之儀ニ候条、是

等之儀能々勘弁致一途ニ農業ヲ精出シ、銘々持伝候田畑不取失様專一ニ心掛可申候、

勘当・久離・帳外等之儀一体不輕義ニ候処、大体親族ノ因テ絶候程之者出来候ハ、兼々教方不宜故之事ニ候、粹又ハ厄介等有之者ハ勿論、村役人共一同其段厚相心得、不実之儀無之様常々異見等差加ヘ、一人タリトモ其所ノ人別不相減様取計可申事肝要ニ候、

九月十八日

四二二 異国船渡来備防令

異国船取計方之儀今度被 仰出候、就夫向後若近海へ渡来候ハ、臨時警衛并防禦被 仰付候儀可有之候間、平常大砲等ノ用意可被申付置候、変異ノ諸国戦闘之仕組和漢之制度トハ相違候ニ付、利方ニ軍器別段用意モ可有之候間、參勤之面々其覚悟ニテ防禦之仕方兼々心掛置可被申候、併右ニ付參勤之節是迄ヨリ多人数召連候儀ハ無用ニ致、江戸表有合之人数ニテ相心得候様可被致候、定府 藩士江戸邸常
住者ノ通唱 之者ハ当地重之事ニ付別テ

右之心得ニテ弥手厚可被申付候、都テ人数并立貝等之取誘無之書出シ、若シ唯今マテ銘々手薄之儀有之候共御沙汰之筋ハ無之候間可被得其意候、

異国船渡来之節防禦之儀今度別紙之通被 仰出之、右ニ付領分ニ海岸無之分ニテモ最寄ヘ異国船渡来之節ハ兼テ助勢之儀被 仰出、無之向ヘモ臨時警衛并ニ防禦之利器等大砲之類分限ニ応製作致置、非常之備手厚行届候様可被申付候、

九月十八日

四二三 種子島六郎代参

九月廿三日

種子島六郎

本人同日朝五ツ時白金氷川社ヘ御代参相勤、首尾高輪へ罷上リ申上候事、
右ハ明後廿五日 報七郎様御首途ニ付 御名代被仰付候条申渡、可承向ヘモ可申渡候、

九月廿三日

笑左衛門

右之通御側御用人平田直之丞御取次ヲ以被仰渡候事

四一四 種子島六郎ノ從者増加

九月晦日

御名代服熨斗目麻袴

一 右罷出候節御小袖一著拜領被仰付候事、

種子島六郎ヨリ 報七郎様御下向御供被仰付候処、

下男不足イタシ候付御作事方人足之内ヨリ忝人被召

付度願出趣有之、可為願之通候、

九月晦日

笑 左衛門

右願通被仰付候付、櫻田定渡御作事方人足鹿兒島

之金左衛門ト申者召列之事、

四一五 異国船渡来ノ節防禦方達書

九月十四日

大目付へ

異国船渡来ノ節防禦ノ儀今後別紙之通被 仰出候、右

ニ付テハ領分ニ海岸無之分ニテモ其最寄へ異国船渡来

ノ節ハ兼テ助勢ノ儀被仰出、無之向へモ臨時ニ警固並
防禦被 仰付候儀モ可有之、尤深山幽陰山国ノ領地ト

雖モ是又時宜ニ寄援兵等ノ儀被

仰付候儀モ可有之候間、何レノ場所ニテモ異国戦闘ノ

制度ヲ相考防禦ノ利器等大砲ノ類分限ニ応シ製作致シ

置、非常ノ備手厚ク行届候様可被申付候、

右之通可被相触候、

九月

別紙之通從 公義被仰渡候条、早々諸郷私領へモ不

洩様可申渡候、

十月

御家老座印

四一六 二ノ宮尊徳被召出

大久保加賀守 小田原城 主忠真 家来二宮金次郎(尊徳)被 召

出、御普請役格被 仰付、

十月六日

四一七 発途宿割

十月十五日

一 十月十五日江戸高輪從 御殿 御登途、御宿割之御
通行諸所御巡覽等モ被為在、十二月八日鹿兒島御到
着 御台所御門櫻之間御中門ヨリ被為入諸御式向被
為濟、御当日種子島伊勢名跡相統被仰出、御道中御
供之儘ニテ種子島へ被為入候事、

四一八 戲作書停止達書

寺門五郎左衛門号静軒 江戸柳亭種彦小説田舎春水為永南
笑仙人二世人情本作者右之三人當時之人情ヲ穿風俗ニ拘候間、以來
右様之戲作可為停止旨叱、

但板木取上焼捨、

十月十六日

四一九 異国船擬造ノ帆ヲ止ム

〔頭注〕「十一月朔日触達スルモノナラン」
十月廿八日

越前守殿御渡

大目付へ

近來北国筋其外諸国ノ廻船等異国船ニ似寄候帆ノ立方
相見、既ニ先達テ異国船ト見違ヒ候次第モ有之候、全
ク三本帆ノ儀ハ難相成筋ニ候処、追々大洋ヲ乗候様子
以前トハ相違ノ趣ニ相聞、殊ニ寄朝鮮ノ地方近ク乘通
リ候モ有之由、其外遠キ沖合ヲ乗候節帆ノ立方異国船
ニ似寄候ヲ以テ見違ヒ候儀ニモ到リ可申欵、依之以來
ハ異国船ニ紛ラハシキ帆ノ立方致シ并遠キ沖合ヲ乗候
儀可為停止、若触面ノ趣相背ニ於テハ吟味ノ上急度咎
可申付候、右之通御料ハ御代官私領ハ領主地頭ヨリ不
洩様可触知モノ也、
右之通可被相触候、

十月

別紙之通從 公義被 仰渡候条不洩様可被通達候、

十一月

御家老座印

四二〇 〔町名變更に關する達〕

同十三年四月廿八日町名之儀、堺町ハ猿若町一丁目、
葺屋町ハ二丁目、木挽町ハ追テ引移之上三丁目ト相唱

可申旨兩町奉行へ申渡、

此時狂言役者共他行之節へ編笠冠リ、素人ト不紛様可

致旨申渡、

十一月十八日

四三二 御前様御登城

十二月

御前様 (齊彬公御簾中)

先月四日御登

城候様御老女様方ヨリノ御奉文御到来、御登

城被遊候処

公方様

右大將様

一位様へ

御目見御懇ノ被為蒙

上意御品々被遊御拝領且

御料理御頂戴等首尾能被為済

御簾中様ヨリモ被遊御拝領物候、御祝詞申上候、

十一月

御名

内

幕府貯蔵軍資用金及ヒ図



大サ 目方四十一貫目

金高ニ積リ一万三千六百六十兩ト二匁

數百廿六

萬治

行軍守城用

勿作尋常資

寛政

數六

征伐軍旅用

天保 数二十五

勿為尋常資

藏充軍資

泰平宝伝

十一月廿九日

松平駿河守忠

一萬治目方 五千百六十六貫目

一寛政同 二百四十六貫目

一天保同 千二十五貫目

三口惣ノ目方六千四百三十七貫目

金高直シ二百十四万五千六百六十六兩ト二匁

右分銅一ツニ付四十一貫目算用、積高モ当時通用一

兩三匁ノ割ニシテ如斯、

十一月廿九日

安房・上總御備場御用引請被 仰付候ニ付、別段相達候趣モ有之候間、一段敵重之手当可被申付儀ニ候ヘハ、場広之処彼是用途モ相嵩可申 思召候、依之出格之訳ヲ以金一万兩拜借被 仰付之、

四二三 墮胎ノ惡習禁令

市中女醫師ト唱候者血道之療治正敷致候者不苦候処、

其中ニハ妊娠〔懐カ〕之者ヲ頼ニ応シ預リ置墮胎致サセ候類モ

有之哉ニ相聞不屈之至ニ候、向後右様之儀於相聞ハ頼

人迄モ遂一懸穿鑿急度咎可申付候間、兼テ此旨可存候

十一月晦日

四二三 海防ノ為拜借金

松平大和守齊

相模国御備場御用引請被 仰付候ニ付、別段相達候趣

モ有之候間、一段敵重之手当可被申付儀ニ候ヘハ、場

広之儀彼是用途相嵩可申、出格之訳ヲ以金一万兩拜借

被 仰付之、

四二四 報七郎殿御下着祝詞

十二月八日

寶鏡院様江

御名(島津但馬久風)

内

報七郎様御機嫌能今日被遊御下着候、御祝詞申上候、

十二月八日 使者 伊東藤内

十二月十九日

寶鏡院様江

御名

内

太守様御儀去ル期日月次付御登

城被遊候処、御礼後御居残之儀御用番堀田備中守様・

大目附神尾山城守殿ヲ以御達有之、御礼濟之上於御白

書院御縁頼御老中様方御列座、出格之以

思召正四位上御昇進被 仰進候旨、備中守様ヨリ御演

達有之候、御祝詞申上候、

十二月十九日 使者

伊東藤内

四二五 種子島六郎ニ出府
〔頭注〕「近衛家日記参照」
寅十二月九日

一於伏見 御逗留中京都櫻木町御茶屋へ被為入 郁見

様御対顔被遊緩々被為入候ニ付、我々ニモ 御目見

御盃頂戴、段々拝領物等モ被仰付候事、

種子島六郎

右来春 御発駕前致出府候様被仰付候条可申渡候、

天保十三年寅十二月九日 央

右之通御側御用人有川勇馬御取次ヲ以被仰渡候事、

四二七 御機嫌伺

一翌十六日出殿、於御休息 齊彬公御機嫌伺申上候、御

内證様御伝言申上候、且於江尻駅齊興公御下国御通行

ニ付、御機嫌伺申上候、今日同断御伝言申上候、

四二六 寶鏡院へ月次登城報知

四二八 井伊家參勤供列ノ美麗ヲ誠ム

溜詰來へ御達書

当年御改革ハ万事實素相用武備之心掛專要之御主意ニ有之、先頃中掃部頭供立ニ近年美麗ニ相成候品モ有之家格之通復古致候様申達、溜詰之儀ハ御譜代衆一体之目当ニモ相成候事故、各へモ右之心得ニテ同席掃部頭供立之風俗ヲモ見合供立行裝美麗之品ハ被相改、先挾箱金紋其外総テ近來御免之分ハ勿論前々ヨリ仕來候共要用之外ハ相背キ供立之行裝格別質素ニ相改其訳届候様可致候、此段申達候様 御沙汰ニ候、

十二月廿六日

四二九 天文方山路彌左衛門等所刑

天文方山路彌左衛門

其方儀、拜領屋敷へ地守差置候名目ニテ商人等差置候儀ハ難相成候間、先達テ相触候趣モ有之候処、小日向新小川町拜領屋敷へ差置候処之地守彌兵衛義金魚其外商物等致候趣ニ有之候処、先達テ相触候以後右彌兵衛

ハ近辺町家へ為立退候趣ニハ候へ共、右彌兵衛娘其外ハ矢張其儘住居罷在、表向へ民部卿殿與昇齊藤彌三郎へ貸置候趣仕成シ、以前之通り彌兵衛義モ日々世話致候趣彼是不都合之事共如何之事ニ候、必竟触之趣等閑ニ相心得候故之儀ト相聞不束之至ニ候、依之右拜領屋敷被召上差控被 仰付、

十二月廿七日

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

天保十四年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数八八枚）」の記載あり〕

目錄

総覽

高島四郎太夫及連類者江戸へ護送

管絃御式御聴聞之次第

白氣西方ニ出頭

鎌田正純日記鈔

所帯向ニ関スル論達

將軍日光社參記鈔

太守様御着城

水戸中納言殿政務勉勵ヲ賞セラル

〔鎌田正純日記〕

川越藩へノ達書

大阪商賈へ御用金調達諭令

安田助左衛門日記鈔

〔某日記〕

〔鎌田正純日記〕

〔水野忠邦失脚に関する風聞上申〕

島津久明家記鈔

〔鎌田正純日記〕

江戸当時流行俚語

当時御柳宮諸役人数

和蘭国王書翰

天保十四年癸卯 ○清曆道光二十三年
○西曆千八百四十三年

紀元二千五百三年

仁孝天皇 第百十九
フヤヒト 即位二十七年
世恵仁

天保14年

將軍家慶公^{第二十} 襲職七年

齊興公^{第七世} 知政三十五年

四三〇 総覽

正月

朔日 時服九百六十三ヲ下付ス、

二日 時服七十二ヲ下付ス、

十二日 淺草明地^{溜後} 口へ新ニ非人寄場ヲ設ク、

廿日 火ノ番門番ノ火氣ヲ見スシテ盤木乱打ヲ停ム、

廿四日 東宮元服ヲ加フ、

加冠ヲ内大臣近衛忠熙ニ、理髮ヲ青宮權大夫久我建

通ニ命ス、

是月 小朝拜ヲ行フ、

高家横瀬駿河守使ス、

是月 屋敷貸付ノ制限ヲ定ム、

拝領屋敷ヲ他へ貸シ自ラ其外ニ在ルコトハ禁止ノ所

屋敷端ヲ親類へ貸シ置キ住居セシムルハ苦シカラサ

ルモ、他人へ貸付スルヲ停ム、役屋敷へ移リ拝領屋

敷ヲ他へ貸付スルハ苦シカラサルモ、他人ニ造作セ

シムルヲ止ム、幼少ノ者ヲ一類方ニ引取跡屋敷ヲ外

へ貸付スルヲ許ス、町屋敷ハ勿論与力同心ノ屋敷ヲ

貸付スルヲ許ス、火災ニ罹リ外ニ移住スルハ問ハサ

ルモ之ヲ他ニ貸付スルヲ止ム、親類ノ遠近杯ヲ尋ヌ

ル者アレハ遠キ続キニテモ世話スヘキ親類ヲ指置ク

ハ苦シカラス、縁者モ同断ニテ假令近キ親類ニテモ

地代等ヲ徴スルヲ許サス、右ノ通享保度ノ令ヲ守ラ

セ屋敷ニケ所アリ住居セサルノ一方ヲ由緒アル者ニ

貸付スルハ問ハス、

二月

朔日 遠山景高^{安芸守}ヲ浦賀奉行ト為ス、

二日 市中地代店賃ヲ引下ケ録進ス、

曩ニ令シテ市中地代店賃引下ケ方ノ儀ハ寛政以前ノ

旧規ニ置キ、旧規ナキモノハ隣町又ハ同位ノ地所ニ

比較シ一町限り名主・地主立合地代ヲ極メ、店賃モ

之ニ準シ引下ケ録上セシムルニ、此度調査録出シ再

調査スルニ不相当ノ儀ナキヲ以テ尔後録進ノ通貨付セシム、此時市中地代店賃ハ五十一万四千九百四十二兩三分余ニシテ此内十七万二千四百四十九兩余ハ公役銀、七分積金、家守給其外定式臨時ノ町費ニシテ其余ハ地主家主ノ益金トナル、

五日 白氣申酉ニ現ル、

是日初昏初テ出現シ、三月七日ニ至リ消亡スト云、

九日 齊彬稟シテ豊後守ト改メ修理大夫ト称センコトヲ請フ、之ヲ聽ルス、

十九日日光社參ノ節餞別并使者音物等ヲ停ム、

十九日産穢ニ罹ル者ハ別火セシム、

日光社參ノ節陪臣ノ輩若シ産穢ニ罹ル者アレハ旅宿ニ於テ別火シ混雜勿ラシム、故ニ米ル四月産婦人アル者ヲシテ供奉セシムルヲ許ス、

十九日遠国参觀ノ輩ヲシテ本年ハ日光社參ノ後発足セシム、

十九日日光へ参拝ノ節従者ヲ省カシム、

日光社參ノ後参拝ノ万石以上ノ輩供人数成ルヘク減

シ、武器伊達道具供道具等平常旅行ノ節用ユル品ハ相省弓一肩具足一領ヲ限り、陪臣ハ物頭以上具足一領ニ限り其余ノ分ヲ止メシム、且又參觀請暇ノ節参拝ノ輩ハ定例ノ武器人数等右道途ハ省キ、先ツ江戸ニ送ルカ又ハ各領分最寄ノ順路へ遣ハシム、

廿二日藤堂高猷資治通鑑ヲ献ス、

和泉守ハ伊勢国阿濃津領主三十二万三千九百五十石ナリ、藏版ノ資治通鑑二箱ヲ進献ス、

廿四日松平乗全和泉守、三河国西尾領主六万石ヲ寺社奉行ト為ス、

廿四日町奉行遠山景元右衛門尉ヲ大目付ト為ス、

廿四日大坂町奉行阿部正藏遠江守ヲ町奉行ト為ス、

三月

四日 唐物拔荷取締方ヲ令ス、

近年唐物拔荷ノ取締方相弛ミ不正ノ所業アリ、既ニ戊年中越後国新潟港ニ於テ敵科ニ処セラレ、間モナク同港其外北国筋ノ者不正ノ事アルヲ以テ、文化二丑年触示ノ後年数モ経過シ自然心得方相弛ヲ以テ之

ヲ改メシム、

八日 小普請奉行久須美祐明佐渡守ヲ大坂町奉行ト為ス、

十五日廻國修行六部巡礼ノ信票ナキ者ハ関門通行ヲ止ム

従来村役人并菩提所寺院ヨリ勝手ニ信票ヲ交付スル

モ、以来村役人ヨリ代官領主地頭へ願ハシメ、右信

票ナキ者ハ関所ヲ通行セサラシム、

十五日 府下人別改方ヲ令ス、

在方ヨリ新ニ江戸人別ニ入ルヲ許サス、大工・左官

・木挽・杣其外諸職人別、当分出稼ノ者ハ代官領主

地頭役場ニテ承允シ、村役人連頭役人奥書捺印アル

免許状ヲ持シ出府スヘキニ付、右ヲ目当ニ同居致サ

セ又ハ店賃ヲ遣ハスヘシ、但シ右免許状ハ家主方ニ

預リ置キ人別帳ニ記入セス、出稼仮人別帳ニ記シ置

キ、期月ニ至リ帰村セハ其節免許状ヲ返付スヘシ、

奉行稼（公カ）ニ出ツル者モ免許状ヲ持シ出府スヘキニ付、

右書付ヲ目当ニ受人ニ立チ奉公住致サセ、免許状ハ

主人方ニ差出置キ乞暇ノ時受取ルヘシ、但シ之カ為

メ人少ヲ唱ヒ給金ヲ糶上ルヲ停メ、中間・下男ハ二

両二分ヨリ三両迄ヲ限り、下女ハ一兩二分ヨリ二兩

ヲ限り、若輩微弱ノ者ハ限外トス、自今以後八年々

四月兩役所へ一通ツ、指出シ名主方ニ一通控ヒ置カ

シム、家主方ニテ店子并家族召仕同居人ノ生國・菩

提所・年月日マテ巨細ニ記シ名主へ出シ、尚ホ一人

別ニ名主方へ呼寄せ印鑑ヲ改メ人別帳へ調印ノ上、

兩役所ノ分ハ町年寄へ差出サシム、但シ名主方ニ取

置ノ人別帳へハ、改後ノ死亡嫁娶ノ増減ハ勿論同居

人ノ出入等委細ニ留置キ、印鑑改メ濟ノ者アラハ其

段断書ヲ致シ調印致サセ置キ、不時奉公所ヨリノ尋

問ニ差支勿ラシム、年々九月ニ至リ四月差出ノ人別

帳ヲ名主ニ下付シ増減理由ヲ書シ差出サシム、向後

四月人別帳ヲ出セハ奉行所ニテ前年ノ人別帳突合年

付印鑑等迄調査セシム、町方ノ者共出家スルカ又ハ

頭ヲ剃リ道心者願人等ニナリ、吉田白川家陰陽師舞

大夫等へ新規門下ニナリ、身分相応ノ特許状ヲ受ル

者ハ、町役人共ヨリ町奉行所へ申出テシム、市中店

替スル者ハ以来元住居支配ノ名主ヨリ転宅先支配主

へ通セシム、年来府内人別ニ加ハル者ハ帰農ノ沙汰
ナキモ、妻子等モナク裏店借受者ノ内ニハ、一期位
同様ノ者モアルヘクニ付、成ルヘク申諭帰郷致サセ、
府内人別ヲ増サ、ラシメ領主地頭ニ於テモ之ヲ呼戻
シ在方人別減セサラム、

廿一日関東筋ノ悪党ヲ逮捕セシム、

日光社参ノ為メ所在ノ悪党ヲ穿鑿捕拿方ヲ関東筋領
知ノ諸侯二十九家ニ令ス、

廿六日手習師匠ヲ訓諭ス、

手習師匠タル者ハ弟子ノ依怙鼻眞ナク心ヲ用ユベシ
手跡ハ貴賤男女ヲ限ラス学ハサル可カラス、一体士
ノ子弟ハ文武ノ芸能ヲ能スルモ輕輩ニ至テハ学文モ
ナク両親ノ育方誤ル者少ナカラス、幼年ノ習性トナ
リ遂ニ風俗ヲ乱スノ種トナルヲ以テ、教ヲ専ラニス
ル者ハ師匠ニアリ、筆道ノミニアラス、風俗ヲ正シ
礼義ヲ守リ忠孝ヲ訓ユベシ、又師匠タル者ハ自然字
ヲ読ミ得ルモノナレハ、高札ノ文或ハ触示又ハ庭訓
其外実語・大学・小学、婦女ニハ女今川ヲ始メ、女

誠・女孝経ノ類ヲ傍ラニ教ユベシ、凡ソ人情ハ両親
文盲ナルモ我カ子ノ出世ヲ思ハサル者ナシ、依テ師
タル者ハ其子弟ヲ深切ニ教ヒ嚴重ニセハ其親心必ス
厚ク思フベシ、故ニ師匠タル者ハ計ラス政道ノ一助
トナリ世門風俗ノ益少カラサルヲ以テ、此趣意ヲ篤
ト相弁ヘ神妙ニ教育セシメ、教育方善惡ヲ調査セシ
ム、

廿六日齊興財政ヲ減殺セシム、

四日 奢侈濟上ノ家屋ヲ改造セシム、

家作ノ儀先年ヨリ数度触示アルモ漸次弛ミ、長押杉
戸付書院入側付等或ハ櫛形彫物床縁サン杜等ヲ塗リ
金銀ノ唐紙ヲ用ヒ、門玄関様ノ物ヲ建築シ、外見質
素ナルモ都テ意匠ヲ凝ラシ、茶席同様ノ好事築造モ
アリ、奢侈濟上ノ至リ、仮令先代建設ノ家作タリト
モ早々造作ヲ改ムベシ、其外別荘ヲ補理シ格別手広
不相応ノ家作アルヲ以テ、当六月限り質素ニ家作ヲ
改ムベシ、町人夫ノ家作ニハ手広ナルモ花麗奢侈物
数寄ナキ分ハ毀ツニ及ハス、町家不似合不相応ノ家

作ハ残ラス改造セシム、百姓家ニテハ身分不相応ノ
家作花麗ニナクトモ、物好ノ家作ハ自然耕作等怠慢
ノ萌ヲ生シ、風俗頹敗ノ基ニナルヲ以テ、農家並ノ
家作ニ改ムヘシ、仮令手広ナルモ花麗物好ミニ非レ
ハ取毀ツニ及ハス、尤モ農家ノ家作ニ違フモノハ、
追テ普請修復等ノ節古代ノ家作ニ改ムヘシ、速ニ之
ヲ改ムレハ耕作ノ時節難儀ナルヘシ、依テ農間ヲ考
ヘ當十二月中迄ニ改ムヘシ、故ニ右限月ヲ越ヘサラ
シム、

廿八日出稼人奉行人及ヒ出家志願手續ヲ定ム、諸国人別
改ノ令アリ、自今以後在方ノ者江戸人別ニ入ルヲ停
メラル、ヲ以テ、領分知行所役場等ニ在ル家来ヨリ、
精々勸農ヲ諭シ成ル丈ケ人別減セサルヲ計フベシ、
職業ヲ以テ当分出稼又ハ奉公稼ニ出府スル者ハ、村
役人連印ノ願書差出サセ、右願ノ趣承允ノ旨右役場
ニ詰合ノ家来奥印捺印シ相渡シ、小高ノ分知行所ニ
家来ヲ留メス遠国ニテ当地ヘ願等手重ノ向ハ、割元
役ノ者奥書捺印シ、其外出家ハ由緒ナキ者ハ弟子ノ

座アリト雖トモ猥ニ出家セシムヘカラス、若シ抛ナ
ク子細アル者ハ其所ノ領主代官ヘ断リ其意ニ任スベ
キ旨、寛文五年諸宗ヘ条目触示ノ処近年糺方等閑ノ
向アリ、以来ハ出家ヲ願フ者ハ人物并子細等領主地
頭ニテ篤ク吟味ノ上寺社奉行ヘ申通シ聞置ノ上免ル
スベシ、廻国修行六十六部順礼等ニ出ツル者モ前書
出稼ノ者同様ニ取計フベシ、尤モ出家願等ヲ調製シ
添簡等致シタル向ハ其通致スベク、諸藩中抛ナク子
細ニテ出家致シタル分ハ是又寺社奉行ヘ断ルベシ、
吉田白川陰陽師・神事舞太夫等ヨリ許状申請ノ者共
モ其都度添簡又ハ前同様願書ヘ奥書致シ渡スベシ、
近年府内ニ入込ミ妻子等モナク裏店借請ル者ノ内ニ
ハ一期住同様ノ者モアルベク、如此ノ類ハ呼戻シ在
方人別減セサル様取計ヒ申スベシ、

廿八日府下人別ニ加ハル者取締方ヲ令ス、
在方ノ者府内ヘ出テ居住馴ル、ニ随ヒ故郷ヘ戻ラス
其儘人別ニ加ハル者追年増加シ在方人別減スルヲ以
テ、今般悉ク改メ残ラス帰郷ヲ命セラル、然ルニ商

売等ヲ始メ妻子等ヲ持スル者ヲ一般ニ戻サル、ハ難義ナルヲ以テ、格別ノ仁恵ヲ以テ年来人別ニ加ハリ居ル分ハ婦郷ノ沙汰ニ及ハレス、以後取締方左ノ通令セラル、在方ノ者江戸人別ニ入ルヲ禁シ、大工・左官・木挽・杣其外職分出稼ノ為メ出府致シ同居又ハ店借或ハ奉公稼ニ出ツル者ハ、月限り年限り等ニハ村役人へ申立テ、代官領主地頭へ出願セハ村役人連印、代官所ハ手代、私領ハ家来奥書捺印ノ免許状ヲ渡スヲ以テ、出府ノ上家主或ハ主人へ出シ、何方ニ同居或ハ奉公住致ス旨村方へ通達ニ及ヒ、期月年限ニ至レハ一旦村方へ立帰り何ケ度出府スルトモ如此シ、但シ在方ヨリ人別入手重ニ成ル旨ヲ唱ヒ職人ハ賃銀ヲ増シ奉公人ハ給金ヲ糶リ上ル等ヲ止メ、以

以来所役人ヨリ代官領主地頭へ願ヒ、許ノ上添簡又ハ奥書申請スベシ、吉田白川家陰陽師・神事舞太夫ヨリ親規門下ニ成リ、又ハ百姓町人ニテ身分相応ノ許状ヲ請ル者ハ勿論、縦令前々ヨリ配下ニテ神道葬祭或ハ繼目許状請ル時モ、其都度支配領主等へ願ヒ、添簡又ハ奥書ヲ以テ其筋へ許状申請スベシ、在方人別等閑ノ趣ナルヲ以テ向後死亡・出生・嫁娶・出稼・奉公稼ノ者ヲ巨細ニ改メ、番人印形ヲ取り印判改メノ上其理由ヲ書載シ置キ、職分出稼・奉公稼ノ者期月期年ニ戻ラサレハ其段代官領主地頭へ訴出ツベシ、妻子ナク裏店等ヲ借受居ル者ハ早々村方へ呼戻サシム、

是月 異船来テ南海ニ出役ス、

幕府稻葉正守丹後守、山城国淀 領主十万二千石 二命シテ兵ヲ攝海ニ出

シテ之ニ備ヘシム、

是春 水戸家老中山備前守国内ヲ巡視ス、

他国人ノ入来ヲ許シ種扶持ヲ給シ租ヲ免シ、厚誼ヲ忘レ生国ニ帰ル者ハ磔罪ニ処シ、浅間農民ノ凶年ニ

罹ルヲ愍ミ之ヲ救ヒ、祭礼等ヲ行ハシメ、〔權カ〕隋弱博突

ヲ禁シ、(マイク)ト唱フル者ヲ禁シ、犯ス者ハ十

日仕置ト為ス体一本ツツヲ切リ
十日目ニ首ヲ討ツ貧家ノ子弟ニ養育費ヲ

貸与シ百姓ノ營業ヲ止ムル者アリ、領内寺住職ノ不

品行ナル者ハ古法ニ任シ經節ヲカシラセ町々ヲ引廻

シ後其寺ノ門前ニテ首ヲ討ツ、資本ナキ者ニ貸金ヲ

許シ百姓ノ宅ニ栽培スル樹木ヲ示ス、其外數十条ナ

リ、

四三一 高島四郎太夫及連類者江戸へ護送

人足 六人

乗本馬 一疋

右ハ堀田備中守殿御下知之囚人十一人并ニ長崎奉行伊

澤美作守証文ヲ以テ差下シ候囚人一人、江戸町奉行へ

引渡シ候ニ付、我等警固被申付上下五人明十九日長崎

表出立罷在候条、書面之通人馬差出御定之賃錢受取之

無遅滞繼立之、渡船川越等有之場所ハ最寄ヨリ及通達

無差支様取計、休泊之義ハ奥書之通相心得是又無差支

様可取計候、且囚人十二人之内二人ハ網懸〔網カ〕之乗物ニテ

錠下シ、三人ハ網懸ケ目籠ニ入錠下シ、七人ハ駕籠ニ

乗セ七坂 御城代御証文長崎奉行伊澤美作守証文ヲ以

テ連越候ニ付、休泊共其所へ預ケ置証文取之候間、番

人付添非常之節ハ早速持退候人夫ノ手当可取置候、且

又休泊共木錢米代相払罷越候ニ付、賄之義ハ一汁一菜

之外馳走ケ間數儀無之様有合之品タリトモ差出申間數

候、奥書休泊付之通旅宿七軒囚人合宿之積リ手当可有

之積〔行カ〕リ手当可有之候、此先触無遅滞繼送り江戸飯田町

柳生伊勢守殿屋敷へ可相届候、已上、

長崎奉行組与力書役

卯正月十八日

水野絃太夫

人足 十五人

荷輕尻馬 四人

右ハ堀田備中守殿御下知之囚人十一人并ニ長崎奉行伊澤

美作守断ヲ以テ差下候囚人一人江戸町奉行へ引渡ニ付

為差添御役所附成瀬嘉右衛門・井原甚太夫・池島七郎

大夫・林四郎・山本惣次郎・吉田寛吾・井原又十郎・

尾北三十郎・池島鐵彌・吉岡元太郎・中村儀三郎・江

崎友次郎・塚原範三・高尾泰太夫・久保山正助・杉山

鷹三・池島林平・野村久米右衛門・竹内只助・西川米

三郎・船番牛島雄作・諸態祐助、町司山本得三・牧野

八郎上下四十八人、明十九日長崎表致出立候ニ付、書

面之通人馬差出御定之賃錢請取之、無遲滯繼立、渡船

・川越有之場所ハ前宿ヨリ及通達無差支様可取計、且

囚人十二人之内二人ハ網懸候乗物ニテ錠下シ、三人ハ

網懸目籠ニ入錠下シ、七人ハ加籠ニ乗セ大坂 御城代

御証文長崎奉行伊澤美作守証文ヲ以連越候ニ付、休泊

トモ其所ニ預リ置証文取之候間、番人付添非常之節ハ

早速持退候人夫之手当可差置候、且又休泊共木錢米代

相払罷越候ニ付、賄之義ハ一汁一菜之外馳走ケ間數儀

無之様所有合之品タリ共差出申間數候、休泊付之通旅

宿七軒囚人合宿之積手当可有之候、此先觸無遲滯繼送

リ江戸飯田町堀留柳生伊勢守殿へ可被相届候、已上、

長崎奉行組与力書役

卯正月十八日

宿々問屋
年寄中

水野絃太夫

諸組与力格
長崎会所調役頭取
高島四郎太夫

唐大通詞
神代 徳次郎

元唐通詞ニテ致欠落候

都城清左衛門事
山田蘇作

右高島四郎太夫実子惣領

町年寄見習
高島淺五郎

唐大通詞
西村俊三郎

長崎会所吟味役
横瀬大助

高島四郎太夫手代
檜林嘉兵衛

城戸治八

端物目利
石井廉平

島原町

山口屋政八

右同人娘滿事

遊女初紫

右囚人四郎太夫外十人從長崎江戸へ差下シ候間、道中

人足書之泊々ニテハ所之者番致シ囚人計食ヲ喰ハセ置

江戸鳥居甲斐守方迄急度可送届モノ也、

卯正月十九日

長崎奉行

伊澤美作守印

右宿次年寄

次舟

長崎奉行支配

長崎会所吟味役

柘横長次郎

右之者吟味之儀有之、江戸町奉行鳥居甲斐守方へ差遣

候ニ付、宿々人馬差出無滞可相送モノ也、

卯正月

長崎奉行

伊澤美作守印

宿々問屋

年寄中

人足 三人

輕尻馬 一疋

右ハ明後十九日長崎出立江戸迄囚人差添為御用罷越候

間、宿々人馬無滞差出可申候、以上、

卯正月十七日

長崎奉行組与力

中澤市郎兵衛印

宿々問屋

年寄中

人足 三人

輕尻馬 一疋

右同断

卯正月十七日

長崎奉行組与力

島田伊三郎印

同断

人足 十五人

輕尻馬 一疋用意

藥師寺徳之助

乙名頭取

家原嘉四郎

唐大通詞

平野繁十郎

会所諸弘役

近藤雄藏

勝山町乙名

佐十郎

端物目利

長崎九郎兵衛

右ハ長崎藥師寺徳之助并外五人明十九日出立ニテ江戸迄囚人為差添罷越候間、宿々人馬無滞被差出度候、仍テ先触如件、

卯正月十八日

藥師寺卯右衛門手代

眞野甚助印

人足 四十人

軽尻馬 四疋

右之輩四郎大夫内意ヲ受五島ノ浦へ鯨問屋取拵表向鯨渡世ト名付内々唐土へ文通致シ軍勢ヲ日本へ引受、右

之輩先陣道案内致候積之所、此度及露頭、尚又去冬唐船ヨリ四郎大夫へ之文通ヲ長崎御奉行所之手ニ入り是迄之始末明白ニ相分リ、同類高十七人（總）賀籠ニテ正月十九日長崎表出立有之、江戸表へ御渡シ相成候事、一松平肥前守様長崎御番ニテ御同勢、御陣所へ御詰被成敵敷御固被成候事、

長崎六人衆筆頭高島四郎大夫昨寅年九月御召捕ニ相成入牢致シ、右高島屋敷御取払ニ欠所品凡左之通、

- 一 五十人持石火矢 二挺
- 一 三十人持石火矢 五挺
- 一 十人持石火矢 二十挺
- 一 五人持石火矢 十九挺
- 一 新製筒 三挺
- 一 太鼓張筒 三挺
- 一 五十目筒其外小筒共 三百七十挺
- 一 一種ケ島小筒 三百三挺
- 一 武具上下メ七十人前

〔張紙〕「一」ル號數百所持シタリト此内ナラム

一大身鎧其外武器數不知

一玉藥焰消藏〔禮禮〕

一唐物藏

一ヶ所

三ヶ所

外ニ土藏其外道具衣類燒捨ニ相成、役人廿五人入牢、

銀主伊勢屋與兵衛、唐通詞石橋友右衛門・杉林三十

郎其外同類數不知、切腹致候モノモ有之候、

右ハ此度御詮議之儀有之、明十九日長崎表出立江戸町

奉行鳥井甲斐守御役宅迄御証文ヲ以テ差下シ候ニ付、

道中人馬宿々ニテハ所之者番致シ、囚人計食喰ハセ急

度可送届モノ也、

卯正月十八日

長崎奉行

伊澤 美作守印

組与力

水野 絃太夫印

安藤小右衛門印

兒山 締之介印

宿々問屋

年寄中

長崎六人衆之筆頭高島四郎太夫昨年九月召捕入牢、屋

敷取払欠所之品々左之通、五十人持之石火矢七挺、三

十人持之石火矢五十挺、十人持之筒二十挺、五人持筒

十九挺、新製石火矢三挺、太鼓張筒三挺、五十目筒三

百七十一挺、種子島小筒三百三十挺、武器上下七十人

分、太刀鎗其外武器數不知、玉藥焰消藏一ヶ所、唐物

藏三ヶ所外ニ土藏五ヶ所、其外武器衣類ハ御燒捨ニ相

成、子岡野次郎御預越城昌十郎・神代政之助・神代内

膳・中松喜左衛門、子岡其外同類大身之輩上役人共二

十五人入牢、銀主伊勢屋又右衛門・唐通詞石橋友右衛

門・松林三郎、尚此人數ハ追手不成前ニ切腹致候由、

右之輩高島四郎太夫内意ヲ請五島浦ニ鯨問屋ト唱表向

ハ鯨渡世ト名附内々ハ唐へ文通致シ、唐軍勢ヲ日本へ

引受、右之輩先陣ノ手引道案内ヲ致シ日本攻取候積之

由、右之条々此度露顯致シ尚又去冬唐船ヨリ四郎太夫

へノ文通御奉行之手ニ入、是迄之始末明白ニ相成候、

當時島居平七同平八兄弟ハ砲術伝習ノ為メ長崎ニ出テ高

島カ邸ニ入塾シタリシカ、四郎太夫嫌疑ニ罹リ入獄シ門

人其他數十名モ連坐、鳥居兄弟モ奉行所ノ召喚藩邸聞役ニ達セシ故、踪跡不明ノ旨届出ツ、本人ハ密ニ帰国セシメ而シテ後姓名ヲ換ヘ成田ト改メタリ、同塾ニアリシ熊本藩池田敬太ハ拘留セラレタリ（洋式砲術拡張ノ部ニ詳記ス）、

四三二 管絃御式御聴聞之次第〔朱書〕（近衛家藏鈔）

正月十九日〔朱書〕（天保十四年癸卯）
〔天保二年辛卯カ〕

上意官位

松平兵庫頭〔朱書〕齊彬

〔朱書〕（重要）松平榮翁事、隠居以後近年迄モ国務無怠介助致シ、殊

ニ稀成高年ニオヨヒ且ハ御由緒柄別段之訳ヲ以、從三位被 仰付之旨

右御直ニ被 仰含之、〔表題ト文書ハ別ナレドモ掲載ス〕

四三三 白氣西方ニ出頭（道島正亮紀事鈔）

癸卯天保十四年二月昏時分ヨリ五ツ過迄西田鹿兒島城下ヨリ見

ルニ当テ白氣出現、長サ教丈、同十三日晚晴明ニテ

能明カナリ、天門館水間天文方水間嘉藤太 子ヨリ視テ彗星ナ

ルコトヲ知り大底ノ凶世ニ普シ、子モ亦享之、予三月

三日晚望視ルニ殆ント薄クシテ難見分ヨクノ見レハ

誠ニ微ナリ、水間子モ真見ノ処ハ難見分処、相見得分

野ハ魯国ニモ又福洲トモイヘトモサタカナラス、日本

ニ押当候ヘハ貫伯ニ当リ候由、西南ニ出レハ貫伯トハ

雲泥ノ違ニ候間、別テ不審ニ相考候処、曉ニハ東ニ出

テ日ニ随テ西ストイヘリ、三月七日ニ至リ消亡ス、

白氣考

澁川助左衛門

此節西ヨリ南ヘ懸ケ薄暮ヨリ白氣見ヘ候、右ハ白氣ニ候哉、星ニ候哉、吉凶之兆ニモ候哉之段、御尋之趣左

ニ御答申上候、是ハ星ニテハ御座有間敷候、西洋ニテ

近来癸明仕候黄道光日之行道ニ光リ申儀御座候 相唱候類ニモ可有御座

ト奉存候、夫則日之光地之游氣映シテ日之出入之時日

之行道筋ヨリ白氣相頭候事ニ御座候、右ハ全ク是等之

類ニモ可有御座候哉、左候ヘハ格別珍敷義ニハ無之、

毎々相頭候事ニテ人事之吉凶ニ抱リ候事ニハ毛頭無御

座候、乍去僅ニ兩三日見留候ノミニテ未タ耽ト治定仕兼候間猶此以後モ頭レ候ハ、篤ト見留候上治定之儀可申上候、

卯二月

當時ノ世情

天文の事はいさしらす、此度出る星を見るに画にかける屁の如し、さすれば放屁星ともいふへきか、放屁おもんへかりなきときは必くさきふれありとか、唐歌にも放屁千里、是民の留る処と言へり、へくさひ延命五こく成就、ぶらん長久天下大屁の星なるべし

君か代やくさきも

なひく放屁星

天保十四年癸卯二月

白氣勘

從今月上旬毎夜昏時見白氣長五計丈、自西方向東南方其芒氣所指、初指赤道以南二十五六度夜々漸移北指赤

道以南十一二度也、因之推是有彗星微動似移座、太陽天与彗星所在天雖有高、卑彼照太陽生光芒、又随太陽入地下者也、天経或問彗星之条云、彗者火氣狭土上升結聚而成彗云々、人云、晨見東方芒則西指、夕見西方芒則東指云々、又云、日久勢尽力衰漸乃滅云々、近来時氣不順、今春寒余難去之故、上升之氣凝結成彗者欵、又諸書举其占者、或為兵革喪亡・水火地震・流疫等之徵、然彗星出現古來每度其応徵有無者因治乱之時也、無定例今也、

聖德遍四海恩光及万民之時也、何有變異之応乎、況今度出現不近紫微太微天市等之垣何有其恐乎、且近日春暖舒暢芒氣自然可消散欵、

二月廿一日

陰陽頭安倍朝臣晴雄

陰陽寮

勘申白氣出現之事

当月上旬以来昏、白氣出現於申酉之方、其形如布長數十丈、戌刻後設從十日頃晴陰不足委難測、十三日十四

日之夜所見白氣次第薄、從婁宿之度至參星之東南指非

雲彗星之如光芒、夫氣者種々之氣雖多、此度所現去秋

已來晴雨寒暖至于今不順而所為也、但歷史舉其占兵革

喪亡水火疾病等之徵也、氣出現之事和漢其徵有無者因

時之治亂無定例者也、此度之氣所發之分野當西國金氣

昌陽其所大風若有洪水失火疾病之類乎、虫其理妖不勝

德元來治世、

聖德遍四方何有變異之慮乎、白氣漸薄無異變而消散、

謹勸申如件、

保行

二月十八日

保源
保救

勸申天變之事

当月上旬以來出現白氣申酉之間如一匹之布長數丈、自

天困之刃至參南、前漢建平元年十二月白氣出西南從地

上至天出參下貫天厠石云、天子有陰病

晉書云、凡白虹者百殃之本衆亂所基、霧者衆邪之氣陰

來冒陽、凡白虹霧 姦臣謀君

同光熙元年十二月甲申有白氣、若虹中天北下至地夜見

五日乃滅占云、大兵起、

謹考、此度之天變、疾病或大風或大旱大水妖不勝德

云々、依

御慎災却為慶、

二月

陰陽助保救

天保十四年癸卯

彗星考

足立左内

去ル七月初昏西南之方ニ彗星光芒ニモ可有之哉ト白氣

相見ヘ申候処、睨ト彗星トモ難見定、其長地平上凡五

十度計、猶地下之長難計、尤一昨八日相同候所、地際

雲多ク候得共、雲之上其光相顯レ、矢張七日之所在ト

粗同様ニ御座候間、全彗星ニ可有御座候、右ニ付考証

之処、無差憚申上候様被仰渡候ニ付、則相調候処、函

書集成之内、按宋史（微カ）徽宗本紀五年春正月戊戌彗星出東

方、其長竟天、○按金史哀宗本紀天与元年閏九月己酉

彗星出東方、白色長丈余彎曲如象牙角軫南行、至十二日長二丈、十六日月蝕不見、二十七日五更又出東南約長四五丈、至十月朔日如滅、漢土ニモ右等之類有之、本邦ニモ 醍醐天皇延喜五年四月彗星見、長三十余丈光芒指巽方或長竟天至ル、五月初旬始不見、扶桑略記、近頃明和六年七月中ヨリ相見候彗星ハ、其長七丈二尺余ト旧記ニ相見候、○蘭書「ストイク」之内西洋千六百九十五年元禄八年乙亥ニ当ル十月廿八日「アラシルレ」地名港ニ於テ日ノ出一時前ニ東方ニ彗星ヲ見タリ、其頭ヲ見候事不能、十月三十日此彗星ヲ「シラタア」地名ニ於テ見タリ、朝未明半時計リ益其頭ヲ見スト、漢土西洋ノ記録ニ符合仕候ニ付、此度相見候白氣彗ニ御座候へハ右等之類ト奉存候、尤古来ヨリ凶兆之由申伝候へ共、西洋近来之説ニテハ御座有間敷候、依之此段申上候、

卯二月天保十四年癸卯

四三四 参考 鎌田正純日記鈔

天保十四年三月廿六日

一今日ハ御一門方初独礼其外諸役人月次御礼罷出候、無役之面々迄被仰渡御用之儀候間可罷出旨廻達、昨日承知ニ付、上下着用ニテ四ツ前ヨリ出勤イタシ候処、於敷舞台仰出承知イタシ候、訳ハ御所帶方御難波ニ付、尚又御取縮、一統節儉ヲ心掛候様トノ御趣意ニテ候、委細ハ事ニ長キ故爰ニ略ス、

三月晦日曇西

一今日ハ於島津數馬殿宅ニ先日從

太守様ノ仰出并ニ御家老衆御添書一番組中へ弘方イタシ、四ツ時ヨリ顯娃娃織部殿へ参同道ニテ出会、九ツ前弘方相濟帰家、

四三五 所帶向ニ関スル論達

御所帶向連年御不練合ニ成立、文政亥・子年比ニ至リ候テハ既ニ公務モ被取調兼、江戸詰人數御賄方十ヶ月余相滞、余ハ右ニ準候次第故、太守齊興様 故三位

重豪公 様深ク被遊 御配慮、品々御相談之上御改革之

儀被 仰出、夫迄三都之御太借元利共一往御断ニテ、年々之御産物料ヲ以三都御国許共御用分相弁候様被仰付旨、御銀主共江利銀等御断之相談取掛候得共、何レモ無余儀御訳柄付致出銀候末ニ候得ハ、容易ニ承引無之、却テ品々御難題筋申立、勿論新ニ御銀主御頼入モ有之候得共、是以右銀主共迷惑ニ相成事候得ハ、誰御改革之御本手引受候者モ無之、暫ハ双方手切之時宜為成立事候得共、再往無和理及理解乍漸熟談相調、先可也致出銀候ニ付、夫ヨリ御産物繰登候仕向綿密取計候様、分テ 御沙汰被為 在、被掛置候御役々共ニモ折角懸心頭 御趣意通取計之折柄、無御抛御吉凶御相談、其上両度之御上納金度々之疏人參府等莫太之御金高ニヲヨヒ、大坂表御差繰モ必至御難渋之御時節、第一之砂糖直段礮ト下落、旁太粧之御手違相成候、御改革之儀被 仰出候初比迄ハ、御家廻リ雨洩サヘ御修覆モ調兼候ニ付、一統江之被下分モ分限ニ応シ引方迄モ被仰付候砌故、詰向難被捨置御払方等モ太分相滞居候得共、押テ向々御金割被相定稠敷御取縮有之候得共、眼前御

難渋之御振合相心得候故、イト御儉約相用ヒ其詮モ相見得事候処、近年大坂御続金丈ハ兎哉角無御滞御繰立相調候ニ随ヒ一統油断之姿候哉、尤御改革モ最早十ヶ年余モ相立、過去候儀ハ等閑相成ハ人情之常、物毎籠略之方ニ傾キ、近年ハ向々御改革之取扱殊之外相弛候様被聞召上故、年々嵩御統相増漸々大坂御新借モ相嵩、今通ニテハ御利払元済共御違約之外有之間敷、左候時ハ新組之御銀主共出銀御断可申出ハ必定ニテ、若御改革以前之時宜共成立候得ハ、此上外ニ御頼入之手筋(筋力)モ無之、誠ニ一大事之御時節ト 思召候付、夫々此訳能々相弁ヘ急度右様之時宜不及様兼テ不叶事ニ候、依之今般 御身辺之儀ヨリ格別御省略御用ヒ遊シ、夫々被定置候御統料ヲ初、御減少被仰付候付、一統此旨ヲ存シ聊緩急之儀無之様、就テハ每度被仰出候通、御所帯之根本ハ御産物御繰立手続第一之事候付、弥綿密取計猶有来御産物迄ニテハ其品格別下落之節礮(礮カ)ト補調兼候付、先度モ被仰付置候通、手広之御領内ニ候間、嵩々御産物モ御仕登可取計、夫ニ付テハ定品々故障之筋モ

可有之^(候脱カ)得共、御改革付テハ旧式ニ不相泥様相心得、

次ニハ於御国元何様行届候テモ、大坂御払口依精疎格別之相違相成由ニ付、誠実ニ心懸決テ夫形無之様、就中江戸之儀ハ向々江御払日々太粧之金高相及候間、掛御役々能々精微ニ可致取扱、尤是迄詰人数モ追々被相減、御家作等モ此涯不及御手入様永久之御仕向相改候付、当分ニテハ以前御入用ヨリハ格別相減候半、殊ニ御改革初迄ハ定リ兼候儀モ最早御治定之儀モ可有之候間、此節猶又御金割被相定、京大坂ニテモ同様相究置、聊迪モ不致超過様可取計、何分ニモ此基本後立候得ハ御改革ハ目前崩立候ニ付、其所深ク相心得候様、就テハ御改革被掛置候者共ハ勿論^(其脱カ)外之向々被仰渡候趣堅ク相守、互ニ一致イタシ無緩疎取計候様、且又近年一統驕奢之風俗押移、著類又ハ持道具等ニ至分限不相心之儀有之故ハ身上差迫候者不少別テ如何之至候間、向後質素節儉ヲ相守決テ取違之儀無之様、扱又分限之程ニ応シ知行御扶持方モ被下置候付、別段御救筋申出候儀ハ無之賦候得共、是迄心得違之者モ有之候付、以来

何様申出候共被取揚間敷趣共、此節御別紙之通、

御筆ヲ以被 仰出、何共恐入難有 御趣意之御事候条、一統謹テ可奉承知候、右ニ付テハ 仰出之通御所帶方連々御難渋、既ニ文政之末ニ至候テハ 公務モ難被取調、江戸詰人数御賄モ十ヶ月余ニヲヨヒ相滞、余ハ右ニ準候形行ニテ、別テ被遊 御厚配難被捨置処ヨリ、御改革之儀被 仰出候得共、一往ハ御銀主共元利御断之儀不致承引或ハ新御銀主共ニモ御本手銀差出兼候儀共御沙汰通之時宜合ニテ、必至御難題之御時節モ有之候得共、及再往段々無余儀遂頼談漸熟談相調、勿論御産物品御繰登方ニ付テモ御改革初迄ハ物毎別テ不行届ニ有之候付、追々稠敷沙汰イタシ候故、此比ニ至リ候テハ砂糖其外不依何色漸ク手入製法等モ行届候様成立、夫丈ハ大坂表御払口モ相進、先御統金ノ無滞様御繰立相調候得共、其内ニハ無御抛御吉凶或ハ御上納金旁莫大之御入価ニテ御新借モ有之、今以全御古借御元済ハ勿論利足御下渡之手数モ不至事候処、追々諸向御改革相絶、御金割返ニテモ不引足処ヨリ、嵩御統等取計弥

以御新借相嵩、今通ニテハ終ニ御改革モ崩立候様可成
 立哉ト被遊 御厚配、猶 御身辺ヨリ格外之御省略御
 用ヒ被定置候、御統料初御減少可被仰付トノ御事共重
 覺誠以何共恐入次第ニ候、依之猶此上御産物品相増繰
 登方ニ相成候様、掛御役々粉骨ヲ尽シテ取計候ハ、大
 坂御弘口之吟味ハ於彼地御役々精微ニ行届候様取扱可
 有之事ニ付、御趣意厚奉汲受今一涯御儉約筋懸心頭、
 聊モ御費筋之儀共無之様、就中御金割被定置候向々ハ
 是非共年々被究置候内ヲ以相弁シ、決テ超過之儀共無
 之様取計、近年中急度御改革之詮相立奉安 尊慮候様
 面々心掛肝要仕候、且又質素節儉之儀ニ付テハ、每度
 申渡置候趣有之候処、是以一統驕奢之風俗押移、着類
 持道具分限不相応ニテ身上差迫候者不少旨、被 聞召
 上候段 御沙汰之趣共重々何共奉恐入、至我々申訳モ
 無之事候条、弥以追々申渡置候通、御時節柄ヲ汲受面
 々万端無益ノ失費相省キ折角籠服等相用、兼テ被下置
 候知行御扶持方等ヲ以取統、決テ別段御救助等申出候
 儀有之間敷候、

右之通奉承知猶又致精勤候様組中江可被申渡候、

三月

和 泉島津
 主 計久宝
 石 見島津
 安 房菱刈
 登 島津
 央 猪飼
 尚敏

四三六 参考 將軍日光社參記鈔

元和三年丁巳四月權現様駿州久野ヨリ日光山へ御遷

座正遷宮御執行

秀忠公 御社參 元和三丁巳四月

同 同 同 八壬戌四月

家光公 同 寛永二乙丑七月

秀忠公 同 同 四丁卯四月

同 同 同 六己巳四月

同 同 同 九壬申四月

同 同 同 同十一甲戌九月

季忠公 御社参 寛永十七庚辰四月

同 同 同 十九壬午四月

同 同 同 正保四丁亥四月

家綱公 同 慶安二己丑四月

同 同 寛文三癸卯四月

吉宗公 同 享保十三戊申四月

家治公 同 安永五丙申四月

家慶公 同 天保十四癸卯四月

以上將軍社参、外様大小名ハ社参後参拜シ、在国ナレ

ハ家老代参ス○普代大名ハ將軍エ扈從スルヲ例規トス

天保十四年四月ノ社参後齊興公御直参アリタリ、

四三七 太守様御着城

天保十四年五月十一日

太守様御着城ノ筈ニテ五ツ半時ヨリ出勤、四ツ後御城

下へ罷出九ツ過御光着有之、左候テ八ツ前ヨリ頼合御

暇イタシ帰家、

四三八 水戸中納言殿政務勉勵ヲ賞セラル

尾張殿水戸殿御帰国之御暇被 仰出之、御先例之通御

鷹御馬御拝領、

五月十六日

水戸中納言^昭殿へ 御使寶賀山城守ヲ以テ明十八日別

段 御対顔被為遊候間、御登 城被有之候様被 仰遣

之、

五月十七日

御座間ニテ

水戸中納言殿へ

御太刀 一腰 銘包清 代金百枚之由

黄金 百枚

御鞍〔鑑カ〕 梨子地金具 蒔絵之由

一昨年来国政格別被行届文武トモ不絶研究被有之候趣

一段之事ニ被

思召候、尚此上御在邑中御領分末々迄

公儀御徳化ニ相靡、被遊 御安心候様厚御世話可被成候、依之御伝来之御太刀被遣候、永御秘蔵可被成候、

且御領分中御巡見等之節被用候様御鞍鍔被遣之候、并何カノ御用途トシテ黄金被遣之候、

源義殿遺志ヲ被継益被励精忠候様可被成候、

右御対顔畢テ於竹之間御吸物御菓子被遣之、右御太

刀ハ

文恭院様御祝事之節御帯被為在候由、尤御秘物之由、

黄金ハ其後御家中ヘ不殘御配分相成候ヨシ、

五月十七日

水戸家ハ従来御親交ナルノミナラス、齊彬公ハ殊ニ御親密ナルカ故、御側役ヲ以テ御内端ヨリ御祝詞且ツ物ヲ送ラレタリ（表面ノ御祝儀ハ御使番ヲ以テス）、

四三九 〔鎌田正純日記〕

六月十五日曇間々雨、八ツ前大降リ

太守様御出座有之五ツ過ヨリ出勤、御礼席へ罷出九ツ

前頼合御暇ニテ帰家、供川畑平之助也、

一 今日正源院様御正忌日ニ付、南林寺墓所へ山次庄助代参申付候事、

一 今日日当山狩夫銀差出候、右ニ付郡見廻参所産物ヲモ田賦之差候事、

四四〇 川越藩へノ達書

御領分川越侯加封武藏国大里郡・横見郡・賀美郡・那賀郡・兒玉郡・榛澤郡、上野国那波郡・群馬郡・勢多郡、近江国野洲郡・蒲生郡・栗太郡之内、込高共貳万七千六百十石余、村替上ケ知被

仰付、右為代知關保右衛門支配所之内相模国三浦郡・鎌倉郡、武藏国久良岐郡・比企郡、浦賀奉行御領所之内相模国三浦郡之内、高倉万九千八百十八石余高付目録之通相渡候間、銘々へ相渡シ従当卯年物成郷村見取場小物成林等受取可被申候、上ケ知之儀ハ多羅尾久右衛門・北條雄之介・林部善太左衛門当分御預所ニ相成候ニ付、物成郷村見取場小物成林等引渡可被申候、且ツ上ケ知帳案文相渡候間、右之振合ニ取調可被差出候、

右ハ水野越前守邦殿御差函ニ付梶野土佐守・井上備前守申達、

卯六月

右被 仰渡之趣奉承知候、以上、

松平大和守家来
小笠原源治印

四四一 大坂商賈へ御用金調達諭令

^{〔坂〕}大阪於兩御役所御用金被仰渡御演舌之覚

去々丑年^{天保十}二^{辛丑}以来 幕政一新格別御儉素に被遊、追々被 仰出候 御仁徳之程ハ銘々難有相心得候儀ニ可有之、猶此上も上下安穩に太平を楽候様にとの趣度々台慮に有之、因て此度諸家御救筋窮民御賑恤之為多分之府財并指被仰出、諸家の面々も分限を守節儉行届候様御沙汰有之、然る上ハ近来勝手向も立直り可申、左候ハ町人共融通にも相成りおのづから御余沢を蒙り候様可成行、当地之儀ハ天下の中央其上海運之利宜キ要地、数百里外より諸品輻輳、おのづから商売の取引も手広

く巨万の富を保候事故御用金相勤、近くハ文化年中兩度に金七十四万兩指出一廉の御奉公いたし候事に付、御恩意も深く容易に御用金をも不被仰付、既に先年兩城御普請之節を首として御用金可被仰付時宜諸家並余国之献金等も有之、旁以御除に相成候ハ全く臨時の御用途に被届候儀に候、然処此度窮民御賑恤其外普く御仁政を被播、右御手当御府財を以可被弁処、是迄打続莫大之御用途も有之上之儀、万一非常之御備に響合候てハ不容易儀に付、其方共一同へ御用金被仰候事に候、勿論御用金之儀ハ明年暮より夫々二十ヶ年に割合せ、一ヶ年二株^{〔株〕}利被下置御増加御下戻可有之候、畢竟巨万之富を握り又ハ一時に数千金之貸聴いたし候儀、銘々指働にて、外々之助に依り候にハ無之候得共、諸家之先祖矢石を冒し鋒鏑に触れ巧力を以て爵録を保、子孫にも参勤等にて安居之暇無之、其上御軍役之外臨時之御手伝等相勤大金等献納いたし候儀に有之、商売に至り候事ハ平常之勤場と申も無之、二百年昇平之御徳沢に浴し安逸に暮し難有儀と、いつれもわきまへ居候儀

に可有之、此度御用金ハ新政之御徳意を奉助事にて、如此明時に逢ひ一際の御奉公いたし、永世御記録にも家名を著し、是を子孫迄も聞伝へ自淳の実を尚ひ、驕情之所行相慎、家業弥盛に可相成候間、右申渡候趣意篤と相弁無異儀御受可致候、

卯七月

右西町奉行大須賀佐渡守・東町奉行水野若狭守・御勘定方吟味役羽倉外記立会申渡有之候事、

四四二 参考 安田助左衛門日記鈔

天保十四年卯八月十三日郡奉行御役被仰付、御役料銀式枚被下置、左候テ栗野・横川・踊・日當山ノ四ヶ郷請持掛被仰付候、今般勸農方御改正分テ被仰出、笑左衛門殿御宅へ被召呼 御趣意ノ趣細々致承知候、九月八日御内用ノ儀有之栗野表へ被差越候段致承知、御趣法掛御用人森川利右衛門其外郡奉行御代官同道差入、北方村アバ下ヨリ五町程ノ所ニ御蔵地見分相済、左候テ同月眞幸組御蔵并加治木出物蔵共御引直被仰付候旨

被仰渡、尤惣御蔵御成就ノ上当秋ヨリ取納相成候、

天保十四年卯閏九月帖佐鍋倉村ノ内へ栗野両御蔵屯蔵被召立候付掛被仰付、且又右御米津下道溝邊ヨリ帖佐へ被相通且又掛被仰付相勤、十一月十日迄致成就候、

天保十四年卯十一月栗野稻葉崎村ト恒次村トノ間ノ大河ト、ロト申場所大岩出候テ川幅至テ狭ク相成、供水ノ節水引悪敷栗野中及難渋候付、両方ノ岩六七間割除河幅ヲ広メ申度、且恒次村へ観音樋ト申候テ田地掛ノ用水滝ノ上ヨリ樋相掛用水ヲ取ル場所所有之、修覆ノ節過分ノ夫数ニ及ヒ所中難渋ニ及候付、岩切除滝ノ上ヨリ溝ヲ付用水ヲ取候様致度申上候処、吟味ノ通御内用計ヲ以被仰付、御普請取付翌四月迄ニ致成就、栗野ノ儀実ニ永世ノ利益故一統大悦イタシ候、

四四三 〔某日記〕

天保十四年卯九月九日

一御樓門御建替ハ天保十四年卯三月十六日ヨリ御取掛

同九月九日御成就、通場被仰付候事、

一御樓門御成就、引統キ御兵具藏東北引廻シ御建替、

北御門及ヒ張番所等一切新造被仰付、

一御樓門又ハ御兵具藏北御門張番所等元祿^(一)年之大火

後御建築ニナリタル故、凡百四十年ヲ経タル古家、

加之虫付相成タリト云、

四四四 〔鎌田正純日記〕

閏九月十一日曇辰^{間々}雨々

一今日ハ四ツヨリ出勤、去ル八日ヨリ昨日迄日数三日

福昌寺ニ於テ

大慈院様御三回忌御法事御執行有之、右被為濟今日伺

御機嫌有之、四ツ後相濟、左候テ頼合御暇ニテ帰家、

供森田清五郎也、

一八ツ後ヨリ上村半兵衛殿入来、内用之儀彼是相頼夜入

四ツ時分被帰候、

一今朝相良七郎左衛門殿一刻入来ニテ候也、

四四五 〔水野忠邦失脚に関する風聞上申〕

閏九月十六日写

水野越前守様、去ル十三日御老中御役御免差控被仰付

内、今晚右之御門前騒動一件、御留守居方ヨリ御聞合

相成候処、昨十三日夜五ツ時比何者共不相分中^(虫橋)町

人之者凡五六百人程水野越前守様御門前江相集リ、何

様候哉、右御屋敷内へ礫打込、坂下御門御用人様辻番

所之下、打台扉之下陳、雪隠屏迄抜ハメ打コハシ、畳

ネタ板等引離^(虫橋)等モ打迎其外通用御門并左右板カヘ

石礫打付候斯有之、右ニ付早速町奉行鳥居甲斐守一騎

駈付坂下御門被召圍候、追々力同心其外家来等モ差

越候由、松平肥前守様・土井大炊頭様ヨリモ御人数被

差出候、西丸ヨリ坂下御門亦桔梗御門辺被相開候由、

尤騎馬等モ有之、非常之御手当之御備ト相見得申候、

右騒働五ツ時ヨリ四ツ半時迄之間御座候、狼籍人数之

内七八人ハ鳥井殿御手先江被召捕由、松平駿河守様其

外御近方之御方様ナトモ御圍之御手伝御座候由、右之

通御留守居方ヨリ承合見分イタシ申出候間、此旨申上候、

一先年田沼時分印旛之沼堀有之、手モ兼居候半ト取込ニ相成候由、又水野ナト吟味ニテ岡山侯ナト御手伝ニテ過分之御金上納之由、一日ニ入目五千兩ツ、三ヶ年相掛ル見賦ニテ当分最中之処、右之御役御免ニテ取止ニ相成候由承申候、前代稀成事ニ候、此節之公儀向大交ト申事ニ御座候、追々御役御免之御方モ可有之ト申事ニ御座候、

四四六 島津久明家記鈔

天保十四年十一月廿一日

来年

御参勤御時節御伺被

仰上候処、去年琉球人被

召連候ニ付、被成御用捨、来年六月天保十五年甲辰中可被遊

御参府旨被

仰出候、御祝詞申上候、

十一月廿一日

使者 伊東藤内

十一月廿八日

一旦那久風様御事四ツ時御出勤、九ツ時ヨリ千眼寺江大信院重豪様御点眼御供養ニ付御代参被御勤、八ツ時御帰之事、

十二月

島津又六郎

右以 思召御家伝犬追物

御名代稽古被

仰付候、

十二月

〔諏訪武歌カ〕 治部

四四七 〔鎌田正純日記〕

十二月廿一日晴未雨間々

一今日ハ

寬陽院光久公 様百五十年忌御法事去月廿九日御執行有之、

右ニ付御法樂御能有之、五ツ時揃ニテ出勤相詰、七ツ

半時分相済退出、帰家、供山次左衛門ナリ、

一相帰候処桂内記殿入来ニテ四ツ時分迄相咄被帰候、尤

相良清兵衛殿ニモ入来一所ニ被帰候、上村半兵衛殿ニ

モ一刻入来也、

四四八 江戸当時流行俚謡

都歌人十三哲魚見立

朔辰

皇都秀逸

言霊開起

正犬

鯨

言霊舎保之 古学真説
切壳残念々々 三教正見

戌

二犬

鯉

香川景樹 異学異見
邪毒甚シ君子ノ食ニ非ス

辰

三犬

鯉ナマス

城戸千樹

書林見識

ヌラリクラーリ飄(塵)キズヲノガル

戌

四小

鱈ドジャウ

岡部東平

チイヨノトトヒマハルノミ

卯

五犬

蟹カニ

杉 庵

ヨコサマナガラ言霊門

酉

六小

飯蛸イ、タコ

福田美樹

アユヒカザシノニ涉ノ外ハ不知

寅

七小

鯛イワシ

山本嘉之

カナヅカヒサヘト、ノハス
コレハナニノマジナイゾヤ

未

八大

棒鱈

香川 圭

齒ニハサカミテ何ノアジモナシ

丑

九小

鯡ニシン

賀茂直兄

昆布ノ将東ニテマギラカスノミ

固意開識

福

無レ餘レ分 求レ事而不レ費レ財

積ニ陰ニ惠ニ者 自得レ福焉

午

閏大

黒鯛

平田厚胤(マ)

異学新説

禄

思ニ君ニ親ニ之ニ恩ニ 而慎ニ行ニ蹟ニ

守ニ天ニ命ニ者 自得レ禄焉

クロミ残念々々 梵漢聞見

此学如何

寿

禁ニ飽ニ食大ニ酒ニ 而遠ニ色ニ慾ニ

養ニ氣ニ血ニ者 自得レ寿焉

子

十小

鱒ゴマメ

高樹院實道

ホンノト、マジリ

石川丈山

巳

十六(大カ)

干鰯ヒガマス

大橋長廣

毒ニモナラス薬ニモナラス

四四九

当時柳營諸役人数

中奥御番除之

京都旅宿

義門

一与力 千二百八人

詠格口マネメテタイ、シカシ毒モ用心

江戸 須原陣 人撰

一御徒衆 四百二十人

一同心 凡六千二百二十七人

一水主衆 四百四十三人

一凡 一万七千八十人余

一万石已上二百六十六家

千二百三十九万石

四百十三万石

百六十一万石

四十六万九千八百八十一万

総計一千八百五十九万九千八百八十一石余

一 日本国惣人数

二千五百九十一万七千八百三十人

内訳

男千三百八十一万八千六百五十余人

女千二百九万九千七百七十六人

右高二千五百七十八万六千八百九十五石余

一 琉球国 十五島石高 十二万三千七百石

一 沿海円廻 一千四百五十里

種子島ハ当時御側役ナリキ、

四五〇 和蘭国王書翰

和蘭国王書翰

鍵箱之上書和解、

此封印スル箱ハ和蘭国王ヨリ日本帝ニ呈スル書翰箱

ノ鍵ヲ納ム、江戸城ニ於テ書翰ノ取扱ノ命ヲ奉スル

高貴ノ人ノミ開封スルコトヲ得ン、

曆数千八百四十四年二月十五日天保十四卯年十二月二十七日ニ当ル瓦

刺汾法瓦和蘭ノ都ニ於テ記ス、

和蘭国王ノ密談所頭取

鍵箱ノ封印和解

王ノ密談所

書翰外箱上書ノ和解

日本国帝殿下征夷大將軍ヲ指シ奉ルナリ

和蘭国王書翰和解

和蘭国王ウツキルレム微爾烈謨二世「ヘイデコブチーゴツツコー

種子島時昉日記ニ前文ヲ記シ公義去ル方ヨリ差上ラレ拙者御取次致候ニ付、密ニ写置クモノナリト記セリ、

ニング、テル、ネーデルランデン、プリンスハンオラ
ーニーチスサタゴロート、ヘルト、フハンリエキセン
ブルグエン、ソーホールツ」、一之王兼一之ヲ、リンスノ太公、江戸ノ政
庁ニマシマシテ徳威共ニ高ク威力隆盛ナル、

大日本国君殿下ニ謹テ書ヲ奉リ微衷ヲ表ス、コノ書殿
下ノ手ニ入リテ無事安全ノ幸福ヲ得タマハン事ヲ冀フ

一 二百年前ニ高名ナル烈祖權現家康ヨリ信牌ヲ賜リ慶長
庚子和蘭ノ船始テ本邦ニ来リ同十四己酉年七月廿五日神祖
ヨリ御朱印ヲ賜ル、己酉ヨリ今茲甲辰ニ至二百三十六年也

人貴国ニ航シテ交易ヲナス事ヲ許サル、爾リシヨリ以
来我々国ノ人貴国ニ於テ待遇セラル、コト浅カラス、

且甲比丹ハ年ヲ期シテ自殿下ニ拜謁スルコトヲ許サル
古ハ甲比丹江戸拜礼毎年ナリシニ、寛政二庚戌年ヨリ五年目トナ
レリ、此二年ヲ期シテト云ハ蓋シ近代ノ事ヲサシテイヘルナリ 其

厚誼突ニ感スヘシ、我モ亦信義ヲ以テ此確乎タル恩義
ニ答ヘテ弥貴国封内ヲシテ静謐ナラシメ、庶民ヲシテ

安全ナラシメント欲ス、然ルニ交易ノ事及ヒ尋常ノ風
説ハ拔答非亞瓜哇島ノ府名ナリ、元和五己未年和蘭ノ人全
島ヲ奪ヒ、蘭瓦答刺武ヲ改テ拔答非亞トイフ及ヒ

和蘭領ノ西亞諸島ヲ支配スル頭役ノ者ヨリ告ケ奉ル
ヲ以テ、今ニ至迄兩君互ニ書ヲ通スル事ナク兩國書ヲ通
スルコトナ

シト云ハ與ナリ、慶長十四己酉年七月廿五日、同十七壬子年十月神祖
ヨリ和蘭國へ御復書アリ、蓋和蘭歴世治平日少キヲ以文獻ノ微スヘキ
モノナキニ 且書ヲ通スヘキ緊要ノコトアラサリシニ、今

爰ニ黙止スヘカラサル一大事起レリ、是全ク兩國交易
ノ事ニ拘ハルニ非ス、貴国ノ關係スル事ナルヲ以テ未

然ノ悲ヲ憂ヒテ始テ殿下ニ直奏スル所ナリ、冀クハ此
忠告ニ因テ未然ノ悲ヲ免レ給へ、

一 近年英吉利兵支那ニ敵ク戦争ヲ為セシコトハ、我カ国
ノ船年々長崎ニ至リ呈スル所ノ風説書ニテ既ニ知リ給

フヘシ、威力アル支那帝脆ク戦テ利アラス、歐羅巴ノ軍
学ニ長セルニ辟易シ終ニ和親ヲ約ス、是ヨリシテ右来古カ

ヨリノ政法錯乱シ海港五個所ヲ開テ歐羅巴ノ交易ノ地
トナサシム、

一 其禍乱ノ原ヲ尋スルニ今ヲ距ルコト三十年、歐羅巴大
乱平治セシ時諸民皆永ク治平ノ化ニ浴センコトヲ願フ

テ時ニ当リテ古賢ノ教ヲ奉スル、王ハ諸民ノ為ニ多ク
商賈ノ道ヲ開テ民蔓殖セリ、コレヨリシテ器械ヲ造ル

ノ術及ヒ合離ノ術万物ヲ分析シ或ハ集合ノ
其物質ヲ究理スル術ナリニ因テ種々ノ奇

巧ヲ發明シ、人力ヲ費サスシテ貨物ヲ製スルコトヲ得

タリ、是ニ於テ諸国ニ商賈延蔓シテ反テ国財ノ乏シキニ至ル、就中威力アル英吉利ハ国力豊饒ニシテ地勢宜シキニ適ヒ、民心巧智アリト雖トモ国財ノ乏シキハ特ニ甚シ、故ニ商賈ノ正路ニ拠ラス速ニ利潤ヲ得ント欲シ、或ハ外国ト爭論ヲ為スニ至ル、此時ニ當リテ本国ヨリ力ヲ尽シテ其爭論ヲ助ケテ止サルニ因テ、国勢繁雜ニ及ヒ国勢益窮ス、カクノ如キコトニ因リテ英吉利

ノ商人ト支那ノ官人ト爭論ヲ開キ兵乱ヲ起セリ、支那ニテハ戰甚利アラスシテ国人數千廣東ニ於テ戰死シ、且教府ヲ奪ハレ乱妨サル、ノミナラス、數百萬元ヲ出シテ焚燒セシ財貨ハ償フニ至レリ支那ニ於テ阿片交易ノコトニヨリ英吉利人ノ貨ヲ燒キシ事アリ、因テ支那ヨリ其償金ヲ出スト云フ、

一 貴国モ今亦カクノ如キ災害ニ罹ントス、凡災害ハ倉卒ニ発スルモノナリ、今ヨリシテ日本海ニ異国船ノ来ルコト古ヨリモ多クシテ、コレガ為ニ其船兵ト貴国ノ民ト容易ニ争端ヲ開クニ至ラン、其争端ヨリシテ兵乱ヲ起スヘキコト心痛之至ニ堪ヘス、殿下ノ高明ノミ必其災害ヲ避ルコトヲ知り給フヘシ、我モ亦安寧ノ策アラ

シ事ヲ望ム、

一 殿下ノ聡明ハ千八百四十二年天保十三年貴国ノ八月十三日、長崎奉行ノ前ニ於テ甲比丹ニ讀ミ聞セシ令書ニ因テ明カナリ、

令書ハ壬寅七月甲比丹ヘ申渡之書付前ニ任リ、爰ニ略ス、

令書ニハ異国船ヲ厚遇スヘキ事ヲ載セテ詳ナリト雖モ恐クハ未タ尽サ、ル所アラン欵、其令スル所ハ唯難風ニ遭ヒ或ハ食物薪水ニ乏シクシテ、貴国海浜ニ漂著スル船ノ処置ヲ云フノミ、若厚誼ヲ顯ハス心ニ出テ或ハ他ノ言ハレアリテ貴国ノ海浜ニ来ル船ヲ処置スル事ヲ言ハス、若此等ノ船ヲ暴味ニ追払ハ、必争端ヲ啓クヘシ、凡争端ハ兵乱ヲ起シ、兵乱ハ国ノ衰廢ヲ招ク、二百余年来我々国ノ人貴国ニ在留スルノ恩恵ヲ謝センカ為ニ、貴国ヲシテ此災害ヲ免レシメン事我カ希フ所也、古賢ノ言ニ曰、無難ナラント欲セハ危險ニ臨ムコト勿レ、平穩ナラント欲セハ紛冗ヲ致スコト勿レ、

一 謹テ古今ノ時勢ヲ通考スルニ天下ノ民ハ速ニ相親ム者ニシテ、其相親ム勢ハ人力ノ能ク防ク所ニ非ス、蒸氣火氣ヲ用ヒテ風向ニ拘ハラス自由ニ進退スル、船船ストーームボートト云、文化四丁卯年ニ創造スト云ヲ発見セシヨリ以来、各国相距ルコト遠キモ猶近国ニ異ナラス

カクノ如ク各国好ヲ通スルノ時ニ当テ独国ヲ鎖シテ万国ニ相親マサルハ人ノ惡ム所ナリ、今歴代ノ法ニ異国人ト交ヲ結フコトヲ嚴禁セラレシハ歐羅巴洲中遍ク知ル所ナリ、ラヲワエウ人名ナラン詳カナラス曰、知者位ニ在テ能ク治平ヲ保護スルヲ是ヲ至智トイフ、故ニ貴国古來ヨリノ法ヲ固ク遵守シテ反テ乱ヲ醸サハ其禁ヲ弛ムルハ智者ノ常経ノミ、是殿下ニ丁寧ニ忠告スル所ナリ、冀クハ幸福ナル日本國ヲシテ兵乱ノ為ニ衰廢セララシメンカ為ニ異国人ヲ嚴禁スルノ法ヲ弛メヨ、是全ク誠意ニ出ル所ニシテ自國ノ利ヲ謀ルニ非ス、凡平和ハ只懇ニ好ヲ通スルニアリ、懇ニ好ヲ通スルハ交易ニ在ル事ヲ、叡智ヲ以テ熟慮セラレン事ヲ願フ、

一 殿下コノ緊要ナル事ニ就テ我カ言フ処ヲ用ヒ給ハント欲セハ親筆ヲ賜ハルヘシ、然ハ又昵近ノ臣ヲ貴國ニ遣

ハサン、コノ書ニハ概略ヲ拳ル故ニ詳ナル事ハ我カ昵近ノ臣ニ問ヒ給フベシ、

一 我ハ遠ク隔リタル貴國ノ幸福及ヒ治平ヲ謀ルカ為ニ甚心痛ミ堪ヘス、恐クハ争端ヲ開シコトヲ前知スルヲ以テ、四箇年以前ニ讓位セシ在位二十八年ナル我父微爾烈〔裕カ〕護第一世王ヲ我方ニ招クニ至ル、殿下モ亦此事ヲ熟慮セセハ我ト憂勞ヲ同フシ給フヘキコト明ナリ微爾烈護第一世ハ安永元壬辰年ニ生レ文化十癸酉年和蘭國ヲ興復シ同十二乙亥年壬位ニ封セラレ天保十一庚子年今壬三位ヲ讓リ同十四丁卯年卒セリ寿七十一此書翰ヲ贈ルニ軍艦ヲ以テスルハ殿下ノ答書ヲ得シコトヲ望ムカ為ノミ、又我カ肖像ヲ呈スルハ懇切ナル信義ヲ顯ハサンカ為ノミ、其余別幅ニ録スル献貢ノ品ハ、不腆トイヘトモ我封内ノ盛ニ行ハル、學術ニヨリテ致ス所ニシテ、我邦ノ年来恩遇ヲ受ケシヲ聊謝シ奉ランカ為ナリ、

一 殿下ノ高名ナル名ヲシテ治世永ク福徳円満ナラシメ、神徳ニヨリテ殿下モ亦福徳円満ニシテ大日本國万々々天幸ヲ得テ靜謐和睦ナラン事ヲ欲ス、
即位ヨリシテ四箇年歴數千八百四十四年二月十三日

天保十四卯十二月二日、瓦刺汾法瓦ノ王城ニ於テ書ス、
十一日ニ当ル、

徵爾烈護

ミニストルハンコロニエン外国ノ事ヲ司ル
大臣ノ官名 瑪陀

天文方見習
兼御書物奉行

澁川 六藏 訳

日本国王殿下へ和蘭国王ヨリ奉獻スル貢物

目錄

一和蘭国王姿画 一枚

但身之丈正写シニ全像ヲ附、和蘭国高名ノ画工ハ

ナチルヘルスト名ノ筆

一水晶大燭台 二本

但五方ニ火燈リ候様ニ拵有之

一大花生 一

但造花添有之

一六挺込短筒 一揃

但一箱入

一カラヘイン筒 一挺

但短筒之一種之名、一箱入

一新刊地図 一枚

但歐羅巴州諸国ノ図ノ集有之

一同大 一枚

但和蘭領分東印度ノ図有之

一シエリナーメ人道中記 一冊

一和蘭国領分東印度 三冊

一東印度草木之絵 二冊

一瓜哇草木之絵 三冊

一日本草木之絵 一冊

一同獸類之絵 四冊

一星学ニ拘リシ地理書 二冊

一地理書 一冊

一星学書 二冊

一天文書 五冊

一テカラーフ人名星学書 一冊

一ハンカタン人名星学書 一冊

一総世界之風土記 一冊

- 一 万物之説録 一冊
- 一 サテルニス星名輪之説録 一冊
- 一 コンケンノ慧星説録 一冊
- 一 星学稽古書 一冊
- 一 ハルレイノ慧星説録 一冊
- 一 天文書 一冊
- 一 慧星觀察之書 一冊
- 一 万物之説類 一冊

長崎奉行此国書ヲ収手シ江戸ニ通送ス、此船同港内ニ滞
泊スルコト数月、未タ幕議ノ決ヲ得スシテ遂ニ抜錨シ去
ル、

〔表紙〕

齊興公史料

市來四郎編

弘化元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙數四十三枚）」の記載あり〕

目録

総覽

藩士鳥居平八郎兄弟ニ西洋新式ノ銃砲術ヲ高島四郎太夫ニ伝習セシム

〔参考 高島四郎太夫ノ砲術伝授制限ヲ解ク〕

封内沿岸ノ守備ヲ嚴ニス

水戸中納言殿蘭学及ヒ邪宗教ノ弊媒意見

齊昭公ヨリ杏彬公ニ送ラレタル写

種子島時
叻日記

参考 安田助左衛門紀事抄

齊興公御参府

島津和泉ニ江戸在勤ヲ命ス

齊興公江戸御着ノ報

南部侯御昇進ノ報

島津和泉五節句待遇達

齊興公日光御社参

水戸中納言殿致仕謹慎ノ幕達

琉球国へ異国船渡来ヲ御近親へ報知

参考 鎌田正純日記抄

戸田家息女逝去ノ報

桑原正晟異国船渡来ニ付易断

永楽錢通用停止布達

参考 金銀製造所概況

京都高瀬舟ノ由来

法元凱琉球秘策

天保十五年 甲辰 清曆道光二十四年
弘化元年 西曆千八百四十四年

神武天皇御即位紀元二千五百四年

仁孝天皇惠仁第百十九代 御即位文化十四年丁丑九月 二十八年御宝算四十五

將軍家慶公第二十世 襲職天保八年乙酉九月 八年年四十七

藩主齊興公第二十七世、當時 知政文化六年己巳六月 三十六年年五十四

世子齊彬公當時修理大夫卜称ス

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球國受封人皇八十二代後鳥羽天皇壽永五年即チ文治二年六百五十九年

關白太政大臣鷹司政通公

左大臣二條齊信公

右大臣九條尚忠公

內大臣近衛忠熙公

老中

土井大炊頭利位十月依病罷免

眞田信濃守幸貫五月依病罷免

阿部伊勢守正弘

牧野備前守忠雅

堀 大和守親審

水野越前守忠邦

若年寄

青山下野守忠良

本多豐後守助賢

大岡主膳正忠固

本多越中守忠徳

遠藤但馬守胤統

本庄伊勢守道貫

所司代

酒井若狹守忠義

京都町奉行

田村伊勢守顯影

伊奈遠江守忠舌

伏見奉行

内藤豊後守正繩

国老

○〔雄九〕穎姓信濃久喬

○新納内藏久命

島津將監久泰

○岩下典膳道格

島津安房久備

○島津 登久兼

川上久馬久芳

町田監物久視

市田美作義宜

北郷内記久珉

島津和泉久風

島津丹波久長

川田信濃佐摸

猪飼 央尚敏

二階堂主計行典

調所笑左衛門廣郷

諏訪勘解由武敬

菱刈安房隆觀

島津石見久浮

島津 登久備

島津豊後久實

島津壹岐久武

末川近江久平

島津將曹久德旧称碓山

川上筑後久封

以上二十五名、文化六年己酉嘉永四年辛酉〔亥〕二月迄、凡四十二年間国老職ニアリ、前代ヨリ在職連続ノモノハ〇印ヲ付ス

四五 総覽

正月

元旦晴

齊興公例年ノ如ク奥御座ノ間ニ於テ国老其他ノ諸役人年賀ヲ受ケ玉フ、尋テ五社及ヒ福昌寺先塋御家老御代
一 拜、

二日晴

表御書院ニ御出座、御一門及ヒ太身分〔大カ〕・寄合・諸士ノ年賀ヲ受ケ玉フ、

三日曇後
チ雨

御出座、年首式先規ノ如シ、

十一日

先規ノ如ク諸役員昇級及ヒ地頭職轉換ヲ命シ玉フ、
十五日

年首賀式了ル、

二十九日

国老調所笑左衛門出府、本日発途、

二月

六日晴后雨

齊興公御出府御発途（午ノ上刻）

三月

十一日

琉球国へ佛国軍艦来港、同国人ヲ在留セシム（後巻第

号参看）

四月

二十五日

太守公江戸へ御着邸、

日、御登營、

日、御老中邸御廻勤、

十三日

琉球、佛国軍艦渡来ノ飛報達ス、
十四日

琉球、飛報ヲ江戸ニ齎ス、

五月

朔日

太守公御参府ノ御礼及ヒ日光御社参御発邸又ハ御帰府

御祝儀、

日、閏老、琉球へ佛人渡来事件御内届、

日、琉球、佛人在留事件表面ノ御届書提出シ玉フ（後

巻第 号参看）、

六月

日、琉球ニ警衛兵ヲ派遣シ玉フ（後巻第 号参看）、

日、琉球警衛兵派遣届書提出シ玉フ、

六月

日、齊彬公、阿部伊勢守ト琉球外国事件御談話（後巻第

号参看）、

八月

朔日 鎌田藤馬刑部（正純）ト改名ス、

十一月

二十一日

一位様 (家齊公御婦人) 御不例ノ報到ル、

二十九日

一位様薨去ノ報到ル、山野殺生鳴物普請停止、

十二月

廿九日

江戸御本丸焼失ニ付金拾五万兩御上納云云ノ報到ル、

尋テ御領国中人別老又出銀並ニ石高一石ニ対シ式舛重課出来、已来ヨリ先キ五ヶ年云云布達、

四五二 藩士鳥居平八郎兄弟ニ西洋新式ノ銃砲

術ヲ高島四郎太夫ニ伝習セシム

○本文書は、第三三四号文書と同文により略す。

四五三 参考 (高島四郎大夫ノ砲術伝授制限ヲ

解ク)

右天保十三年寅六月十一日老中水野越前守ヨリ達アリ

大目付へ

諸組与力格長崎町年寄

高島四郎太夫

右四郎太夫儀、先達テ出府之節兼テ心得罷在候火術伝来之秘事迄不残御直参之内熱心之者一人へ伝授致シ、右之外諸家へ猥ニ相伝儀候ハ仕問數旨申渡置候処、以来其儀ニ不及候、御直参ハ勿論諸家熱心之者へハ勝手次第伝授可仕旨可被申渡候、尤異様之冠物・衣類等 (高島ハ一種ノ服或ハ冠ヲ用ヒタリ) 不相用、常体之笠或ハ陣笠・野服・小袴・陣羽織等ニテ為致稽古候様可致旨オモ可被申渡候、

右之通、長崎奉行へ相達候間、承合候向モ有之候ハ稽古致シ不苦旨可相達候、

六月十一日

四五四 封内沿岸ノ守備ヲ嚴ニス

○本文書は、第三三五号文書と同文により略す。

四五五 水戸中納言殿蘭学及ヒ邪宗教ノ弊媒意見

齊昭公ヨリ齊彬公ニ送ラ
レタル写、種子島時助日記

五月九日

水戸中納言齊昭、書ヲ老中ニ贈ラレ蘭学ノ弊邪宗門ノ媒
タルヲ論セラレタル書

近年和蘭書籍専ラ致流行候、横文字ヲ不存者ニテハ一
切不相分候故、不得止已ニ拙家ニテモ為学候得共、追
々承候得ハ天文・医学ノミニ無之種々之書籍渡来候由
ニ候へ共、此儘差置キ候ハ、行々必邪宗門ノ媒ニ可相
成候、乍然此節俄ニ御制禁ニ相成候ハ、年来交易ニ
テ渡リ候余多ノ書ニハ物モ費へ、又彼長スル所ニ有用
ノ分モ有之所、空シク焼捨候モ無術ニ有之、夫ノミナ
ラス御蔽禁ニ相成候ハ、窃ニ所藏致、矢張内々ニテ被
行候憂モ難測候、依テ致愚慮候処、此度広ク蘭書翻訳
被仰付候故、新古ニ抱ラス持伝候蘭書類、尚又蘭学修
行致候者夫々差出候様、国々御触ニ相成候ハ、三家・
三卿始大小名下々迄無残差出候半、借翻訳成立之上ニ
テ、右出来ノ書ヲ家々ニ御返シ、本書ハ一切御焼捨ニ

相成、蘭学ノ儀向後長崎通弁ノ外ハ、天文・医学タリ
共邪宗門同様御禁シニ相成、是迄学候者ハ欠減ニ相成
候ハ、四・五十年ノ内ニハ蘭学根ヲ絶候様可相成、
借蘭学一切渡リ不申候ハ、天文・医学之差支モ可有之
候得共、西洋ノ風究理々々ト申候得共、無用之究理多
ク、例へハ日月星辰ヲ手ニ取候様分リ候迎モ、年々豊
凶ハ不相分候へハ、今日ニ於テ何ノ益モナク、五臟六
腑等目ニ見へ候様分リ候迎モ、人ノ死生ハ力ニ不及候
へハ、是以無用ニテ、天文モ蘭法ナキ内ハ漢曆ニテ相濟、
漢曆無之時分迎モ農ノ時ハ取違モ不致、医学モ矢張日
本ハ日本ニテ事足り候也、古ハ長寿ノ人多ク有之、況
ヤ今ハ漢蘭長スルモ大抵伝来候間何事ニテモ差支ハ有
之間敷候、一体ハ蘭学ノミナラス、右国々モ交易ノ儀
害ノミニテ、益少キ様存候間、一切御制禁ニテ可然存
候得共、右之御益一方之御補ニ相成候儀ハ相見へ候、
享保ニハ外国之産物此地ニ出来候様御世話被為在候ヲ
今ハ長崎交易ニ響キ候由ニテ、時々御触モ有之上ハ、
交易御止ノ儀ハ所詮御六ヶ敷候半ト奉存候故、先姑ク

置テ不論候得共蘭学ノミ御工夫有之度事、

時任武右衛門

四五六 参考 安田助左衛門紀事抄

天保十五年甲辰

私共請持郷(父郷ハ一二ヶ所、小郷ハ五六ヶ郷曳受ケタルヲ云内郷士・百姓共別テ相勞、万一モ凶年ニ逢候テハ全救助ノ道無之、心痛仕儀御座候、然処諸郷一統難有御救助被仰付、第一御蔵入給地(諸士禄高ノ通唱)共取納榭目(石斗舛合ノ通唱)御旧法通輕目ニ被仰付候付、夫丈ケ残米モ有之事御座候間、篤ト吟味仕候処、田畠共高頭一石ニ付粃一舛起ツ、年々為差出、積糶ト名付郷々へ屯置、年ノ豊凶ヲ以壳捌又ハ貸付方等取計仕申度夫々当秋ヨリ為積置申候、右ニ付テハ所役々ノ内掛申付殿重取扱、何篇私共差引仕、至後年候テモ右仕向不相変様被仰付置度奉存候此段申上候、以上、

辰正月

郡奉行

兒玉正兵衛
安田助左衛門

郡奉行見習

右之通申出候処申出ノ通申付候条、年々ノ積糶高御趣法掛御用人へ届申出候様、笑左衛門殿ヨリ被仰渡候、右ハ肥後芦北ニテスシト唱候法此通ニ候故、右ニ基キ拙者吟味ヲ起シ周ノ世委積ノ法ニ依リ積糶ト右名付、三人同意ニテ書付差上候処、其翌年ヨリ御領国中一統へ此通被仰付候、然処嘉永三年戌年ニハ余程ノ凶年ニテ候へ共、右積糶過分ニ有之相渡、格別ノ御救助相成候由、

二月笑左衛門殿江戸表へ御出府大口筋御通行ニ付、帖佐屯藏御見分、栗野御一宿、兩御藏・觀音樋(地名)・ト、口岩(川中巖石ヲ云)除キ御見分、夫ヨリ大口迄相付差越候、左候テ栗野兩御藏御造立掛被仰付候付、御内々ヨリ絛縞一反拝領被仰付、所役々掛ノ者共へモ金子又ハ芭蕉布等拝領被仰付候、

四月三日当山ヨリ踊へ差入候処、所郷士松下源兵衛父子(日脱カ)氣儘ノ致方有之、去ル朔日晝所組頭為捕方人数召列レ差

越候処、郷士兩人へ手疵ヲ為負、剩父子共鉄砲打出候様

様故引取候段承得、其後ノ次第承候処、始終鉄砲切火繩

ニテ刀拔身ヲ自分側ニ立置、家籠(家屋内ニ籠居ノ通語)

イタシ居候段申事故、夫形可召置者ニ無之候間、締方横

目溝邊へ相詰居候由承候ニ付、其座ヨリ所横目山崎勝右

衛門差遣、着次第可差越致手筈相待居候処、翌五日未明

同道差越候付、即地頭飯屋へ参候処、夜前從鹿兒島為捕

方肝煎足輕八人被遣候段申出候付、源兵衛儀ハ持松居住

遠方ノ儀ニモ有之其後ハ不差構召置候処、翌六日曉肝煎

足輕差越候テ源兵衛父子仕詰候届申出候、尤足輕四人ニ

手疵ヲ負セ候(海老原清郷家記参照)

四五七 齊興公御参府

二月

六日

太守様齊興 今日巳之上刻江戸へ御発駕、從駕国老調所

笑左衛門郷廣、御側役伊集院織衛 伊木七郎右衛門 其

他扈從人名略ス、

四五八 島津和泉ニ江戸在勤ヲ命ス

島津和泉久風

右ハ御家老一扁之場ニテ江戸詰被 仰付、当秋致出

府赤松主水江致交代候様被 仰付候、

二月

島津久風ハ御城代兼御家老職ナリシカ、今回書面ノ如ク

命セラレタルハ故アルコトニシテ、其実忌諱ニ触レ辭職

セシムルノ詞柄ニ出タルモノナリ、而シテ出府ニ就テ途

中供列等ノ事左之通達セラレタリ、

弓台 具足箱但二人

刀箱 用篋司

馬印 打物

刀筒大小 乗物

手槍二本 中柄

対挾箱 養箱

茶弁当 率馬

沓籠 飼料桶

兩掛 合羽籠

竹馬 挑灯笼

用達 役人

醫師但手醫師 家来

草履取 (間力) 中門式人

押 式人

島津和泉

右ハ江戸詰被 仰付候付、当八月初旬可致出立候、

左候テ当時柄之事候間、中途行列其外旅粧等致省略

候様心得勿論之事ニ候、追々 公辺ヨリ被 仰渡趣

モ有之候付、猶又其心得ニテ精々手輕ニ致出立候様

被仰付候事、

但行列立別紙之通被 仰付候、

一御兵具方掛

島津和泉

右江戸詰被 仰付候ニ付掛被成御免候、

二月 央猪飼久尚

一御鞍 一口

一御鏡 一掛

島津和泉

右ハ御勝手方掛被 仰付置、多年出精相勤万端行届

別テ御満足 思召候、然処今般江戸詰被 仰付候付

掛被成御免候、依之別段之以 思召右之通拝領被

仰付候、

二月 取次

碓山將曹

右

御鞍鏡於

御前拝領被仰付候筋相心得候様可申聞置旨 御沙汰ニ

候事、

一御勝手方掛

一疏球掛

一異国船掛

但御品ハ於江戸頂戴被仰付筈ニ候、其節証書等モ可

相渡候間、其段も内々可申聞置ト之事ニ候、

六月

十二日

島津和泉

右ハ近来胸痛ニテ致難儀候由被 聞召上、是迄致精勤
候ニ付、別段之思召ヲ以無抛御役被成御免候、左候テ

多年首尾能相勤候付、高三百石之物成ヲ以其身一世被
下置、其身代取込拝借被下切被仰付、以来奥江罷通大
奥江モ奉伺御機嫌候様被 仰付候、

六月 主計^{島津}_{久宝}

年頭・八朔御礼家格之通、

節句月次御礼

御座之間

但奥目御役中之通種子島彈正殿御礼相濟、引統御

礼不及奏者、

島津和泉

右ハ多年御役相勤、表御勝手方御用致取扱、是迄分テ
御用立候御取訳ヲ以、御礼序等右之通被仰付候、御留
守年ハ御座之間御礼ニ準シ、於鶴之間種子島彈正殿引
統謁、御家老御祝儀御礼等可申上候、左候テ登 之節
ハ、水仙之間下之休息所江彈正殿一緒ニ相控候様被仰
付候、

六月 主計^全

島津和泉ハ忠誠豪直ノ人ナリ、国老ノ職ニ在ルコト数十
年、御城代職ヲ兼国務老練人望アリ、然ルニ調所・碓山
等カ収歎ノ所為ヲ惡ミ抗議スルコト屢アリシ故、調所等
カ意ノ如クナラサルヲ以テ遂ニ讒誣貶斥シタリ、如此積
年ノ功勞ヲ賞シタルハ奸人ノ慣手段ニシテ、所謂拳ケテ
墜スト云フノ奸策タリ、

四五九 齊興公江戸御着ノ報

四月

十九日

太守様齊興公 御機嫌能先月廿五日被遊 御參府候飛報昨
廿四日達、本日例規ノ如ク御一門家其他登城、御祝儀
申上ル、

四六〇 南部侯御昇進ノ報

四月廿九日

南部信濃守利濟

名代 南部丹波守信蕃

思召ヲ以代々官位ニ不拘御鷹ノ鶴可被成下旨被

仰出候、

右於御白書院縁頼老中江大和守別座、備中守申渡候、
(列カ)
別紙之趣御知ラセ相成候云云、

四六一 島津和泉五節句待遇進

久馬殿ヨリ被相渡候御書付

嶋津和泉

右五節句月次御礼、於御座之間被仰付不及奏者旨被仰
渡置候得共、以来奏者有之候様被仰付候条、此旨可申

渡候、

五月

久馬末川久平

右弘化四年未五月廿一日、御名代島津權五郎殿ニテ承
知候事、

四六二 齊興公日光御社參

五月

朔日

太守様齊興公 御儀、先月三日江戸邸御発駕、日光御宮、

御靈屋等御參詣首尾能被為濟、同十一日被遊御帰府候
云云之報昨廿九日達、本日御一門家其外登城御祝儀云
云、

二日

太守様御參府付三月廿八日以上使阿部伊勢守様御懇之
被為蒙上意、先月朔日御登城御參府之御礼被仰上候処、
御懇之被為蒙上意御直御請被仰上、諸事御先格之通被
為濟候云云、例規ノ如ク御一門四家其他御祝儀云云、

五月

四六三 水戸中納言殿致仕謹慎ノ幕達

五月六日幕府水戸齊昭ニ致仕ヲ命シ、下邸ニ在テ謹慎セシム、老臣戸田銀次郎・寺社奉行今井金右衛門・側用人藤田虎之助等ヲ禁錮ス、世子鶴千代丸封ヲ襲ク、幕府ハ高松松平讚岐・守山松平大學・常陸松平播磨・府中磨守頼綱三侯ヲシテ藩政ヲ撰行セシム、達書左ノ如シ、

御家政向近年追々御氣隨之趣相聞、且御驕慢被為券、都テ自己之御了簡ヲ以御制度ニ相触候事共被為在、御三家方ハ国持始諸大名之可為模範候処、御遠慮モ不被為在事ニ被思召候、依之御隠居被仰付牛込屋鋪御住居穩便ニ規度御慎可被有之候、御家督之儀鶴千代麻呂殿へ被仰出候、此段讚岐守・大學頭・播磨守相越可被達旨、御旨ニ候、

松平讚岐守

御座間 松平大學頭

松平播磨守

右御目見上意有之、畢テ水戸中納言殿御隠居之儀被

仰遣之、

御使

阿部伊勢守

牧野備前守

徳川鶴千代磨殿

右御家督之儀仰遣之、

御使堀大和守

尾張大納言殿

松平讚岐守

右ニ付被遣之、

右同人

右御暇被仰出候得共、当年滞府被仰付之是ハ鶴千代麻呂殿若年ニ付御家

政向之儀被蒙仰候ニ付テ也

是ヨリ先キ齊昭皇威漸ク衰ヒ外患ノ将ニ起ラントスルヲ慨キ、尊攘ノ大義ヲ明ニシテ、以テ幕府ヲ補翼シ外

夷ヲ掃攘セント欲シ、先ツ其国ノ軍政ヲ釐革シ大小砲

ヲ始メ大ニ兵器ヲ製ス、其意蓋シ諸侯ニ率先シ皇國ノ正氣ヲ振作セントスルニ在リ、故ヲ以テ每事公明正大ヲ旨トシ毫モ嫌疑ヲ避クル所ナシ、幕府之ヲ異シム、而シテ讒口適々乘ス、故ニ茲ニ及ス、是ニ於テ水戸藩士武田魁介・吉成恒次郎・桑原幾太郎・豊田彦次郎等以下數十百人老侯ノ為メニ宛ヲ雪カント欲シ書ヲ老中ニ致ス、水戸侯支族松平申之助住所常陸長倉ニ居ル亦書ヲ致シテ和歌山侯徳川大納言齊順ニ哀訴ス、

四六四 琉球国へ異国船渡来ヲ御近親へ報知

私領琉球国之内運天へ当三月十一日異国船一艘漂来御碇候ニ付、漂来之次第相尋候処、異国人ハ言語・文字不通候得共、唐人一人乗組居、佛朗西国之船人数二百三十人乗ニテ廣東へ罷渡、帰帆之折洋中逢難、船舟具相損、右修補並糧食為求方致来着候段申出候、本船ニハ石火矢・鉄砲・槍・刀等段々乗セ付有之候得共、兵船之様子ニテハ無之候、且又舟具修補用之木並糧食用牛・豚・野菜等相求度申出候ニ付相与候処、舟且修補(具カ)

ハ異国人共自分ニ相調候、左候テ右船乗頭ヨリ佛朗西国之儀二百年来中国致通融近来尚相親ミ、依之佛朗西皇帝之命ヲ受ケ中国隣近之諸国可致交通候間、琉球ヘモ其通問合致交易度旨申出候ニ付、琉球国之儀全体産物相少、勿論金・銀・銅・鉄類ハ全ク無之国柄ニ候得ハ、逆モ交易ハ不相調段分テ申断候処、一円承知不致、此儀不相調候ハ、和ヲ通シ好道可結申聞候ニ付、是又相断候得共落着無之、猶追々彼国大総兵船可致来着候ニ付交易向等速ニ吟味難相遂候ハ、右大総兵船来着之上何分返答可致、且右舟之通事乗合無之候ニ付、異国人一人唐人一人残シ置キ本船ハ可致出帆旨申出候間其節モ同様何分交易ハ不相調訳合、且琉球ハ清国之屏藩ニテ彼国並度健唎島迄致通融、勝手次第外国へ交易ハ不相叶、勿論異国人留置候儀モ不相成趣、再応無余儀相断置候処、同十九日本船ハ可致出帆旨申出候、然処同日酉刻時分橋船一艘漕来、異国人一人唐人一人浜へ卸置橋船ハ疾漕帰候ニ付、唐人へ子細相尋候処、大総兵船来着之節為通事残置候様乗頭ヨリ申付候段申出

候ニ付、前以テ達置候通逆モ留置候儀ハ不相調段申聞、早速如本船漕送ラセ候得共、其内夜ニ入本船モ不相見漕帰リ候ニ付、無是非近辺寺中明除キ置柵ヲ結ヒ番所等数軒相構夜白勤番申付、三司官初相詰堅ク取締申付置候、然処同廿八日通事唐人ヲ以テ、英吉利国多年琉球ヲ望ムノ心深ク、追々兵船相渡候儀可有之、佛朗西国ト致和好得保護候ハ、自ラ英国ヨリ被奪候難モ無之候ト申聞、其上天主教ヲ伝授可致トノ趣モ強テ申聞候得共、琉球ハ中国之教化ヲ受ケ孔孟之道ヲ学ヒ候ニ付、天主教ト申ハ難成トノ趣ニテ相断候ヘハ、憤ヲ挾ミ大総兵船来着ノ節猶又難決可申掛勢故、折角叮嚀ヲ尽シ無異議令帰帆候様取計可仕候、右ニ付テハ異国人唐人共夫々被仰渡置候通致取計度事ニ候得共、琉球之儀遠海相隔候端島ニ候得ハ、万一大総兵船来着、右次第露頭之時ハ端島之儀、難及手ハ顯然ニ付先ハ平穩之取計致シ候趣共委曲飛船取仕立琉球国ヨリ申越候、就テハ此末大総兵船来着何様難決申掛候テモ、何分ニモ及理弁無異議為致帰帆候様可取計事ニハ候得共、自然及乱

妨候テハ端島之儀以テ之外之事ニ付、平日差渡置候家来共モ有之候得共、尚兼テ非常之手当申付置一組之人數早速琉球へ差渡候段、長崎奉行へ委曲申達候由国許家来共申越候、此段御届申達候、以上、

五月十六日

松平大隅守

右之通今日御用番様へ被及御届候間、此段申上候、以上、

五月十六日

松平大隅守内

永田正兵衛

右御近親御兩敬等へ通知書ナリ、

四六五 参考 鎌田正純日記抄

天保十五年申辰

正月三日疊夕方少々雨

一今日ハ

太守様(齊興公)御出座ニ付五ツ時ヨリ出殿、家格之通於御書院持参太刀イタシ候、左候テ御謠初へモ相詰御

通頂戴へモ罷出候、左候テ大鐘時分御規式相濟退出ヨリ直ニ帰家、供山次左衛門・川畑源之助・岩元奎之進・濱田伊兵衛其外行列昨日之通ニテ候事、

一今日中御祝義内意入来之人鎌田四郎右衛門殿・鎌田仁仲太殿・森川利右衛門殿・和田中太夫殿ニテ候事、数行略ス、

正月廿九日雨申

一四ツ前ヨリ出勤、八ツ後御下リ(困老・若年寄退城ノ通語)ヨリ帰家、供岩元奎之進ニテ候事、

一御家老衆調所笑左衛門殿今日江戸へ出立ニ付、出勤掛表玄喚迄暇乞トシテ見廻候事、

一役所へ相良清兵衛殿入来、内へモ一刻被參候事、

一此節森山覺治(新藏旧名・加藤平八・川畑清七郎(清右

衛門旧名)郷士ヨリ代々御小姓与へ被召出右之御礼ト

シテ森山覺治ヨリ兩種(酒肴ノ通語)差出候付、受入候事、

二月六日晴卯七ツ後ヨリ雨

一今日巳上刻

太守様(全上)御発駕ニ付五ツ前頼合御暇候テ帰家、供川畑源之助ニテ候事、

一御加々様御針ニ山本蘇山見廻候事、

五月朔日晴卯夕方間々雨

一今日ヨリ月番ニテ四ツ時出勤八ツヨリ帰家、供川畑源之助ニテ候事、

但

大守様(全上)御参府之御礼被為濟候、御祝義日光御社参ニ付江戸御発駕之御祝義、日光ヨリ御帰府

之御祝義調御家老有之候事、

一玄朗様御忌日ニ付、福昌寺墓所へ代參肥後平左衛門へ申付候事、

八月朔日未曇

一拙者当分之名同役島津相馬殿へ唱紛敷、右之趣ニテ刑

部(東馬正純)ト名替之願此内申出置候処、安房殿ヨリ

伊集院喜左衛門取り次キニテ願之通相成御免候事、

但

願書差シ出シ候折リハ、取次キ御用人小笠原轍ニ

テ候事、

一右名替ニ付親類中へモ吹聴、地頭所並南村へモ申達候事、

一玄朗様御忌日ニ付、福昌寺墓所へ川村貞助代参申付候也、

十一月廿一日晴申

一今日四ツヨリ出勤八ツヨリ帰家、供川畑源之助ニテ候

事、

但

一位様(廣大院殿)御不例之段

公義ヨリ被仰渡候旨御到来ニ付

太守様齊興・少將様齊彬へ伺御機嫌有之候事、

十一月廿九日辰晴夕方ヨリ雨

一今日四ツ前ヨリ出勤八ヨリ帰家、供山次丞左衛門ニテ

候事、

但

一位様(全上)御不例之処、先月十日薨去之旨昨夜

御到来之由、右ニ付今日総出仕之伺

御機嫌有之、尤昨日ヨリ山野之殺生・漁獵・普請

・鳴物並ニ遊興ケ間敷義御停止ニテ候、日数之義

ハ追テ可被仰渡トノ事ニ候、且

太守様御忌十日、御服四十五日被遊御受トノ事モ

被仰渡候事、

十二月廿四日辰雨、夜中大雷雨鳴

一今日四ツ時早日出(勤脱カ)、尤此内

公義御本丸御焼失ニ付、金拾五万兩御上納之管候処、

諸大名御高割ニテ一万石ニ付五百兩ツ、御上納、此節

従公義被仰渡候由、此内之通此拾五万兩御上納ニ付テ

ハ御領国中人別一匁出銀並ニ高一石ニ付二舛ツ、重出

米、来巳年ヨリ被仰渡置候ヘトモ、一万石ニ付五百兩

之割ニ候へハ御国ニハ三万五百兩御上納之管ニ付、一

匁出銀並ニ二舛重出米ハ被成御免候、右ニ付今日御一

門方月次御礼罷出候面々迄、於席々御礼有之、諸士・

諸与力・諸郷ハ夫々支配頭へ相付御礼可申上トノ事ニ

候、左候テ八ツ後退出ヨリ島津權五郎殿包久宅へ同役中

被相招参リ候、右子細ハ前件之御通達夜前權五郎殿所

へ相滞、上方同役中へハ不相達由、右之不調法ニ付被相招候、左候テ種々振廻等有之、夜入五ツ時分帰家、供山次左衛門、後川口林之進ニテ候事、

四六六 戸田家息女逝去ノ報

十一月七日

戸田采女正様氏正、濃州大垣御息女於富様、先月 日御夭亡、太守様公齊興從弟之御統ニテ、御定式之御忌服御請被遊筈候得共、御夭亡付一日被遊御遠慮候云云、

四六七 桑原正晟異国船渡来ニ付易断

奉考 異国船琉球着之師

桑原正晟考白山通 唱紋二

此ノ卦ヲ以テ右ノ如何ヲ考ルニ坤ハ大陰地ノ徳有テ柔順也、変シテ地水師トナル、師ハ争也、軍也、是則既ニ軍トナルヘキ勢ナリ、然トイヘトモ右卦此方江陽来テ其勢ヒ大ニサカンナル也、則六二中正ノ徳ヲ以変シ此方ハ利アルカ如シ、是故ニ此方ハ中正ノ徳ヲ行ヒ和

順ナル時ハ、無事ニシテ少モ患トナルコトナシ、又異国ヨリ無理ニ師ヲ発スヘキ事ナシ、此後來着シテモ速ニ兵ヲ動カスヘカラス、願望再ヒ発シテ頼ヘキナリ、然則程能ハカラヒアラハ却テ往々吉兆アルヘシ、此方モ無理ニ兵ヲ動ス事ハ却テ不宜、此方ニ和順アラハ悦テ随心アル象、此方不和順ナル時ハ幾度モ来ント思ヘシ、是故ニ少ノ和順アラハ則無事ニ治ルヘシ、後來大ナル破トハナルヘカラス、齊興公ハ易断觀想ヲ信シ玉ヒシ故、如斯内命セラレシト云フ、○桑原ナル者下町人ニシテ少年ヨリ易字ヲ修メ當時斯道ヲ營業トシ有名ノ人ナリキ、

四六八 永楽錢通用停止布達

御老中阿部伊勢守殿ヨリ

大目附へ御沙汰

永楽錢通用停止被 仰出、大坂ヨリ一文錢取寄六文錢之通被 仰出候、此旨向々へ可相触候、

月 日

四六九 参考 金銀製造所概況

金座之事

金座後藤庄三郎、小判・沓分判相極候事ハ權現様御直ニ被仰聞候処、御証文無之、江州野例郡小比枝村ニテ五十石六斗式舛被下、京都ニ庄三郎下シ小判師三十人計有之、諸国ヨリ集リシ金取買小判、沓分ニ吹、極印賃百兩ニ付金沓兩被下、其外諸造用ニ又沓兩被下由、金吹師五人極リ有、庄三郎方ニテ申付候、又小判之事關ケ原陣七年已前庄三郎被仰付候、小判出来光次ヲ書記 關ケ原已後ニ沓分判致出来候、此時小判・沓分共ニ極印被仰付、大判ハ前方ヨリ彫物師後藤四郎兵衛方ニテ致出来、今書判共致候、並ニ法馬ニ四郎兵衛方ニテ仕、尤金座之外ニ彫物師後藤ト言也、

一庄三郎佐渡州ニテ毎年式百兩余吹立御納戸へ納候、諸国ヨリ寄金京都金座ニテ買取小判ニ致金吹立致持參候吟味之上小判沓部ニ申付、尤寄金之員数何方へモ断無之、天和三亥年迄廿ヶ年、平均ニ一ヶ年三千兩程有之

由、金吹師・小判師三十人極候也、小判沓部吹時金改役へ小判師・金吹師誓紙証文為書庄三郎へ取置候、小判沓部之内へ銀銅吹マセ候事ハ無之候得共、金之内オノツカラ銅マシリ有之、吹前改トモ金之出生ニモ透ト、ノキ不申金モアリ、小判致候トモ兩替下值也、

銀座之事

一年寄四人之内沓人へ江戸沓ヶ年ツ、相勤、歳暮・年始・八朔御礼勤申、京都へ上候節、御晦申上候時銀五枚〔マヤ〕 拝領ス、

一御運上銀ハ銀寄レハ三千九百九十貫目迄ハ運上銀五百目、寄銀四千貫目ヨリ五千九百九十貫目且運上銀一千枚、六千貫目迄以上之千貫目ニ付式千枚差上候、

一佐渡・但馬兩國之銀百貫目ニ銅廿五貫目入、丁銀之吹立百拾九貫五百目上定之定也、但シ佐渡銀ハ銀之品勝能ユエ元禄七酉年御改申上候、

一分通り銅ヲマンガへ、只今銀百貫目ニ銅三貫匁合廿五貫目上納銀仕、残三貫目吹賃又之常是包等其外諸雜用也、

一石見銀百貫目ニ付銅廿貫目入、丁銀ニ吹立百拾九貫目上納、元ノ御銀ハ銀座請取御定之通銅ヲ以合、其後常是ハ役人付置大黒極印為打寄銀百貫目御銀之位銀高銅廿貫目五百匁合拾貫目ニテ遣、御銀程無之候銀ハタシメ上相對有之、年中寄銀吹申儀何方ヘモ断不申先年御運上銀差上節、合寄合員敷支配ニテ書付差出シ、員敷無間違誓紙ニテ仰付候事、

一惣テ銀吹申付誓紙之事、支配方ヘ差上申候、
一銀座支配ハ先年ハ御留主居年寄衆支配ニテ、元禄二巳年ヨリ御勘定頭衆支配ニ成候、

一大黒作左衛門常是極印改相極、御銀吹賃カト銀子尅貫目ニ付銀六匁ツ、被下候、但銀座之外也、

一朱座ハ慶長十四年始仰、沓ヶ年運上銀八百枚ツ、毎年九月大坂ヘ致上納候、年頭八朔八朱百兩ツ、本朱ハ唐ヨリ渡来候ヲ長崎ニ朱相置候ニ買取申候、本朱ハ泉州境ニテ仕立候事、

四七〇 京都高瀬舟ノ由来

一京ヨリ伏見高瀬船支配 角倉與市

舟數百五十八艘 運上銀式百枚

元禄元辰年願差上ル

通書高瀬舟支配之義ハ、與市六代祖吉田了意 權現様御上京ヲ以嵯峨大井川・鴨川・高瀬川舟支配任、其後大坂御陣後悴與市方便ヲ以、大坂御藏ヨリ兵糧ヲ伏見ヘ差登、其外御陣中御奉公仕候テ、元和元卯年淀川通中舟支配並江州ニテ御代官被仰付、與市致入道奈庵隱居惣領與市ヘ家督被仰付候節、次男平次ニ嵯峨大井川高瀬舟分テ被下候事、

一嵯峨大井川高瀬舟支配

角倉與市

七十艘ハ高瀬船 廿艘ハ漁船讓リ受船

遊女舟運上銀式拾枚 元禄三年願差上候、

高瀬川支配之事

平次嵯峨川並元禄十二年卯十月初テ貳拾人扶持被下、且又帶刀ト改名仕候様被仰付候、是フシミ新舟本ヤク依テ被仰付候、

四七一 法元凱通稱六左衛門琉球秘策

天保甲辰春三月十一日西洋佛郎察國之船一艘琉球ニ来ル、船所乗凡二百三十人、其酋カ長琉球ニ告テ曰、佛郎察國ハ從來唐土へ通ス、故ニ清王ノ命ヲ蒙リ唐土隣近ノ諸國へ通商ス、因テ琉球へモ交易セント欲スト、琉球辞スルニ、琉球少ク財薄キ故交易スル事能ハサルヲ以テス、船酋カ曰、交易ヲ得スンハ和ヲ通シ好ミヲ結ハント、琉球又是ヲ辞ス、船酋カ不聽曰、交易和交ノ事更ニ熟議スベシ、此後六ヶ月ヲ経テ我大総兵船ヲ遣ハサン、其時再答スベシ、十九日佛朗察國人一人唐土一人ヲ港ニ下シ本船ハ帆ヲ揚ク、琉人其故ヲ問フ、對テ曰、大総兵船来ル時ノ通事ニ備フト、於是琉球其二人ヲ仏寺ニ居ラシメ守卒ヲ置ク、廿八日唐土人通事トナリ琉球ニ告テ曰、諸厄利亞多年琉球ヲ取ルノ志アリ、他日必ス兵船ヲ遣ハサン、今佛郎察ト和好ヲ修シ保護ヲ得ハ、諸厄利亞ヨリ國ヲ奪ハルノ禍ナカラント、且強テ天主教ヲ授ケントス、琉球辞スルニ、吾國孔子ノ教ヲ学ブ、故ニ天主教ヲ受クル事ヲ得サルヲ以テス、

琉球在番奉行本府ニ状啓ス、八月邦君官吏教員兵卒一隊ヲ琉球ニ遣ハシテ其事ヲ処分セシム、府下輿議紛然市廣曰、二百年來昇平ノ久シキ種々巷說喧シク鎖鑰ノ二説ニ外ナク中ニ攘論多ク一擊追攘セラル、モノ、如クニ唱フルモアリ、實ニ彼我弁セサルノ輩ナリ、予居常慨然市廣曰、法元氏ハ識アリ慮アルノ人多キニ居ルタリ、予居常慨然ニシテ當時藩士中屈指ニ二人ノ人物ナリ、積年江戸ニ在テ治乱ノ施政ヲ研究ス、中ニモ兵学ニ達シ砲術ヲ能クス、世人呼ンテ法元亂世ノ純名ヲ付シタリ、言行謹直些事ヲ顧ミ能ク人ヲ導クノ人ナリトシテ、以為頃年屢々聞ク、西洋ノ醜虜久シク

皇國ヲ窺フノ志アリ、本藩ハ琉球諸島ヲ奄有ス、外寇ノ患最其先ニ居ル、守禦ノ術特ニ重シトス、今ヤ果シテ西洋人琉球ニ来ル其志測ルヘカラス、処分ノ得失ニヨリテ邦家ノ安危ニ係ル、予カ輩其事ニ拘ラスト雖トモ、臣タル者邦家ノ事アルニ臨ンテ、社稷万全ノ策ヲ思ハサルヘケンヤ、是秋一友人命ヲ奉シ安田助左衛門ナリト云海ニ航シテ琉球ニ役ス、開帆ニ臨ンテ予ニ請フニ、琉球ノ処分ヲ記シテ贈ラン事ヲ以テス、予謂ラク、事ニ処シテ善ヲ謀リ変ニ応シテ明ニ断スルハ學術ノ要道也、故ニ予メ所定ノ方略ヲ記シ、問ヲ設ケ答ヲ致スコト十余条トス、其所論ハ弓銃ヲ用ヒス劍戟ヲ旋サス、扇ヲ

揮ヒ煙ヲ吹テ談笑ノ間醜虜ヲ却クルノ術也、他日此事
ノ成敗当否ヲ試ミント欲スルノミ、

天保甲辰秋八月五日 五峯山人誌

琉球秘策

客問テ曰、佛朗察琉球ニ來テ交易及ヒ和好ヲ求ム、是
ヲ許サンヤ否、又軍兵ヲ發シテ武威ヲ主トシ是ヲ追払
ンヤ否、對曰、孫子十三篇ニ始計廟算ヲ根本トス、方
今彼我ノ形勢ヲ廟算スルニ、大綱ノ趣意絶ツト和トノ
二策ヲ用ユベクシテ、戰ハ用ユベカラス、絶ツトハ何
ノ謂ゾヤ交易・和好ヲ絶ツ事也、和トハ何ノ謂ゾヤ、
通商和好ヲ許スノ事也、窃ニ西洋ノ情状ヲ料ルニ、佛
朗察陽ニ交易和好ヲ以テ琉球ニ告ト云トモ、陰ニ琉球
ヲ從ヘテ根本トシ、漸々南海諸島ヲ蚕食シ
皇國ヲ覬覦スルノ志ナラン、今ヤ屢聞ク、歐羅巴州各
國ノ徒西洋ニ交易セサル國々ハ、兵船ヲ發シ攻伐スベ
キトノ議有テ日本國ハ交易ヲ絶ツ、故ニ西洋ヨリ攻伐
スベキトノ説アリト、頃年諸厄利亞唐土ト戰テ勝ヲ得

其勢猖獗ナリ、去々年諸厄利亞和蘭船ニ由テ大府ニ告
ルニ來寇ノ情ヲ以テス、且ツ薩摩ニ恨ミアル故薩摩ニ
來ルベシト云ヘリトソ、市廣曰、天保十三壬寅夏來崎和蘭船ノ上
告書中ニ、本書中ニ、本書ノ趣ヲ記シタリ、
中ニ就テ、先年琉球屬島ニ漂流セル英人ヲ殺シタルヲ記シ、其罪ヲ問
ハント記シタリト、之レ文政七年ノ夏寶島ニ於テ吉村九助ナル者カ銃
殺シタルヲ云ナラン、上告書ノ趣、此使節船ハ常ノ蘭船ニ非ス、
諸厄利亞或ハ佛朗察也ト云、又此秋西洋ノ使節船長崎
ニ來テ大府ニ密書ヲ呈ス、此使節船ハ常ノ蘭船ニ非ス、
諸厄利亞或ハ佛朗察也ト云、又琉
球ニ佛朗察來テ通商和好ヲ求メ天主教ヲ弘メントシ、
且告ルニ、諸厄利亞他日兵船ヲ遣スベキノ事ヲ以テス、
諸厄利亞ト佛朗察トハ各自ニ別國ト云ヘトモ、皆歐羅
巴州中ノ國ニテ其人一体ナルニ、彼船長崎・琉球一時
ニ來ルハ疑フベキニ非ズヤ、彼等所謀アルニ似タリ、
彼南洋爪哇（哇カ）ハ西洋ノ徒東海往來ノ要港巢窟トス、琉球
モ亦西洋ノ爪哇（哇カ）ノ如クスル志ナラン、然ルニ今ヤ佛朗
察琉球ヲ窺フ、我軍琉球ニ至リ彼カ所求ヲ断然許サス、
更ニ武威ヲ主トシ追払フ術ヲナサハ、西洋人恨ヲ結ヒ
釁ヲナスヲ幸トシ、他日其國ノ兵ヲ發シ、或ハ歐羅巴
諸國ト議シテ、大軍ヲ起シテ來リテ琉球ヲ攻メン、干
戈一タヒ起ラハ復タ解クヘカラス、本藩亦精銳ノ兵ヲ

扱ヒ、大軍ヲ出シ海ニ浮テ、遠ク琉球ヲ争ハンニ、吾
 邦昇平久シク戦ニ習レス、殊ニ海上ノ戦ハ彼長シ我短
 勝利ナキ事明カ也、假令海上ノ戦ニ及ハス琉球ニ至リ
 孤島ノ城ヲ守ルモ敵多ク、我寡ク中山王必ズ降り、外
 ハ急卒ノ応援ナク始終ノ勝利アルヲ見ズ、然ルニカク
 ノ如ク重兵ヲ琉球ニ遣ストキハ、本藩ノ守リ空虚トナ
 ルベシ、彼歐羅巴州ノ諸国兵ヲ合シ力ヲ戮セテ大船數
 千百艘、薩摩・琉球往来ノ海路ヲ遮リ、大島・徳島等
 ハ勿論、屋久島・種子・甕等ノ諸島ヲ奪ヒ沿海ノ諸郡
 村邑ニ寇シ、魔府逆モ海路自由ナレハ、直ニ魔府ニ来
 リ襲ハン事モ側ルベカラズ、且ツ是ヨリシテ日本國中
 ノ干戈トナルベシ、干戈一タヒ起ラハ莫大ノ禍從テ起
 ル事見ルカ如シ、佛朗察ハ歐羅巴洲中ノ大国ニ係レリ、
 其本国長サ六百里日本里數、下是ニ倣へ、横四百余里、諸厄利亞ハ
 西洋ノ島国ニテ其大サ南北經度、東西緯度共二十度一
ハ日本里數ニテ
大抵十里ニ当ル、此二国本国ノ大サ此ノ如シト雖トモ亞
 細亞洲・利未亞洲・亞墨利加洲等ノ内ニテ遙領ノ屬国
 甚多シ、又歐羅巴洲内上ノ二国ヲ除テ外魯西亞・伊斯

巴彌亞・波爾杜瓦彌・意太里亞・弟而萬爾亞等ノ諸国
 ハ、皆五大州ノ各国ニ交易シテ遙領ノ国土多シ、今佛
 朗察ト一度干戈ヲ結フトキハ、魯西亞等ノ諸国モ是ニ
 応援シテ心ヲ同シ力ヲ戮セ来リ寇ス事モ測リ難シ諸厄
人唐土ト戰爭ノ時ハ、歐羅
巴州ノ諸国モ応援ノ説有リ、本藩三州ノ力ヲ以テ世界ノ大
 国ト戰爭ヲナス、其勢ノ懸絶思ハスンハアルベカラズ、
 且夫兵法ハ、或ハ我ヲ守リ或ハ敵国ヲ攻メ、進退虚実
 変化百出シテコソ勝利ヲ得ルモノ也、然ルニ西洋ノ諸
 国ハ數万里ノ大洋ヲ隔テ、我ト彼ト兵ヲ交ルハ、敵ヨ
 リ常ニ攻ヲ受ルノミニテ、我ヨリハ數万里ノ海ヲ渡リ、
 敵国ヲ攻ルコト能ハス、故ニ戦ヲナスニモ追払フ切リ
 ニテ、俗ニ所謂受太刀ニテ形勢ノ利ナキヲ見ルベシ、
 是ニ由テ見レハ本藩ノ地方ハ本也、琉球ノ屬国ハ末也、
 本藩ノ本ヲ虚フシテ琉球ノ末ヲ争フハ我失策ナルノミ
 ナラズ、其大禍大害ナルコト明也、凡ソノ名将ハ常ニ不
 敗ノ地ニ立テ全勝ノ策アル時ノミ戦ヲナス、危敗ノ機
 アルトキハ戦ハサル也、或ハ戦テ勝チ、或ハ不戦シテ
 敵ヲ屈ス、皆名将ノ術也、愚將ハ是ニ反ス、孫子曰

兵者国之大事死生之地存亡之道不可不謹也ト、此言思フベシ、故ニ琉球ノ処分ハ絶ト和トノ二策ヲ主トスベシ、必ズ戦ヲ用ユベカラズ、又考フルニ、凡古来双方戦ニ及ヒ一方戦ニ負タル後遂ニ和談トナリタル例甚タ多シ、若シ方今此方ト西洋ト戦ヒニ及ヒ戦或ハ利アラズンハ、時宜ニ依リ和談ニナル事モ知ルベカラズ、未タ戦ハサル始ニ彼ト和議ヲナセハ、此方彼ニ押付ケラル、事モナキ故、何ソ恥ニナラサル事ナシト、既ニ戦負タル以後和議ニナレバ、彼ヨリ縦恣ニ威力ヲ逞シテモ、此方ヨリ彼ヲ抑ヘ制スル事ハ成難キ勢ニナリテ、此方ハ頭ヲ上ル事ナラサル也、其時ノ残念想像スベシ、故ニ今事ノ始ニ彼我ノ形勢ヲ料テ、絶ツト和トノ二策ヲ用テ戦ヲ戒ルナリ、若シ又戦ニ及タル上ハ拳国死戦シテ和議ヲ為スベカラズ、頃年清国ト諳厄利亞国ト兵争ノ事ヲ記セル書ヲ見ルニ、阿片商売ノ事ヨリ起ル、古来阿片商売免許ナリシカ、国害アリシ故清国ヨリ禁セラレシニ、故アリテ戦ニ及ヒ清人連年戦ニ利アラズ、遂ニ清国ヨリ和ヲ請ヒ和成ル、故ニ諳厄利亞人種々縦

恣ニ威ヲ逞スレトモ、清人抑ヘ制スル事アタハス、清人モ和議ヲナスナラハ事ノ始メニナセハ、其失ナカリシナルヘシ、前車ノ覆ヘルハ後者ノ戒メ、方今ノ事モ近キ清国ノ事ヲ以テ鑑トスベシ、

客問テ曰、戦ノ害ナルハ既ニ聞ク、其絶ツト和トノ方略ヲ聞カン、対テ曰、先ツ絶ツ策ヲ明ニシ、而シテ後ニ和スルノ策ヲ述ン、西洋諳厄利亞人往年ヨリ屢々琉球ニ来リ或ハ通商ヲ請フ、昨年モ琉球八重山島ニ来テ測量ス、其通商ノ如キ琉球皆是ヲ辞シテ止ム、然ルニ又今度琉球ノ説ヲ聞クニ、佛朗察カ琉球ヲ窺フ其志一朝一夕ノ事ニ非ズ、彼國人ト唐人トヲ残シ大総兵船重テ来ラント告タルニテ其情形ヲ見ルベシ、佛朗察ノ言ニ、諳厄利亞久シク琉球ヲ取ルノ志アリ市廣曰、英米佛ノ弁ヲ謀ランカ爲メ、琉球ヲ根拠ノ地トセンノ意アルヲ、日本往來ノ留ノ琉臺ヘ道台ヨリ密告セシコトアリシハ三四年前ノコトナリト云フ琉吏ハ秘シテ藩庁ニ告ゲザリシト、其秘シタル所以ハ若シ之ヲ告ルトキハ、守衛ノ兵ヲ出シテ事ノ繁縷ヲ厭フニアリシト云フ、此事他日藩庁聽ク処トナリ、或ハ甲辰三月、佛船来リテ請フ処ノ条件中ニモ取捨スル旨アリシト、如此琉吏隱蔽スルノ事情尠カラサルカ故、藩吏ヲ琉人ニ變姿セシメ親シク応接ノ場ニ臨席セシムル、他日必ズ兵船ヲ至レリ、是ヨリシテ琉吏隱蔽スルコトヲ得ズ、
遣ハサント言ヘルニテモ、諳厄利亞カ往年以来ノ所為

ニ符合セリ、諸厄利亞ハ唐土ノ事未タ全ク結局セスト聞ケハ、彼事終テ後ニ来ラン、故ニ此秋ハ必ズ佛朗察来リ琉球ノ答ヲ聞クベシ、サテ佛朗察来ル時ハ、我渡海ノ士卒ハ潜マリ蔵レ蕃人ヲシテ知ラシムベカラズ、琉球ヲシテ彼ト応対セシムベシ、其応接ノ方ハ礼ヲ恭フシ、辞ヲ卑シ琉球産物ノ好品ヲ莫大ニ贈リ、對ヘシムルニハ、貴国所告ノ事更ニ相議スルニ、当春所答ノ如クニテ更ニ他方ナシ、琉球国小ク財乏キ故一國ノ力ニテ貴国ト交易ノ品ナシ、蔽邑常ニ唐土・日本トノ力ニテ貴国ト交易ノ品ナシ、蔽邑常ニ唐土・日本トノ力ヲ以テ財食ノ供給ヲ遂ケ僅ニ国立コトヲ得ルナリ、特ニ日本諸島ノ如キ琉球ト隣近セル故其往來便利也、琉球大風多ク米穀都テ尽ル事多シ、其外水旱飢饉ニ逢フヤ唐土稍遠キ故、大旨隣近日本諸島ノ力ニテ餓死ヲ免ル且諸器ニ至テモ日本諸島ヨリ致シテ我用ヲ足ス、故ニ日本（ヲ）離レテ我國独リ立ツ事ヲ得ズ、然ルニ日本国法天主教ヲ禁シ、西洋諸国ト交通ヲ禁スルコト甚嚴ナリ、貴国ト交通スルトキハ、全ク日本ト通スルコト能ハス、

長ク日本ト絶ツ、今日日本ヲ離レテ貴国ノ命ニ從フトキハ、貴国ノ力ノミ是頼ム、貴国ノ如キ遠ク海上數万里ヲ隔ツルヤ貴国ノ船ノミ琉球ニ至リ、此方ヨリハ貴国ニ至ル事ヲ得ズ、我急卒ノ飢饉若クハ事変等ニ逢フヤ貴国ニ告クルコトアタハズ、貴国亦事故有テ此ニ来ルコトアタハサル時ハ、琉球如何トモスルコト能ハズ、假令財宝山ノ如ク積ムトモ、飢死ヲ死〔免カ〕レス、貴国又天主教ヲ授ントス、既ニ前日所告ノ如ク、蔽邑既ニ孔子ノ教ヲ学ブ、故ニ他教ヲ受ル事ヲ得ス、且国民天主教ヲ習ヘハ日本ト絶ツ、其患前ニ所述ノ如シ、今貴国蔽邑ヲ保護セントス、其仁慈謝スルニ言ナシ、然レトモ交通ヲ得サルノ情状実ニカクノ如シ、伏テ願クハ寛宥ヲ垂テ亮察ヲ加ヘ玉ヘト云々、簡様ノ趣意ニテ交通ヲ断ルベシ、然レトモ当春既ニ右之趣意ニテ佛朗察ニ琉球ヨリ述タルナラハ、今亦同趣意ニテ断ルハ重複ニシテ返答ノ要機ニ非ラズ、故ニ時宜ニ由テハ佛朗察ニ答フルニ、前文ノ意ヲ本トシテ、更ニ未タ所不告ヲ以テ、是ニ答テ実ヲ履ミ義ヲ立テ答フベシ、然ルニ右ノ趣意

ニテ交通通商ヲ断リテ西洋人許容セハ大幸也、然レトモ西洋ノ徒種々ノ事ヲ言ヒ立テ許容セサルトキハ、先ツ唐土ノ北京ニ中山王ヨリ使ヲ遣シ、唐土ノ天子ニ上疏シテ願フベシ、其趣意ハ西洋人來リ留リテ交通通商等ノ事ヲ強テ請フ、然ルニ琉球国小クシテ貧乏ナル故ヲ以テ、西洋ノ徒ニ是ヲ辞ス、然レトモ西洋人聽カズ如何トモスルコト能ハズ、琉球ハ唐土ノ属国ナル故、仰キ願クハ詔ヲ西洋佛朗察等ノ国王ニ下シ、琉球国小ク財乏シ、若シ西洋ニ通商通交ヲナス時ハ国困ミ財匱シク、一國是カ為メニ立ツコトヲ得ズ、今中山王上疏シテ実ヲ奏ス、故ニ西洋ヨリ琉球ニ通商通交ヲ為スコトナカレト、固ク禁制ヲ垂レ玉ヘト願ヘシ、唐土ノ天子ヨリ西洋ノ国王ニ詔ヲ下サム、西洋ノ国王謹テ詔ニ從テ、琉球ニ來ル事ヲ止テ舟船ヲ引去ラン、然レトモ今ヤ唐土ノ天子モ西洋ノ徒ト合戦シテ敗績シ、或ハ西洋ニ詔ヲ下スコトヲ肯ンセス、或ハ西洋ニ詔ヲ下シテモ、佛朗察国王等唐土ノ詔ニ從ハスシテ、猶琉球ニ彼国ヨリ通商通交等ヲ求メ、止マサルトキハ其実ヲ告テ

云ヘ、琉球ハ陽ニハ唐土ノ封爵ヲ受クト雖モ、又日本ニ貢シ日本ヨリ保護ノ国タリ、琉球国小クシテ独立スルコトヲ得サル故ナリ、且日本ト境ヲ接シ、飢饉凶歲等皆日本ニ救ヲ仰ク、若シ日本ト絶タハ琉球タ、ス、故ニ万事日本ノ免許ヲ受スンハ、琉球独リ決断シテ事ヲ行フ事ヲ得ス、故ニ貴國直ニ日本長崎ニ至テ琉球通商等ノ事ヲ請フベシ市廣曰、英米仏琉球ヲ占領セントスルノ念ハ、全ク日本交通ノ非ヲ得ンカ為メナリ、若シ琉球カ兩屬ニ非ラズ獨立国ナルトキハ、彼ハ兵威ヲ以テ脅迫スルヤ必セリ、然ラサリシハ彼既ニ兩屬ナルヲ亮知スレバナリ、然ルニ琉球ハ清國所屬ヲ表唱シ、日本所屬ニ外ナシ、幕府ヲアリハ隱蔽シタルハ識慮狹隘ニ外ナシ、日本ニハ霸王幕府ヲアリテ國事ヲ決断ス、外國ノ通処ハ長崎ト云ヘル処アリ、其(地カ)他ノ日本官吏ニ啓スベシ、近クハ薩摩ナレトモ、薩摩ニテハ其事通セスト教ヘ、直ニ日本長崎ヘ振付ル手段ヲ為スベシ、且此事ハ成丈ケ琉球人ヨリ言語ニテ説シメ、文字ニテハ述フベカラズ、文字ニテハ形跡残りテ不可ナレハナリ、凡ソ西人ニ応接ノ法、務メテ謙卑ノ礼ヲ用ヒテ忤フコトナキヲ第一トスベシ、凡人情ハ手下テ礼ヲ卑フスレハ相手ヨリ暴横ハナラサル者也、尤此方ヨリ言フコトノ遂ケサルヲ以テ残念ト思ヒ強テ

押付ケ、事ヲ敗リ彼ヲ激スベカラズ市廣曰、琉球ハ貴賤トモニ寸鉄ヲ帯ヒス、全ク守札ヲ以テ國ヲ保ツノ國体ナルガ故本書ノ意素ヨリノ長所トスル所ナリ、則宋能ク剛ヲ制スト謂テ不可ナキカ如シ、甲辰以來英・米・仏ノ暴威ヲ恐レス、耐忍シテ遂、是第一ノ心得也、然ルニケニ事ナクシテ渠退去スルニ至レリ、是第一ノ心得也、然ルニケ様ニ答ヘテ直ニ日本ニ往クコトヲ許容セス、彼カ所求

ヲ琉球ヨリ許サル故、彼種々ノ事ヲ言ヒカケ怒リノ色ヲ見ハシ、侵掠或ハ干戈ニ及フベキ機サシアルヲ見ハ、〔審カ〕藩人ニ告クルニ、日本ト相議シテ再答スベキヲ以テス

ベシ、此方計ニテハ潜ニ許ス事ナラズ、此事日本返答ノ上ニテ非サレハ決シカタキトテ其事ヲ延緩スベシ、カクテ渡海ノ官徒兩三人本府ニ帰リ其事ヲ啓スベシ、尤輕キ和好モ通商モ大府ノ許可ナケレハナラサルコトナレハ、下条ノ趣意ニテ大府ニ請フベシ、若シ諂厄利

亞來テモ同法ヲ用ユベシ、又其交易場ハ、琉球八重山・宮古島ヲ以テスベキヲ蕃人ニ乞フベシ、大信公モ嘗テ

琉球先島ニ於テ權場ヲ開カレ、珍宝ヲ得ラルベキ議迄ハアリシトシ市廣曰、重蒙公ハ英邁剛果識慮卓出ノ君ナリ、曾テ和蘭人「シイポルド」ナルヲ江戸ニ於テ見玉ヒ、尋テ掃國ノ途次長崎ニ於テ尚懇遇セラレ、其時先島ノ内与那邦島ハ小ナリト雖モ良港アルヲ以テ該島ニ於テ貿易セシ事ヲ約セラシト今村家々

記ニ記セリ、當時此ノ如キノ企アル、今ニシテ胆略ノ大ナル知ルベシ齊彬公ハ専ラ重蒙公ノ薰陶ヲ受ケ玉ヒ、加之天品ノ顯器ナルカ故、早

ク茲ニ見ル処アリテ、琉人ノ名義ヲ以テ通信、貿易ノ請ヲ允サレシト密ニ計畫セラレタリ、然レトモ蕃人若シ

之ヲキカザルトキハ、彼ハ運天ニテ交易ヲ為サシムベシ、薩人ト一所ニテ交易セサル様ニスベシ、一タヒ彼

ト交易ヲ開クトキハ多事必ズ起ルモノナリ、後來ノ禍永年ノ害ナキ様ニ熟考詳議シ、堅固ニ法律ヲ建ツベシ、

或人又問テ曰、大府ニ西洋通商ヲ請フニハ何様之道ヲ以テスベキヤ、對曰、琉球ハ慈眼十八世家久公以來本藩ニ

臣屬シ附庸ノ國トナル、然レトモ唐土ノ封爵ヲ受ルコト故ノ如シ、邦君ノ命ニテ薩摩附庸ノ國タルコトハ海

外諸國ニ泄スコトヲ禁セラレ、陽ニ許サル、ハ寶諸島寶諸島ハ七島ヲ云往來通商スルノミ也、然レトモ唐土及ヒ海外

諸國モ其実ヲ知ラサルモノナシ、其事唐土諸書ニ多ク見ユ、唐土ヨリ中山王ノ封爵ヲ受ルユヘ、海外諸國ヨ

リ云ヘハ日本ト並ヘル一國也、薩摩附庸ノ國ト稱シ、琉球十二万石ハ本藩七十万石ノ内ナルハ日本國中迄ノ

事也、琉球唐土ヲ父トシ日本ヲ母トスル、此言実ニ稱ヘタリ、往昔韃靼ヨリ明國ヲ取リシ時、琉球ヲ胡服ニ

改ムベキ聞ヘアリテ大府ニ啓セラレシニ、大府ノ命下

リ何様モ清王ノ処分ニ従フベキ命下リシコトアリ、其事左ノ如シ、

寛永十五年寛永十、
五戊寅、邦君十九代
光久公唐土ノ軍兵琉球ニ寇セン

トスルヲキキ、迺チ伊東肥後守祐昌・平田狩野介宗弘

・猪俣爲右衛門則康ヲシテ琉球ニ使セシメラル、十月

五日帆ヲ開ク、翌年四月十九日祐昌・宗弘琉球ヨリ帰

リ事竣ル故也、此時ハ清人未タ明ヲ取ラス、明ノ東南

ハ流賊李自成・張獻忠等兵乱盛也、琉球人寇トハ流賊

ノ属ナリシニヤ、正保元年甲申明崇禎十七年
清順治元年、清太宗、明

ノ北京ヲ取テ都トシ国号ヲ清ト云、四年中山王第廿六世
尚質カ代ニ当ル

邦君大府ニ啓シ、伊知地縫殿介重治・遠矢金兵衛良珍

ニ命アリ、兵卒ヲ率テ八重山島ニ行キ守リ外寇ニ備フ、

翌年其守兵ヲ罷ラル、明暦元年明世祖順
治十二年七月、先是藥丸

マヤ形部左衛門長崎ノ藩邸ニ在リ、福州ノ来船ヨリ聞クニ

清王詔アリ、海舶ヲ福州ニ遣リ使ヲ遣シ琉球ヲ招撫ス、

既ニシテ琉球藩州ニ状啓ス、時ニ邦君江戸ニ在リ、藩

相島津圖書久通・伊勢兵部貞昭・新納右衛門久詮・町田勘解

由久則・鎌田源左衛門直政等相議シテ曰、琉球古来吾薩ノ

附庸タリ、今韃靼ノ為メニ衣冠ヲ変セラレントス、果シテ然ラバ独リ公ノ恥ノミナラズ、

皇国ノ恥ナルニ似タリ、宜シク公ニ以聞シテ大府ニ請

ヒ琉球ヘ軍立シテ是ニ備フベシト、此月十九日中村佐

五右衛門・鎌田甚兵衛ヲシテ江戸ニ如カシム、藩相島

津筑前久頼・島津中務久茂ニ由テ公ニ以聞ス、八日邦

君酒井讚岐守勝ト議シ、久茂ヲシテ松平伊豆守信ニ請

ハシメラル、二十二日信綱等公ヲ召シ論シテ曰、宜シ

ク琉球ヲシテ韃靼王ノ命ヲ聴カシムベシ、若シ韃靼王

ノ命ヲ絶ハ國難又起ラン、敢テ禍ヲ招クコトナカレ、

其他事ノ如キ唯君ノ所令ヲ許ス、九月久通等命ヲ奉シ

テ、迺チ高崎總右衛門能乘・本田六右衛門武親ヲシテ渡

海セシメ旨ヲ琉球王ニ諭ス、二年丙申尚質王清人船ヲ

発シ、使ヲ琉球ニ遣サントノコトヲ聞テ悦ヒス、藩相

ニ啓シ、藩府処分アリテ軍ヲ備ヘンコトヲ請フ、蓋シ

高崎等未タ達セサル故也、八月是ヲ大府ニ告ラル、

旧記ニ所見スクノ如シ、琉球ハ前条ニ述シ如ク、表向

ハ唐土ノ属国ナレハ、日本国中ノ処分トハ異ナルベシ、

佛朗察既ニ清主ノ勅許ヲ得テ唐土ニ隣近セル属国ニ通商スト云ヘハ、琉球ハ表向唐土ノ属国ナル故清主ノ命ヲ拒ミ難シ、然レトモ表向通商ヲ許ストキハ、佛朗察人ノ片口ノミニテハ信シ難シ、更ニ琉球ヨリ清国ニ問テ其実否ヲ明ス義モアルベシ、清国ニ再問スルハ此方通商ノ事延緩スルハ好計ト雖、此方ノコトニ於テハ却テ一得一失アリ、其故ハ清主別段通商ノ許アレハ、其事堅固ニナリテ此方ヨリ自由ニ止メ難ク、佛朗察ニ通商ヲ許スハ此方ノ許ノミニテモ整フ事ナレハ也、明曆中大府ノ命ニテ琉球ノ衣冠ハ清主ノ命ニ從ハシメラレシハ、異国処分ノ例ヲ用ユルハ明曆ノ例ト同意ナレハ、大府ノ例ヲ引テ請ヒ、且通商ヲ許サスンハ干戈ノ禍起リ、日本迄モ乱トナルベキコトヲ以テ告ケハ大府之ヲ許サン、明曆中大府ノ命ニ若シ清主ノ命ニ從ハスンハ国難起ラン、禍ヲ招クコト莫レト示サレシハ方今通商ノコトモ同意ナリ、若又大府是ヲ許サスンハ藩人^(蕃カ)ニ論スニ、日本ニ請ヒシニ日本許容セス、故ニ如何トモスルコト能ハス、此上ハ更ニ貴国ヨリ日本ニ請テ其許可

ヲ受クベシ、日本許サハ琉球之レニ從ハン、実ニ琉球ノ事情ヲ仁察スベシト答フベシ、然ラハ藩人^(蕃カ)必ス得心シテ琉球無事ナラン、

客又問曰、西洋通商ノ事大府若之ヲ許ストモ、西洋人琉球ニ齎シ来ル諸品琉球及ヒ本藩ノミニテハ売尽スコト能ハス、大府ヨリ今ノ唐物ヲ禁スル如ク、他出ヲ禁セラルトキハ其害甚シカラシ、对曰、大府唐物ノ他出ヲ禁セラルハ其利ニ因テ設ケタル法也、故ニカ、ル時

ハ大府モ其禁ヲ開カスンハアルベカラズ、若シ大府ヨリ西洋諸品他出ヲ禁セハ大府ニ啓シテ云ヘシ、禁開カスンハ琉球タタズ、琉球タ、スハ西洋ニ降り、遂ニ日本ノ兵乱ヲ招カントノ意ニテ、啓シ破リ其免許ヲ得ルベキナリ、西洋通商ニ於テハ、本藩ノ利ニナル様ニ計

策ヲ運スベシ市廣曰、從來幕府カ長崎ニ於テ支那及ヒ和蘭人カ船載ノ物品ヲ専売シテ利ヲ龍^(魁カ)斷スルハ衆人カ知ルカ如シ、然ルニ琉球人モ年々福州ニ往來シテ商事ヲ營ミ國計ヲ為スカ故、其齎ス処ノ品物ハ鹿兒島ニ送り薩隅日三州ニ費スノ外ハ長崎ニ出シテ幕府ノ商會ニ買上ヲ請フノ例規ニシテ敢テ自由ニ販売スルコトヲ得ズ、其買上ル処ノ価モ原価ニ僅々一二分ノ利ヲ与フルノミ、若シ密売スルモノアルトキハ幕府ハ藩府ニ命シテ嚴刑ニ処セシム、其例少カラズ、又藩府ハ琉球人ノ請願ニ依リテ品物ノ數及ヒ年限ヲ定メ買上ゲシハ人カ中山王ニ向テ請求セシ如ク貿易ヲ開クトキハ、其物品自由商

充ヲ允サ、ルヲ得サルノ理ナリ、若シ拒絶スル時ハ、渠兵力ヲ用フルニ至ルヤ論ナシ、然ルトキハ日本ノ体面ヲ穢スハ無論致ラ以テ本書論スル旨時勢已ムヲ、得サルト謂ベシ、

客又問テ曰、通商一タヒ起ラハ、^{〔蕃カ〕}藩人勢ヲ得テ、在番奉行ハ漸々勢微弱ニナリ、彼次第ニ大島諸島ヲ蚕食シテ制シ難キ形勢トナラン、在番奉行ハ今ノ如クニテ可ナルベキヤ、對テ曰、此事子カ説ノ如シ、誠ニ通商ヲ許スコト甚タ残念ノ事也、実ニ止ムコトヲ得サル計ニ出ル也、前文ニ述ルカ如ク、方今西洋ノ徒唐土ニ戰ヒ勝チ其勢張皇也、若彼ニ通商ヲ強テ辞シ俄ニ干戈ニ及フトキハ、我國昇平久シク戰ニ習レス始終ノ利アルヲ見ス、且

皇國ノ乱ヲ引起ス、故ニ機宜ニ依テハ通商ヲ許サントス、通商起ラハ^{〔蕃カ〕}藩人ノ勢漸々張り蚕食ノ形ヲ生セン、故ニ今ヨリ以後此方別段武ヲ講シ兵ヲ練リテ是ニ備ヘ^{〔蕃カ〕}藩人ノ勢ヲ鎮圧スベシ、此武備ヲ修スル事第一ノ義也、夫通商許サ、レハ干戈或ハ俄ニ起ラン、是レ我利ニアラズ、又通商ヲ許セハ^{〔蕃カ〕}藩人ノ勢漸々張ル故ニ、遂ニハ干戈トナルベシ、我之ヲ知テ武備ヲ修スル故、俄ニ干

戈ニ及フヨリ敵ヲ制シ安シ、俄ニ干戈起ルト漸々起ルトハ干戈ニ及フコトハ同シケレトモ、其遲速ニテ利害異ナリ、此後武備ヲ修シテ後干戈ニ及フハ我利多シ、若武備ヲ修セスンハ通商ヲ許ストモ無益トシルベシ、其武備モ西洋ニ用フル天砲^{〔通唱〕}・地砲^{〔通唱〕}等ノ火器ヲ多ク造ルベシ、武備ノコトハ文長キ故ニ此ニ略ス、通商開キタリトテ、琉球ノコトハ清主ヘノ礼或ハ在番奉行ノ渡海ハ今ノ如クスベシ、但在番奉行等モ武備ヲ加フベシ、

客又問テ曰、西洋人久シク留ルノ計ヲ為シ、彼ノ方ヨリ那覇等ノ地ニ館舎ヲ造ラントスルトキ、琉球ヨリ之ヲ禁止ストモ聽カサル時ハ如何、對テ曰、琉球人ヲシテ先ツ禁止セシメテモ、西洋人必定ノ勢有テ聽サルトキハ、琉球ヨリ彼カ為メニ館舎ヲ造リ与ヘテ、西洋ヨリノ手ニテ作ラサル様ニスベキ也、其故ハ琉球ヨリ館舎ヲ作レハ、他日時宜ニ依リ其館舎ヲ毀廢スルコトモアルベキナレトモ、彼方ヨリ館舎ヲ造レハ琉球ヨリ毀廢スルコトハナラサル故也、且ツ西洋人一タヒ館舎ヲ

造レハ、又其外西洋ノ諸国追々来テ方々処々ニ館舎ヲ
 建ル例トナリテ、先キ々々限リナキ害アルベシ、又琉
 球ヨリ西洋ニ告ルニハ、琉球ニハ外国ノ人ニ館舎ヲ造
 ラスル国ナキ故、此方ヨリ造リ与フルナリ、表向ニハ
 西洋ニ礼讓ノ趣意ニテ告ルベキ也、仮令支費アリテモ
 琉球ヨリ造ルベシ、

客又問テ曰、西洋人ニ通交ヲ絶ツ策ヲ用ヒ、若佛朗察
 許容シテ引去ルトキハ又諸厄利亞来ラン、佛朗察ハ風
 俗稍ヤ敦厚敦厚ニ非ス
浮薄ナリニシテ、諸厄利亞ハ武暴也ト聞ク

殊ニ諸厄利亞ハ往年寶島・山川等ノ事有リテ彼恨ヲ含
 ム、去々年長崎ヨリ伝ヘ聞クニ、薩摩ニ恨ミアル故薩
 摩ニ来冠スベシト云ヘリトソ市廣曰、天保八年丁酉七月尾ヶ
 水ニ渡来、日本難民數名ヲ護送

ス砲撃シ去ラシム、其、方今佛朗察ノ言ニモ諸厄利亞琉球
 事實前卷ニ記スカ如シ

ヲ取ルノ志有リ、他日兵艦ヲ遣サントノ説モアレハ彼
 必ズ来ラン、然シ諸厄利亞ノ害ハ佛朗察ヨリ大ナラン、
 對テ曰、此事尤患フベシ、諸厄利亞カ来否ノ情ヲ料ル
 ニ重ネテ来ルベシ、然レトモ佛朗察ヨリ諸厄利亞ノ必
 ス兵船ヲ遣スト告タルハ、己カ交通ヲ得ル為メニ云ヘ

ル詐謀虚喝モ計リ難ク、且何レノ日カ果シテ来ル事ニ
 シテ、去レハ佛朗察ヘ交通ヲ許シカタシ、故ニ今一往
 交通ヲ絶ツノ策ヲ用ユルナリ、方今渡海ノ日、更ニ諸厄
 利亞来否ノ情形ヲ探ルベシ、諸厄利亞武暴ナルコト諸
 書ニ見得、且往年ヨリ度々琉球ヘ通商ヲ乞フテ許サル
(サ脱カ)
 上ノコトナレハ、今一度来ルトキ通交ヲ許ササラハ干
 戈ヲ用ルニ近シ、故ニ其通商ヲ許スハ諸厄利亞ヨリ寧
 ロ佛朗察ナルベシ、去々年壬寅天保十
 三年寅ノ年諸厄利亞ト清

国ト講和ノ積文ヲ見ルニ、先年御取揚相成ル阿片ノ代
 銀二千一百万兩之内、此度六百万兩被相渡、其残り銀
 ハ証文ヲ差出サレ、毎年五百万兩ツ、五分ノ利付ニテ
 可相渡云々、兩國和睦相定リタレトモ、阿片代銀ノ内
 当年六百万兩相渡タラハ、南京・河上・舟山・古浪嶼
 等へ寄置タル戦船可引退、然レトモ残り銀皆同不相渡
 内ハ惣体退去不相成、残り銀総渡シ相濟タル上可致退
 去云々ト見得タリ、此文ニ抛レハ、総銀二千一百万兩
 清国ヨリ諸厄利亞人へ返シ与へ、後処々ノ戦船ハ引退
 ク義ナルニ、此総銀二千一百万兩ハ大抵一歳ニ五百万

兩ツ、与フル算法ニ当レハ、去々年壬寅^{天保十}ノ年ヨリ
来年乙巳ノ歳ニテ四年ヲ歴テ首尾スルナリ、然ルニ諸
厄利亞唐土ノコト結局ト云フハ、彼阿片代銀総首尾ノ
コトヲ云ルナルベシ、然レハ諸厄利亞カ琉球ニ来ルハ
来年ヨリ後ナルベシ、諸厄利亞来ルトモ、前条ニ云
ヘル如ク佛朗察ニ応スル策ニテ可ナルベシ、然レトモ
我守備ハナスベキ事也、

客又問テ曰、西洋人琉球ニ交通ヲナストキハ天主教ヲ
弘メン、其事如何シ、对テ曰、天主教ハ織田信長ノ時
ヨリ始マル、京都ニモ両寺アリ、豊太閤西侵ノトキ肥
前ニテ彼宗門ノ徒禍ヲナス、故ニ始テ天主教ヲ禁セラ
ル、然レトモ天主教ヲ禁セラル、ノミニテ西洋人ノ来
ルコトハ禁ナシ、既ニシテ其教法又漸々行ハル、東照
烈祖ノ御時ニ至リ西洋ノ徒潛ニ来リ告テ曰、西洋ノ徒
天主教ヲ弘ムルハ、其教法ニテ人心ヲ服シ日本国ヲ奪
リ取ル計也ト、於是烈祖始テ禁令ヲ嚴ニシテ西洋人ノ
通商ヲモ禁セラル、天主教ノ弘マル害ヲ見ルベシ、方
今若シ琉球ニ西洋ノ通交ヲ許ストモ其初二天主教ハ禁

スベキ也、是太閤ノ令ト同義也、其天主教ヲ禁スル訳
ハ、琉球若シ天主教行ハル、トキハ日本ト往来スルヲ
得ズ、日本ト路ヲ絶タハ凶歳ニハ餓死ニ及フノ儀ヲ以
テスベシ、且ツ琉球ヨリ其国人ニ令ヲ下シ天主教ヲ受
サラシムル道モアルベシ、

客又問テ曰、方今官吏渡海ノ上西洋人ヨリ和館ヲ焼弘
ヒ種々ノ狼藉ヲ為シ、或ハ中山王ヲ生捕テ中山王彼レ
ニ降ラハ如何、对テ曰、簡様非常ノ変ニ値フトキハ是
非ナキコトナリ、然ルトキハ我兵ヲ発シテ^(藩力)番人ヲ討平
クベシ、成敗利鈍ハ天也、力不足ハ戦死センノミ、又
時宜ニ因テ大島ニ引取り兵ヲ加ヘテ攻伐ノ術モアルベ
シ、

或人又問テ曰、琉球ハ清国ヨリ封爵ヲ受テ表向ハ其属
国ナリ、今西洋ノ徒清主ニ請ヒ患フベキノ術ヲナサン
欵、对テ曰、此事患フベシ、今佛朗察ノ徒清主ニ請ヒ
清主ヨリ琉球へ詔ヲ下シ、西洋トノ通商及ヒ天主教弘
通スベキヲ許シアルモ計ルベカラズ、今清国勢弱シ、
西洋強シ、西洋是ヲ清主ニ請ハ、清国其請ニ従ハン、

佛朗察当春一往琉球ヲ引キ去ルハ、清国ニ至リ此謀ヲナスモ知ルベカラズ、若清主ヨリ此詔下ラハ、本藩ヨリ、私ニ是ヲ禁スルコトハ得ベカラズ、宜シク大府ニ告テ、其裁決ヲ受クベシ、又琉球ヲシテ清国ニ願ヒ、通商・天主教ノコトヲ免センコトヲ言ハシメ、其事ヲ延緩スベシ、本藩ヨリハ私カニ琉球ニ命シテ天主教ヲ禁スル道アルベキカ、通商ノコトハ前ニ論スルカ如シ、或問曰、若西洋人大兵ヲ発シ琉球ヲ奪ヒ中山王是ニ降ル時ハ、我国兵ヲ発シテ討テ之ヲ復スベキヤ、対テ曰ク、我邦兵ヲ発シ琉球ヲ争ヒ難シ、其事巻初ニ論スルカ如シ、然ル時ハ琉球ニ書ヲ贈リ、時節ヲ以テ討ツベシト告ゲ置クベシ、時節ト云へハ年月ヲ定メサル言ナリ、然ラハ我威令墜ルコトナシ、或又問曰、前条所論ノ外ニ良策ハナキヤ、対テ曰、今所論ハ多ク東照烈祖ノ意ニ本ツク、豊太閤ノ方略ハ多意表ニ出テ臨機応変ノ策有リ、預メ言カタシ、余亦前条所論ノ外ニ琉球ノ難ヲ除ク妙計アリ、是秘奥ノコトナレハ言外ニ出サス

編者考フルニ妙計、云々則開市ナラム

客又問曰、琉球ハ本藩兼領ノ地ニテ、其十二万石大府朱章ノ封内ニ係ル、然ルニ今藩人ニ交通ヲ許サントス、通商ノ路一タヒ開カハ其害多シ、何ソ初発ヨリ戦ヲ主トシ、琉球ヨリ藩地ニ至リ人皆死守セハ義ニ当レリ、何ソ和ヲ主トシテ士氣ヲ弱フスルヤ、対テ曰、是余カ深謀遠略ニ出ツルナリ、琉球ハ我兼領ノ地ナリト雖トモ、表向唐土ヨリ封爵ノ国ナレハ

(虫損) 皇国封城ノ内ハ名義異ナリ、我藩ニ附庸タタルハ日本国中迄ノコト也、其詳ナルハ前章ニ論スルカ如シ、故ニ海外諸国ニ推出シテ言へハ、本藩ヨリ軍ヲ発シテ琉球ニテ戦フモ隣国応接ノ義ヲ免レズ、故ニ通商ヲ藩人ニ許シタリトテモ義理ニ失アルヲミス、仮令ハ清主ヨリ琉球ニ表向勅ヲ下シ、西洋人ニ通商及ヒ天主教ヲ許サル時ハ、本藩ヨリ表向西洋人ニ対シ其命令ヲ破ル事能ハサルカ如シ、其命令ヲ破ルコト能ハサルハ唐土ハ表向、本藩ハ内属ナレハ也、又俄ニ得失是非ヲ料ラズ強テ彼ヲ押へ干戈ニ及ハ、速ニ禍乱ヲ招キ或ハ邦ノ危ニ至ラン、故ニ時宜ニ随ヒ無事ノ計ヲ為シ、武備ヲ

増修シテ其変ニ備フ時ハ、邦家ノ不虞ヲ保ツナリ、其
死守義ニ当ルトテ得失是非ヲ料ラズ卒カニ戦ヒ徒ラニ
死スルハ、愚失ノ見匹夫ノ勇ニテ、是浪リニ戦ヲ主ト
シ速ニ亡国ヲ招ケル宋ノ賈似道カ類ナリ、且ツ本藩ノ
人性多クハ一旦ノ勇氣ヲ恃ミ、遠大ノ略少シ、深ク戒
ムベキ也、故ニ予ハ深謀遠略ヲ主トシテ社稷長久邦家
安全ノ良策ヲ用ユル也、

甲辰夏天保十五
甲辰年夏

此本稿ハ川村純義保存ス、同氏ハ法允氏ノ親戚ナレハ
ナリ、

市廣曰、法允氏ノ友人磯永孫四郎周徳ヨリ聞ク処ニ擲レ
ハ、此書ハ江戸邸ニ在テ記シタル者ニシテ、齊彬公之
ヲ覽玉ヒ賞納セラレ、尚ホ将来ノ計画或ハ守備ノ策ヲ
諮問セラレシニ奉答ノ一篇ヲ捧ケタリト、然シテ丙午
ノ年軍制改革ハ専ラ其奉答ニ拠ラレタリト云フ、丙午
ノ年軍制改革ニ方リテ、法允氏ハ軍賦役ニ撰用セラレ
大砲鑄製局ヲ兼ネタリ、○軍賦役ニ撰用セラル、ノ事
実ハ、軍制改正ノ部ニ記シタルカ如シ、

〔表紙〕

齊興公史料

弘化元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数五十九枚）」の記載あり〕

目録

- 和蘭船長崎へ入湊
- 和蘭船入湊ニ付出張ノ届
- 長崎奉行ヨリ支配向へ触達
- 伊澤美作守和蘭船処分ニ係リ指揮ヲ請フ
- 長崎奉行伊澤美作守ノ届
- 長崎聞役和蘭国使節船渡来ノ形況報告
- 封内儉約衣服制度

- 鹿兒島海岸警衛方ノ通知並回答
- 小笠原佐渡守ヨリ阿部伊勢守へ届
- 奥四郎ノ長崎事情報告書
- 和蘭国王書翰ノ和解
- 大村藩ノ長崎報告
- 齊彬公在琉佛人ノ情況探問
- 齊彬公密ニ銃砲兵書ノ購求ヲ試ム
- 武器調査ノ令
- 和蘭国使節船渡航ニ係ル書類通知
- 大和守伊澤美作守へ達
- 大和守大目付・目付へ達
- 和蘭国使節船実況見聞ニ係ル照会
- 和蘭国使節船渡来ニ係ル堀大和守達送付
- 水戸藩士武田彦九郎老侯ノ冤ヲ訴フ
- 文政鑄造ノ草字二分金等停止
- 本丸造営費減額上納方
- 琉球渡海ノ役人心得方照会
- 廣大院殿薨去

水戸中納言ノ謹慎有免

改元勅文

和蘭船渡来ニ係ル書類送付

改元令

江戸本丸城造營費献納ニ係ル藩情

四七二 和蘭船長崎へ入湊

七月二日

阿蘭陀船長崎鶴ヶ湊へ入港、船長百十一間二尺・巾十
七間・深十七間余・船頭櫓四十一間・中櫓四十五間三
尺・船尾櫓三十八間五尺・大筒五十四挺・乗組人数三
百七十二人、内水主七十二人、

四七三 和蘭船入湊ニ付出張ノ届

七月三日

於長崎阿蘭陀本国仕出ノ船一艘昨二日未下刻入津ニ付
高鋒島辺へ為致滞船、外疑敷義モ無之旨伊澤美作守ヨ
リ彼地差置候家来ノ者へ以書付被相達候趣申越之、承

知仕候、最前モ委細申上候通、例阿蘭陀商売船ト相達

候付、諸事為手配家老諫早豐前儀ハ先達テ長崎表差遣

之、尚又為手配親族家老鍋島伊豆早速差越申候、右ニ

付私儀モ明四日ヨリ彼地罷越候儀御座候、此段御届仕

候、以上、

四七四 長崎奉行ヨリ支配向へ触達

七月

此度阿蘭陀本国仕出ノ船一隻当港へ致入津候、右ハ是
マテノ通商船ニモ無之別段渡来ノ儀ニ付見物ノモノ共
猥ニ出申間敷候、若シ船ニ乘リ本船近キ所乗廻シ見物
ニ紛敷分モ候ハ、見請次第名前等承始末ニ応シ急度
可為沙汰、尤所用有之候通船ヲ差止候義ニハ無之間無
差支様可被心得候、

右之趣被得其意支配向ノ者へモ不洩様可被申渡候、

四七五 伊澤美作守和蘭船処分ニ係リ指揮ヲ請フ

七月

阿蘭陀国王ヨリノ呈書並献上物本国仕出ニテ差越候
旨、在留「カヒタン」申出候ニ付、取計方奉伺候書
付、

伊澤美作守

去月十七日以来追々申上置候阿蘭陀国王ヨリ、御政道
ノ御為ニモ可相成筋申上候可奉捧書翰趣ニテ、為使節
役柄ノ者渡来可有之旨、咬啣^{〔ウラヒ〕}頭役ヨリ在留「カヒタ
ン」方へ申来候段、横文字差出候ニ付、取扱方ノ義個
条書ヲ以奉伺置候、然ル処去ル三月申上候通り、大船
入津イタシ高鋒島前へ碇卸サセ置、「カヒタン」ヨリ
船中主役ノモノへ御国法ノ次第為相論、檢使ノモノヨ
リモ再応和解申聞候間、合砲之儀当方ニテハ不致御国
法ノ趣其餘ノ廉々承伏仕、玉葉差出候儀ハ彼方国法ニ
拘リ何分主役之不任心底国王恥辱トモ相成、右恥難雪
歎敷申ヲ以、別紙之通横文字差出並奉捧候書翰差上、
献上物ノ儀モ相伺候書面差出ニ付、左ニ箇条ヲ以取計
方奉伺候、

一 玉葉之儀軍船ノ名目ニテモ懸念仕候程ノ儀ハ無之候へ

トモ、新規ノ儀ニモ有之候間、帰帆ノ節相渡候様可仕
哉ノ段奉伺置候処、猶又歎願ノ趣ヲ以テ再応勤弁仕候
処、文化元子年渡来イタシ候「ヲロシヤ」国ノ使節乘
組候船ハ、檢使見分ノ上玉葉等取上候へトモ、何レニ
テ取上候哉、何分場所ノ処相分不申、尤右ハ通商無之
国ノ船ニテ、阿蘭陀トハ訳モ違ヒ、殊ニ此度ハ御政道
ノ御為ニモ可相成筋厚ク心得、遙々波濤相凌遠海乘渡
其上士分ノモノノミ乗組候儀ニ付、「ヲロシヤ」ノ例
通意味違ヒ、素ヨリ野心差狭^{〔狭カ〕}候懸念ノ筋ハ更ニ無之
候間、取上候テハ氣変ニモ相拘リ可申候、是非取上候
様可致旨被仰出候御書付無之候間、今般ニ限り別段ノ
訳ヲ以取上不申、檢使見分ノミニテ差置候様可仕候哉、

但本船高鋒島前ニ碇卸為致置候処、同所ハ聊ノ風ニ

テモ余程波立、番船モ風烈ノ砌ハ中々繫留兼、双

方ニテ難渋イタシ候場所ニ有之、当夏仕出ノ唐船

モ三隻程追々入津イタシ候積リ、諸国ノ商船入津

等モ有之候節ハ殊ニ混雜イタシ差支候間、長ク難

差置、両家々来御備向ニモ不相拘候間、西泊御番

所取締宜敷場所ニ付、同所へ船挽入錠卸為致置、

御下知有之候迄ハ相応ニ番船附、御備向不相弛様

両家並御鉄砲方へモ別段ニ相達シ、檢使船差出置

不取締無之様精々心付候積ニ御座候、

一和蘭國王ヨリ奉捧候書簡之儀、江府ニオイテ御聞届ニ

成候上ハ、「カヒタン」差添御役所へ罷出可申候欵、

又ハ御下向有之候御役人へ差出候様可仕哉ノ段「カヒ

タン」相伺申候、右書翰受取候様御下知……

但書翰有之候ハ、差出候様通詞ヲ以主役へ承候処、

右ハ封物ニテハ無之、別ニ口上ニテ申上候筋モ無

之、委細ハ不存候へ共、御政道ノ御為筋ノミ認有

之候心得之由、無急度申聞候趣通詞共申立候儀ニ

御座候、

一朝貢物ノ儀ハ江府へ持参、御同所ニテ相開、小道具類

夫々組立仕上候様仕度旨相伺申候、右ハ如何申渡スへ

キ候哉、

此献貢物ノ儀、品柄相分兼候間通詞相尋候処、蘭人

共殊ノ外秘シ置、白地ニハ不申候へ共、

一 阿蘭陀国王姿画

一 一切子大燭台最上品

一 上品花生

但フロンスト申金之種類ト硝子ニテ樽ラへ候

物ノ由、

一 火燈

但火焰ノ方便ヲ以形ヲ成シ、俗ノ廻リ燈籠ト

唱候物ノ由、

一 ピストール短小筒一種ノ名

但巢中六有之候六眼短銃

一 カラベイン短筒一種ノ名

但箱入ニ相成申候、

一 書籍類並地圖入合箱

右ノ段内々承リ候趣通詞共申聞候、

右ノ通箇条ヲ以テ奉伺候、且ツ書簡並献上物更ニ御

取上無之帰帆被仰渡候ハ、容易ニ承伏帰帆イタス

マシク、尚ホ種々歎願申出無限滞船イタシ候様ニテ

ハ、多人数乗組心得違生シ間敷トモ難申候ニ付、御

賢察ノ上得ト納得仕候様ニ被仰渡〔虫摺〕ノ魯西亞国

へ使節へ帰帆被仰渡候砌ハ、御目付〔虫摺〕 金四郎当所

へ差下シ、奉行別座ニテ申渡シ候趣ニ御座候、此之

節ハ御目付在勤中ニ候へトモ猶又御目付被差下候ハ

、御手厚之処奉感戴帰伏仕候筋ニモ可有御座哉ニ

奉存候、横文字和解トモ四通相ソへ奉伺候、以上、

辰七月

伊澤美作守

四七六 長崎奉行伊澤美作守ノ届

七月三日

去月十七日在留「カヒタン」申出候旨ヲ以テ阿蘭陀国

王ヨリノ呈書持参仕候、本国仕出シ船ニテ使節ヲ以申

越シ候ニ付、渡来其段申上置候処、昨二日未下刻右紅

毛船一隻入津イタシ候、高鋒島へ碇為御候上着船固メ

申付置、為検使組与力・同心・通詞共並在留紅毛人差

遣シ様子相糺候処、国王ヨリノ呈書咬啣咄表へ差送り、

此度船中主役ハ一エマ・コークト申スモノ持参仕り乘

組人数三百二十二人入津イタシ候旨、諸州へ船ヲ寄セ

候儀無之段質人二人差出シ、其後前書差出シ、主役ノ

モノ儀モ出島阿蘭陀屋敷へ上陸イタシ、外ニ疑ハシキ

儀相聞不申候、尤松平肥前守・松平美濃守家来共へ兩

御番所其外御台場所手配等申達置候、委細ノ儀ハ篤ト

相糺追テ可申上候、右阿蘭陀船ノ儀ハ松平肥前守家来

へ申渡シ、御役所ヨリモ掛ノ者差出取締申付置候、

四七七 長崎聞役和蘭国使節船渡来ノ形況報告

七月三日

昨二日朝、日ノ出時分野母崎遠見番所相図ノ石火矢打

初メ候処、追々所々ノ固メ場ヨリ打続キ大事相初リ候

ト市中俄カニ大騒キニ相成リ、御役所ニモ大混雜之処、

昼時分兩御番所ノ沖手ニ到着碇ヲ卸シ質人出島ニ御受

取相成候由、船ノ長サ四十二三間程・乗組人数三百人

余ト申ス事ニ御座候申立ノ趣有之、態々差立候使節ニ

テ候旨申出候ニ付、与力兒玉締之助・中澤市兵衛外ニ

一人為検使乗付候由、

同日夜入諸家聞役御呼出シニテ、和蘭本国使節船渡来

ノ旨被相達、非常手当向夫々相心得候様ニトノ趣ニ御座候、

船中ハ武器計リ積込商売品等ハ一切積入無之由ニ御座候、

右不取敢形行御届申上候、以上、

但筑前様・佐賀様御届書ニ通差上候、

七月三日 奥 四郎

別紙

諸家様御手当左ノ通御座候、

筑前様当年御非番年ニ候ヘ共、御心入ヲ以テ大小船百六十隻程、人数上下千六百人余近日可被差出、其内百八十人位ハ当分御屋敷内ヘ相詰居不取敢則ヨリ大小船ニ乗込渡来船相固メ候、

佐賀様ハ御当番ニテ兩御番所ニ年中詰人数上下千余人大小船百余艘則ヨリ御固メ相成リ、此上五百人位ハ近日被差出候由、

諫早^{佐賀藩中}ヨリモ二百人余、深堀鍋島孫次郎ヨリモ百人余差出候由、

右今日マテノ形況ニ御座候、尚ホ追々御届可申上候、以上、

辰七月三日 奥 四郎

四七八 封内儉約衣服制度

七月八日

今般格別之御儉約被 仰出別段申渡通候、然ルニ此度

ハ訳テ

御身辺ノ儀ヨリ稠敷 御省略御加ヘ被遊

御公界向 御召物等モ半減ト被 仰出、御不断

御召料等ハ他国品御取入不被為 在、御国織ノ鈍品ヲ

以テ乍

御不自由可被為 濟トノ厚

御趣意之趣

御内沙汰奉承知、只々当惑奉恐入候儀ニ奉存候、仍テ之通、

御一門方並

島津和泉一列

大目付以上

一年頭ヲ初其外格別成礼式事ニ相拘候節、衣服・熨斗
目其外之品トテモ御式ニ不相欠候ヘハ宜候、成丈ケ
餽品可被相用候事、

但

是迄羽二重等ノ場、龍紋・絹類被相用候テモ不苦
候事、

一下着ノ儀右ニ可準事、

一右外衣服ノ儀ハ紬・太織類其余綿服被相用候テモ是

又不苦候事、

但

何レモ可為餽品事、

一羽織之儀ハ縮緬・龍紋類、又ハ紬・太織並木綿等被

相用候テモ不苦候事、

但

縮緬・龍紋其外モ成丈ケ餽品ノ方可然事、

一袴之儀、唐琥珀ハ出来出来候儀可為無用、丹後・琥

珀・棧留・小倉類ニテ相調可然事、

但

成丈可為餽品事、

一麻上下之儀、成丈餽品ニテ出来出来可然候事、

但

芭蕉布上下、麻ノ場ヘ被相用候テモ不苦候、

一夏服之事、越後縮並晒之儀モ成丈ケ餽品ニテ可被為

濟候事、

但

縞柄モ同断

一羽織之儀、縞並紗又ハ薄物被用候テモ不苦候事、

但

縞・紗出来候向モ成丈ケ餽品可然事、

一夏袴ノ儀、精好平・仙台平以来出来不相成候、川越

平・呉撰平類ニテ出来可然、尤諏訪平・葛布類ハ着

用有之候テモ不苦候事、

一懷中道具・鼻紙袋・煙草入ハ結構ナル切レニテ出来

候事、又金銀金物並銀キセル等ノ類、此節ヨリ屹ト

不相成候事、

但

矢立モ同断

一 武器類ニ金銀召仕候儀ハ別段、其外金銀等猥ニ相用候儀ハ屹ト可為無用事、

女中方衣服

一年頭ヲ初右ニ類シ候式事ニ相拘候衣服・熨斗目等ニ準シ候品ハ可為是迄之通事、

但

羽二重、縮緬モ龜品相用、成丈ケ龍紋・絹類ニテ

相濟セ、惣模様等モ其格式ニサヘ逢候ヘハ宜筈候

付、模様縫等折角手輕キ方可然候、

一下タ着ノ儀モ右ニ準シ可為龜品事、

一一ト通り祝事等ノ節ハ惣模様無之候テモ宜候、其外

衣服ノ儀ハ絹・紬・太織類・木綿物着用有之候テモ

不苦候、折角龜服ノ方可然候事、

一女中带以來結構成品屹ト相求申間敷事、

一櫛・笄類以來結構成品屹ト相調申間敷事、

一下女共衣服、年頭其外格別成式事ニ相拘候節、主人

ヨリ遣候品ニ候ヘハ、其節丈ケ致着用候テモ不苦候、

右外絹物着用不相成、都テ木綿物等着用可致事、

但

襟袖口、絹・紬・太織類、帯ハ太織類用候事不苦候、輕キ裾模様附ケ候儀ハ差免候、

一所持ヨリ

寄合直触

御役人マテ

一年頭ヲ初メ格別ナル祝事之節、熨斗目其外ノ衣服其

式不相欠候ヘハ宜敷候、尤是迄羽二重等用來候場ニ

ハ龍紋・絹類可為龜品、就テハ下タ着ノ儀モ右ニ準

シ龜品可然事、

一右ノ外ハ紬・太織類成丈ケ木綿物着用可然候事、

一羽織ノ儀、縮緬又ハ龍紋・絹・紬・太織類、右ハ折

角可為龜品、成丈木綿物着用可然事、

一袴之儀、唐琥珀不相成、丹後・琥珀類・和棧留・小

倉類 籠品可相用事、

但

丹後・琥珀類相用候向モ候ハ、可為籠品事、

一 麻上下ノ儀モ可為籠品、且又芭蕉布上下、麻ノ場へ

相用候テモ不苦候、

一 越後縮並晒ノ儀モ成丈ケ籠品ニテ可相濟候事、

但

縞物モ同断

一 羽織之儀、縞並紗又ハ薄物用候ハ、成丈ケ可為籠品

候事、

一 夏袴之儀、精好平並仙台平以来不相成候、川越平・

呉撰平・諏訪平・葛布類相用不苦候事、

一 懐中道具・鼻紙袋・煙草入類、金銀金物結構ナル切

レニテ出来候方又ハ銀キセル類屹ト相用申間敷、縦

令持合候品ニテモ可為無用候事、

但

輕キ革ハ不苦候、

女中衣服

一年頭ヲ初メ右ニ類シ候式事ニ相拘候衣服・熨斗目ニ

準シ候品、是迄ノ通ニテ宜候、併以前縮緬・羽二重

ノ場ハ、龍紋又ハ絹ニテ惣模様、縫入等ノ処至極手

輕ニイタシ、其格式サヘ欠キ不申候へハ宜候、成丈

ケ入価ニ不及所第一ニ候事、

一 下着モ右ニ準シ可為籠品事、

一 一ト通り祝事ノ節ハ惣模様着用不致候テモ不苦候

成丈ケ紬・太織類・木綿物着用可然、以来模様等モ

至極手輕方宜敷候、

一 女中以来結構ナル品屹ト相求申間敷候、

一 櫛・笄・カウカイ類、已来結構ナル品屹ト相調申間

敷候事、

一 女共衣服之儀、年頭其外格別ナル式事ニ相拘候類

ハ、主人ヨリ遣シ候品ハ其節迄用候儀ハ不苦候、然

レ共下着絹物ハ不相成、木綿物着用可然候事、

但

模様物着用不致候テモ不苦候事、

一 下女共不断衣服ノ儀ハ屹ト可為綿服事、

但

襟・袖口等ハ絹・紬・太織等不苦、且又裾模様等

輕ク附候儀ハ差免候、帯ハ太織類不苦候、成丈ケ

木綿物タルヘク候、

一 櫛・笄・コウカイ・玳瑁並ニ銀カンサン類屹ト相成

ラス候事、

御作事奉行

以下小役人

小番新番

御小姓与マテ

一年頭ヲ初メ格別ナル式事ノ節、熨斗目ニ準シ候品分

限ニ応シ其式サヘ不相欠候ヘハ宜候間、成丈龜品可

相用、其余ハ絹・紬・太織成丈ケ木綿物タルヘク候、

又分限ニ応シ諸事手輕ニ致度者ハ其通ニテ宜候事、

一 冬羽織之儀、縮緬・絹・紬・太織成丈木綿相用可申

事、

但

縮緬・絹用候向ハ折角龜品可然事、

一 袴之儀、唐琥珀並ニ奥島不相成、御供服丹後・琥珀

・棧留用ヒ候テモ苦カラス、其外棧留・小倉右ニ類

シ龜品相用可申事、

但

丹後・琥珀相用候向ハ成丈龜品可然事、

一 麻上下可為龜品事、

但

芭蕉布上下、麻ノ場ニ相用候テモ不苦候、

一 越後縮並晒ノ儀モ成丈ケ龜品ニテ可相濟候事、

但

縞物同断

一 夏羽織ノ儀、縞並紗薄物用候テモ不苦候事、

但

縞並紗相用候向ハ成丈ケ龜品可然事、

一 夏袴之儀、精好平・仙台平不相成、川越平・呉撰平

類其外諏訪平・葛布類相用候事不苦候、

女向衣服

一年頭ヲ初メ右ニ準シ候式事ニ相拘候衣服、模様物持合候者ハ是迄ノ通りニテ宜候、以来ハ麁品ニテ可相調、成丈ケ模様モ輕ク附ケ可申事、

但

右等ノ品不相調候テ可相濟存候モノハ其通り宜敷候、

一下着モ右ニ準シ弥可為麁品事、

一ト通り祝事等ノ節ハ模様物用不申候共宜候、

一女帯ハ結構成品、以来相求申間敷候事、

一櫛・笄・カウカイ類、以来結構成品屹ト相調申間敷候、

一懐中道具・鼻紙袋・タバコ入類、金銀・カナ物結構ナル切レ々々ニテ出来候事、又銀キセル類等、屹ト

相用ヒ申間敷候、

但

輕革ハ不苦候、

一下女共衣服惣体可為木綿候、縦令主人ヨリ遣候品トテモ絹物着用不相成候、

但

輕キ裾模様・襟・袖口、絹・紬・太織類ハ差免候帶、太織類不苦候、成丈可為木綿候、

一下女共櫛・笄・カウカイ、ベツコウ・銀笄其外結構成品屹ト不相成候、

郷士以下

一男女共衣服可為木綿、縦ヒ重キ方又ハ主人ヨリ遣候品ニテモ絹類着用屹ト不相成候、

但

襟・袖口類、肩衣・袴裏へハ、絹・太織類相用候事不苦候、左候テ女共ニハ輕キ裾模様附ケ候儀差免候、帶ハ太織類不苦候、

一上下ハ折角麁品ニテ可相調候、肩衣、紹又ハ紗ノ類差免候、然共成丈麁品可相調候、

但

芭蕉布上下、麻ノ場ニ用可然事、

一夏衣服、越後縮並縞物モ着用可為無用候、晒ノ儀モ

倉品ハ差免候、成丈布類相用可申事、

一男女共懐中道具、金銀金物矢立其外銀キセル類金銀

金物附ケ候事不相成候、尤鼻紙袋、羅紗又ハ織物等

ノ切レ不相成候、

但

輕キ革ニテ出来候事ハ不苦候、

一櫛・笄・コウカイ、ベツコウハ勿論銀笄其外結構成

品用候事不相成候、

但

重キ方又ハ主人等ヨリ遣シ候テモ相用候事不相成

候、

一諸郷々士年寄並組頭各外城ノ長・次職名

一御小人頭足輕ノ長御兵具方肝煎・御広敷小頭御広敷足輕ノ長職名

一三町惣年寄並年寄御城下上・下・西田村三市街ノ長職名

右勤中袖・太織類着用御免被仰付候、

右之通被 仰付候条一統難有奉承知、此度ハ

御趣意急度相守、聊致忘却間敷候、万々一心得違ノモ

ノモ候ハ、可被及

御沙汰候、右之通向々ハ不洩様可申渡候、

七月八日

調所笑左衛門

廣郷

碓山將曹

久徳

赤松主水

則甫

四七九 鹿兒島海岸警衛方ノ通知並回答

此度渡来ノ阿蘭陀船咬啣啞頭役ヨリ「カヒタン」ヘ差

越候書簡ノ内、阿蘭陀国王ヨリ御政道筋御為ニモ可相

成儀可申上旨ヲ以テ、商売船ニ無之態ト差仕立差越候

段申出候由ニテ、松平肥前守様ニハ長崎ヘ御越被成候

由別紙ノ通御届相成、松平美濃守様ヨリモ別紙ノ通御

届相成候由ニ候、就テハ自ラ御国元へモ長崎御奉行衆ヨリ御達ニモ相成、浦々御手当向等手拔ハ無之筈候へ共、猶又殿重取計有之候様可申越トノ御事ニ候間、其通被相心得無手拔可被取計候、此段御内用ヲ以テ申越候、以上、

辰七月八日

赤松主水

調所笑左衛門

島津主計殿

島津石見殿

菱刈安房殿

島津 登殿

猪飼 央殿

右回答

本文相達候、長崎御奉行衆ヨリ浦々被入御念候様被仰渡候旨、在勤長崎御付人兼務奥四郎申越候ニ付、御取締向等ノ儀兼テ被仰渡置候通、早速申渡候段ハ先月二十日便御問合申越候通、此旨及御返

答候、以上、

七月廿七日

右ニ貼紙

本文通認置候処、奥四郎長崎ヨリ差立候飛脚諸家一同聞役へ被相達、則チ其許へモ申越候段申越候ニ付、自ラ御手当向為被取計賦ト存候ニ付、委細ノ儀ハ不申越候、此段為御心得以張紙申越候、

四八〇 小笠原佐渡守ヨリ阿部伊勢守へ届

七月九日

去ル二日阿蘭陀仕立ノ船一隻長崎表へ入津ノ処、外ニ疑敷儀モ無之段、伊澤美作守申達候ニ付、全四日御届申上候へトモ、売買船ト相違ノ儀ニ付、旁家老前場幸右衛門使者申付彼地へ差遣申候、且同所屋敷へモ家来少々差遣申候、万一御差図御座候ハ、早速人数差向候心得ニテ用意申付置候、尤時宜ニ寄私儀モ相越候儀モ可有御座候、此段御届申上候、以上、

在所目付
小笠原佐渡守

七月九日

七月十日

奥四郎ノ報達スルヤ、形勢視察或ハ臨機応援ノ為メ出兵スヘキヤ否ヤ、藩吏唐船改役出崎シ奉行所ニ申禀ス従来長崎ニ事アルニ方リテハ応援出兵ノ例、規アリ、故ニ如斯申禀セリ

七月十一日

和蘭使節船平穩ナルカ故目下応援出兵ニ及ハス、然レトモ臨機達シノ趣モアルヘキニ依リ予シメ心得アルベシトノ趣、伊澤美作守ヨリ聞役奥四郎ヘ達シタリ、四郎ハ飛檄ヲ以テ之レヲ藩庁ニ報ス、爰ヲ以テ一手ノ人数ヲ臨機出兵ノ準備トナシ、尚ホ藩吏数名ヲ遣シ事情ヲ視察セシム、

四八一 奥四郎ノ長崎事情報告書

先日御届申上候後、尚ホ追々承合候形行左ノ通御座候、

一去ル二日和蘭本国船入津イタシ、御奉行伊澤美作守殿ヨリ飛脚ヲ以テ江戸表ヘ御届ニ相成候由、

一全三日御代官廣瀬七郎平其外役々蘭船ニ乗込、渡来ノ次第御調ニ相成候由、

一船ノ総長三十三間位、横幅十間内外、深サモ幅同様位、乗組人数三百人余、是マテノ通り商船ハ船底銅板ニテ張り有之候処、此度入津ノ船ハ黒色ニ相見ヘ候ニ付、鉄ニテモ可有之哉ト申事ニ御座候、

一此節入津ノ船兵器並毒燃硝火薬多分所持仕候ニ付、御奉行所ヨリ御預リ可被成旨御沙汰相成候処、蘭人ヨリ不差出候由、依之鍋島様御年番故御問合セ相成候処、御申立ノ趣ハ、所持ノ兵器御取揚可被成再応被仰渡候ハ、彼ノ兵器御恐レノ道理且ツ日本ノ御武威モ御薄キニ相聞得候訳ニ付、当方ニモ其心得ヲ以テ猶嚴重ノ手配モ可致候間、其儘被成置可然旨御答有之候由ニテ、兵器ハ矢張其儘ニ差置有之趣ニ御座候、一蘭人為入質二人差出候由、直ニ紅毛屋敷島ヘ被差置候趣ニ御座候、

一 是迄通商ノ為メ渡来ノ蘭人ハ、ジャガタヲヨリ渡来致候者共ニ御座候処、此度渡来ノ者ハ皆和蘭本國ノ者共ニ御座候由、

一 此節入津ノ蘭人、願ノ筋有之由ニ風説モ有之候ヘトモ、和蘭國ノ願ニ無之、イギリス・フランス・アメリカ・ロシア國等ヨリ通商和好願立ノ模様有之、近年中軍船取仕立罷渡候モ難計候ニ付右御知ラセ旁ニテ、是迄通ニテハ御大事ニ可相成候ナト申上候由、此一ケ条ハ奉行所ニオイテモ其筋ノ外ハ御秘密ノ由ニテ、兼テ御館入ノ通詞ヨリ極内風説ト申処ニテ申出候、

附箋

本文ノ趣書翰和解、極内差出候様厚ク頼入置候

ニ付、差出次第御届可申上候、

一 先年肥後国川尻ノ船乗人兄弟異國ヘ漂流致シ候処、彼ノ方ヘ備前國ノ者モ漂着致居、右者共ト申合セ帰國願居候処、幸ヒイギリス國ノ高官日本ヘ通商願試ノ為メ渡来ノ企有之、水先案内又ハ通舟ノ為メ乗込

マセ、七・八年前相州浦賀辺ヘ乗寄セ候処、鉄砲ニ

テ打込ヒニ相成リ、夫ヨリ薩州ノ方ヘ乗来リ天保八年丁酉七月

山川兎ケ水村沖合ニ渡来ノ英船ヲ云フカ、同所ニテ漂流人ハ上陸為致度相談

ニ及ヒ候処、是又同様ニ被打込候ニ付、致方ナク船

乗戻シ候由、右次第ノ事ニテ、右肥後ノ者共ニハ如何様ニモ致シ帰國致シ度存念ニテ、右和蘭・英吉利

・佛朗西・魯西亞其外ヨリ日本ヘ通商願ニ付武器・

兵糧又ハ船ノ手当等致居候趣、右二人親共ヘ書状唐

船便ヨリ差送り候由、右親共ヨリ御領主細川様御役

人マテ差出候ヲ、細川様ヨリ奉行所ヘ進達相成リ、夫

ヨリ 公辺ニ出上リ候由、然ル処此節紅毛人申立ノ

趣ト大概符合致シ居、何分根深キ次第ニテ此後容易

ナラサル事ニ可成立旨モ承得候、

一 今度使節ノ紅毛人ヨリ奉行伊澤美作守殿ヘ差出候書

翰和解、極内御館入方屋敷出入ヲ云ヨリ差出候間差上申候

此ケ条中ニ一二ケ条ハ相除キ候ケ条有之由申出候、

右ハ奉行所ニ於テモ至極秘密ニ致シ候故、相除キ別

紙ニ取添候由ニ承及候、全ク交易一件ニ諸國ヨリ追

々渡来可致旨ニテ、万一相洩候テハ人氣ニ相拘ルト
ノ事ノ由ニ御座候、

右旁御届申上候、

辰七月十二日

奥 四郎

異国船掛
御家老衆

四八二 和蘭国王書翰ノ和解

和蘭国王書翰 献上物目錄
和解逸ス

鍵箱ノ上封和解 書中割註ハ訳者
ノ思考ニ據ル

此印封スル箱ニハ和蘭国王ヨリ

日本国帝 征夷大將軍
ニ奉ル書 ニ呈スル書翰ノ鍵ヲ納ム、此書簡ノ

事ヲ司ルヘキ命ヲ受ケタル貴官ノミ開封シ給フヘシ、

曆数千八百四十四年第二月十五日 日本天保十四年十
二月廿七日ニ当ル、瓦

刺汾法瓦 和蘭国
ノ都府ニ於テ記ス、

和蘭国王密議庁主事ノ名花押 文字読
ミ得ス

崎陽所訳名氏アーケー・フワンラプバン

書簡外箱上書和解

日本国帝殿下

和蘭国王

神徳ニ依頼スル和蘭国王兼 オランダ
エム阿朗月 ノ地名、納騷 乙都
ノ地名

ノ「プリンス」爵、
リニキ
センム
フルク魯吉 魯吉
恐
護
勃
兒
孤
ノ
地名「コロード

ペルイフ」名
爵微爾列謨第二世謹テ、政庁ニマシマス徳

位最モ高ク武威隆盛ナル

大日本国君殿下ニ書ヲ奉シテ微衷ヲ表ス、冀ハ

殿下觀覽ヲ賜ヒテ、安寧無為ノ幸福ヲ享ケ給ハン事ヲ

祈ル

抑々今ヲ距ルコト二百余年前ニ世ニ誉高クマシマセシ

烈祖權現家康ヨリ信牌ヲ賜リ 慶長五年庚子和蘭国ノ船初テ本
邦ニ來リ、同巳酉年七月廿五日

神祖ヨリ御朱印ヲ賜ヒタルヲ云フ、今、我カ国ノ人貴国ニ航シ

茲三甲辰年ニ至リテ凡ソ二百三十六年、我カ国ノ人貴国ニ航シ

テ交易スルコトヲ許サレシヨリコノカタ其待遇淺カラ

ス、甲比丹モ年ヲ期シテ

殿下ニ謁見スルヲ許サル 甲比丹江戸拜礼ハ毎年ナリシニ、寛政
二庚戌年ヨリ五年目トナレリ、此二年

ヲ期シテト記シタルハ、蓋シ近、聖恩ノ隆厚ナル実ニ感激ニ

堪ヘス、我モ亦信義ヲ以テコノ交替ナキ信義ニ答ヘ奉

リ、イヨイヨ

貴国ノ封内ヲシテ静謐ニ庶民ヲシテ安全ナラシメンコ

トヲ欲ス、然リトイヘトモ今ニ至ルマテ書ヲ奉ルヘキ

緊要ノ事ナク、且ツ又交易ノ事及ヒ尋常ノ風説ハ拔答

ヒニア爪哇島府ノ名ナリ、元和五己未年和蘭國ノ人全

非亞ヒア島ヲ奪ヒ蘭瓦答刺城ヲ改メテ、パタアピアト云、及ヒ和蘭領

亞細亞ヒア和蘭國ノ人印度地方ノ數島ヲ併セ奪ヒテノ給督ヨリ告ケ

奉ルヲ以テ、兩國書ヲ相通ルコトアラサリシニ兩國書ヲ

トナシト云フハ誤ナリ、慶長十四己酉ノ年七月廿五日、同十七壬子ノ

年十月神祖ヨリ和蘭國王ヘノ復書アリ、蓋シ和蘭國歴代治平ノ日ナキ

ヲ以テ文獻ノ徴スヘ、今茲ニ親望シ難キ一大事起レリ、素

ヨリ兩國ノ交易ニ拘ハラス

貴國ノ政治ニ關係スルコトナルヲ以テ、未然ノ患ヲ憂

ヒ、始メテ

殿下ニ書ヲ奉ル、伏シテ望ム、此忠告ニ因リテ其未然

ノ患ヲ免レ給ハンコトヲ、

近年英吉利國ヨリ支那國帝ニ対シ兵ヲ出シテ烈シク戦

争セシ、本主ハ我國ノ船毎年長崎ニ至リテ呈スル処ノ

風説書ニテ既ニ知り給フナルヘシ、威武盛ナル支那國

帝モ久シク戦ヒテ遂ニ利アラス編者考フルニ、故ニ記ス所ノ

八年ヨリ二十二年ノ間廣東其他各所ノ戦ヲ云フナラン、本朝天保

七年ヨリ同十三年ノ間、有名ナル林則徐等モ此戦ニ死シタ

ト和親ノ約ヲナセリ、是ヨリシテ支那國古來ノ政法甚

タ錯乱シ、海口五所ヲ開ヒテ歐羅巴人交易ノ地トナサ

シム五所ノ地方ハ則チ廣東・福其禍乱ノ源ヲ尋ルニ、今ヲ

距ルコト三十年前歐羅巴ノ大乱治平セシ時寛政ノ比ニ當

國ニナボレオンリテ、仏蘭西ノ内乱ヲ攘ヒ自立シテ主

トナリタリ、是ニ於テ兵ヲ四方ニ出シテ諸國ヲ併吞セントス、歐羅巴

大ニ乱ル、文化十二乙亥ノ年諸國相謀リテ之ヲ擒ニシテ流寇シ數、

年ノ兵乱治平セリ、乙亥ヨリ今コトニ至リテ正三十二年ニ及ヘリ

諸民皆永ク治世ノ化ニ浴センコトヲ願フ、其時ニ當リ

テ古賢ノ教ヲ奉スル帝王ハ、諸民ノ為メニ多ク商売ノ

道ヲ開キテ民人蕃殖セリ、シカリシヨリ器械ヲ造ルノ

術及ヒ分離ノ術万物ヲ離合シテ其質ニ因テ種々ノ奇効ヲ発

明シ、人カヲ費サスシテ貨物ヲ製スルヲ得シカハ、諸

邦ニ商売蔓延シテ反テ國用乏シキニ至リス、中ニ就テ

武威世ニ輝ケル英吉利ハ、素ヨリ国力豊饒ニシテ民心

功智ナリトイヘトモ、國用ノ乏シキハ特ニ甚シ、故ニ

商売ノ正路ニ拠ラスシテ速ニ利潤ヲ得ント欲シ或ハ外

國ト爭論ヲ起シ事勢已ムヘカラサルヲ以テ本國ノ力ヲ

尽シ其爭論ヲ助クルニ至レリ、コレラノ事ニヨリテ其

商売支那ノ官吏ト廣東ニテ爭端ヲ開キ遂ニ兵乱ヲヒキ

起シタリ、支那国ニテハ戦甚タ利アラス、国人数千
人戰死シ、且ツ教府ヲ侵掠敗壞セラル、ノミナラス、数
百万ノ金ヲ出シテ火攻ノ責ヲ贖フニ至レリ、
貴国モ今亦此ノ如キ災害ニ罹リ給ハントス、凡ソ災害
ハ倉卒ニ発ルモノナリ、今ヨリ日本海ニ異国船ノ漂ヒ
浮ムコト古ヘヨリモ多クナリ行キテ、是レカ為メニ其
船兵ヲ出シテ

貴国ノ民ト忽チ争端ヲ開キ給ハンニハ兵乱ヲ起スニ至
ラン、コレヲ熟察シテ深ク心ヲ痛マシム、

殿下高明ニマシマセハ、必ス其災害ヲ避クル事ヲ慮リ
給フヘシ、我モ亦安寧ノ策アラシコトヲ望ム、

殿下聡明ニマシマスコトト曆数千八百四十二年天保十三年壬寅ノ
年ニ貴国ノ八月十三日、長崎奉行ノ前ニ於テ甲比丹ニ
讀ミ聞セタル令書ニ因リテ明カナリ、

令書ニ曰、異国船日本ノ沖合ニ渡リ来リシ時打払ヒ
方ノ儀オコソカニ取計フニ付、和蘭船モ長崎ノ外ヘ
乗寄ルコトアルマシクモ無之、船ノ形似寄リ候ヘハ
兼テ其旨相心得、不慮ノ過無〔竊カ〕之様心懸通船致スヘキ

旨文久八年申渡置候処、当時何事ニ依ラス御仁恵ヲ
被設候難有思召ニ付、外国ノ者ニテモ難風ニ逢ヒ漂
流等ニテ、食物・薪水ヲ乞ヒ候迄ニテ渡リ来リ候者
ヲ、其事情ニカ、ハラス一円ニ弓・鉄砲等ヲ打放候
テハ、外国ヘ対シ信義ヲ失ハレ候御所置ニ付、今ヨ
リ以後ハ異国船渡リ来候者食物・薪水ヲ乞フノ類ハ
打払ハス、乞フ旨ニマカセ帰帆可為致事ニ取計フノ
間、和蘭人共心安ク通船致スヘク候、外カ国ノモノ
タリトモ、ケ程マテモ信義ヲ厚ク思召難有儀ヲ能々
相ワキマヘ申ヘク候、

如此ク其書中ニ異国船ヲ厚遇スヘキコトヲ詳カニ載ル
トイヘトモ、恐ラクハ尚ホ未タ尽サ、ル処アランカ、
其主トスル処ノ意ハ、難風ニ逢ヒ或ハ食物・薪水ニ乏
シクシテ貴国ノ海浜ニ漂着スル船ノ処置ノミニアリ、
若シ信義ヲ表シ或ハ他ノイワレアリテ貴国ノ海浜ヲ訪
フ船アラン時ノ処置ハ見ヘス、是等ノ船ヲ冒昧ニ排シ
給ハ、必ラス争論ヲ開カン、凡ソ争論ハ兵乱ヲ起シ、
兵乱ハ国ノ荒廃ヲ招クモノナリ、二百余年來我國ノ人

貴国ニ留リ居リシ恩恵ヲ謝シ奉ランカ為メニ、貴国ヲシテ此ノ災害ヲ免カレシメンコトヲ欲ス、古賢ノ言ニ曰ク、災害ナカラシコトヲ欲セハ險危ニ臨ムコト勿レ、安静ヲ求メント欲セハ紛冗ヲ致スコト勿レト、

謹テ古今ノ時勢ヲ通考スルニ、天下ノ民ハ俱ニ相親ム者ニシテ、其勢ハ人力ノ能ク防ク処ニアラス、蒸氣船蒸氣船ハ水車ト蒸氣筒ヲ設ケ、石炭ヲ燒キ蒸氣筒中ニハ水ヲ沸騰セシメ、蒸氣ノ力ニヨリテ水車ヲ旋轉セシメ、風向ニ拘ハラス自由ニ進退スル舟ナリ、文化四年、創製セシヨリコノカタ、各国相距ル丁卯ノ年ニ創製セリ、

コト遠キモ猶近キニ異ナラス、此ノ如キ(虫損)好ミヲ通

スルノ時ニ当リ独リ國ヲ鎖シテ万国ト相親マス、人ト交ヲ結フコトヲ嚴禁シ給ヒシハ、歐羅巴洲ニテ遍ク知ル処ナリ、老子曰、賢者位ニアレハ時ニヨリ治平ヲ保護ス此意ニ当ルヘキ語、老、子ニ見ス、後考ヲマツ、故ニ古法ヲ堅ク遵守シテ、反テ乱ヲ醸サントセハ其禁ヲ弛ムルハ賢者ノ常經ノミ、是レ

殿下ニ丁寧ニ忠告スル所以ナリ、今貴国ノ幸福ナル地ヲシテ兵乱ノ為ニ荒廢セサラシメント欲セハ、異国人ヲ嚴禁スル法ヲ弛メ給フヘシ、コレ固ヨリ誠意ニ出ツ

ル所ニシテ我國ノ利ヲ謀ルニハアラス、夫レ平和ハ懇ニ好ヲ通スルニ在リ、懇ニ好ヲ通スルハ交易ニ在リ、冀クハ叡知ヲ以テ熟計シ給ハン事ヲ、此ノ忠告ヲ採用シ給ハント欲セハ

殿下親筆ノ返翰ヲ賜ハルヘシ、然ラハ又服心ノ臣ヲ奉ラン、此ニハ概略ヲ挙ル故ニ詳ナルコトハ其使臣ニ問ヒ給フヘシ、

我カ遠ク隔リタル貴国ノ幸福治安ヲ謀ランカ為メニ甚タ心ヲ痛マシム、コレニ加フルニ在位二十八年ニシテ四年以前ニ讓位セシヲ、父(ツイルム)微爾列謨第一世王モ遠行シテ悲哀ニ沈ミタリ微爾列謨第一世ハ安永元壬辰ノ年生レ、文化十癸酉ノ年ニ和蘭國ヲ興復シ、同十二己亥ノ年王位ニ封セラレ、天保十一庚子ノ年今ノ王ニ位ヲ讓リ、同十四癸卯ノ年卒セリ、癸酉ヨリ庚子年ニ至リテ在位二十八年、壽七十三ナリ、殿下又此等ノ事ヲ聞シ給ハ、我ト憂慮ヲ同フシ給ハンコト明カナリ、

此書ヲ奉スルニ軍艦ヲ以テスルハ

殿下ノ返翰ヲ護シテ帰ランカ為メノミ、又我カ肖像ヲ呈シ奉ルハ、至誠ナル信義ヲ顯サンカ為メノミ、其**余別幅ニ録スル品ハ、我カ封内ニ盛ンニ行ハル、学校(附カ)**

ヨリテ致ス所ノモノナリ、不精トイヘトモ我カ国ノ人
年来恩遇ヲ受ケシヲ聊カ謝シ奉ランカ為メニ献呈ス、
向來不易ノ恩恵ヲ希フノミ、世ニ普高クマシマセシ父
君ノ治世久シク、多福ヲ膺受シ給ヒシヲ眷佐セル神徳
ニヨリテ

殿下モ亦多福ヲ受ケ、大日本国永世疆リナキ天幸ヲ得
テ静謐敦睦ナランコトヲ祝ス、

即位ヨリ四年、曆数千八百四十四年二月十五日天保十
四年癸卯
年十二月二十天保十四癸卯十二月此書ヲ記シ、而シテ後
七日ニ当ル瓦刺汾法瓦和蘭ノ
都名ノ宮中ニ於テ書ス、

微爾列謨編者曰、天保十四癸卯十二月此書ヲ記シ、而シテ後
續シ彼國出帆、同十五甲辰七月初メ長崎ニ來ル、其
間凡四百余日稍十
三ヶ月ニ垂々タリ

「テスミニストル」ハンハンコロニエン」外
國

ノ事ヲ司ル
大臣ノ官名瑪陀

此ノ書意誠実ノ情義ヲ貫キタルヤ素ヨリ論ナシ、然
ルニ幕府ハ却テ猜疑ヲ懷キ、魯・英二國ノ名ヲ仮リ
私心ヲ達センカ為メナリトシテ、是ヲ斥ケサルモ其
実ハ稍斥ケタルモノナリ、幕吏ノ眼界狭小淺見ニ依
レリト謂フベシ、此時和蘭王ノ忠告ヲ信シ、尚ホ彼

ノ使臣ヲ請ヒ宇内各国ノ情況ヲ諮詢シ、而シテ況ク
宇内ノ交際ヲ開カハ國威ノ輝光期シテ見ルヘキモノ
アリシナリ、

四八三 大村藩ノ長崎報告

七月十七日

上略、長崎異変ノ儀承リ、夫ヨリ引返シ申候、荒増打
立馳出申候処、未右様ノ段ハ無御座候へ共、御先手物
頭中村源兵衛神田へ出張相成申候、長與村へモ物頭其
外出張着船相待居申候、段々世話敷時節ニ相成リ

太守様常式ノ御越有之、小弟モ御供仕候処、筑前落着
不申腰ヲ掛候心地ニ御座候、其外御国ハ不及申肥後嚴
重ノ事ニ御座候、定メテ御承知ニハ候へトモ一通リ申
上候、且又阿蘭陀ヨリ此節頼入候通詞ヨリ申出候風聞
ニ御座候、

着船ノ後ハ館中裏門通用、近在徘徊、帶劍、玉葉・武
具御取上無之御免被成下候様再三願出候、依之江戸御
伺ニ相成候由、色々申上度候へトモ、混雜ノ砌ニ候へ

ハ一通申上候、何レ相替儀モ有之候ハ、後便可申上候、右ニ付世上ノ騒キ彼是不任心底候、

二白、琉球ヨリ薩摩へ渡航ノ船海賊ニ逢候付、如何様阿蘭陀船ニテハ無之哉ト相尋候処、左様ノ船ハ別段無之由申立候由、

当時、本藩ノ船長崎・琉球近海ニオイテ海賊ノ為メニ物品ヲ奪ハレタリトノ風説アリ、近比支那近海賊船アリトノ説アルカ故ニ、藩庁モ注意シテ虚実ヲ搜索セリ、茲ニ記ス所モ果シテ同説ナラン、

四八四 齊彬公在琉佛人ノ情况探問

七月

齊彬公ハ和蘭国使節ニ付キ在琉佛人ノ情况探偵スヘキ旨ヲ命ス、因テ藩庁ハ長崎聞役奥四郎ニ密命ヲ伝フ、四郎ハ茲ニ於テ館入ノ通詞ニ依頼シ之ヲ探偵スルコト左ノ如シ、

当年三月琉球国へ渡来ノ佛蘭西船ハ、唐地廣東其外巡察或ハ海陸測量ノ為メ亞細亞諸島乘リ廻リノ由ニ

テ、既ニ上海ノ風説書ニモ相記シ候、何用向ニテ琉球国へ罷越シ候哉、其上唐人又ハ佛朗西人ヲ留メ置候哉ノ趣相尋候処、紅毛人申スニハ、琉球ハ日本通商ノ属国、殊ニ近海ノ事故近年中各国ヨリ日本へ軍船等差渡シ候手順ニ付、万一ノ時ハ抛リ所ノ地ト致シ候見込ニ可有之候、佛人ヲ留置候ハ追々渡来ノ折用弁ノ為メ遣シ置候ニ有之候、尤モ佛朗西ノミナラス、英吉利・魯西亞・亞米利加等兼テ日本ヲ望ミ居候国々ハ、佛朗西同様ニ追々琉球其外ノ属島へモ人ヲ遣シ、又ハ折々罷越スニテ可有之、外国ヨリ日本ヲ望ミ居候ニ付テハ、唐国ヨリ日本マテノ途中對島・壹岐・琉球諸島ヲ抛所ノ地ト可致候へハ御用心專要ノ旨申出、別段細カノ儀ハ存不申旨申出候、御内密此旨申上候、以上、

七月

御存ノ兩人ヨリ

服部様 清左衛門ト云フ長崎藩邸ノ用達ナリ

四八五 齊彬公密ニ銃砲兵書ノ購求ヲ試ム

齊彬公密ニ側役種子島時昉ヲシテ、使節船ニ就キ大小砲及ヒ兵書ヲ購求センコトヲ密命ス、時昉内書ヲ以テ国老調所廣郷・碓山久徳ニ告ク、廣郷等蘭學者相良〔運〕雲八藩ナル者ヲ派遣シテ謀ラシム、雲八通弁者等ニ密談シ和蘭人ニ談セシム、和蘭人曰ク、銃砲ハ船中備フル

所ノ官物ナリ、妄リニスルコトヲ得ス、若シ望ミアラハ来年渡来ノ国船ヲ以テ調進スヘシ、依テ玉目ノ大小及ヒ其数ヲ記シテ示サルヘシト大ニ喜色アリシト云フ又兵書四部ハ使節ノ所有ナリトテ之ヲ贈呈ス種子島時、昉日記

齊彬公ハ當時未タ国政ヲ執リタルニ非サルモ、時勢ヲ察シ彼ノ長ヲ採リ我カ短ヲ補フノ深意アルカ故、如此密ニ謀リ玉ヒシモノナリ、當時長崎ハ素ヨリ隣近ノ各地ハ目前戦争ノ開ケタルカ如ク、人心恟々浮説喧囂、甚シキニ至リテハ避乱ノ準備ヲナスモノアリ、長崎奉行ハ異事ナキヲ以テ鎮靜スヘキ旨ヲ論達ストイヘトモ却テ疑説ヲ起シ更ニ鎮定セス、近隣ノ大小各藩ハ昼夜ノ別ナク兵ヲ出シ或ハ軍器ヲ運搬シ、中国・四国ノ各藩事情視察ノ為メ出崎スルモノ多ク、加之使節ノ趣意

機密ナルカ故其事由ヲ知ル能ハス、浮説紛々人心寧居セス、二百年來昇平ノ化ニ浴シタル人民ナレハ、其雜踏騒然タルモ理ナキニアラサルナリ、

四八六 武器調査ノ令

七月廿一日

万石以下知行所海岸防禦ノ儀ニ付、武器・人数、手当等都テ右ニ拘ハリ候廉々、伺書・届書差出置候分、去々寅年ヨリ当九月上旬迄ノ分猶又一通ツ、相認、此節追々差出可申候、但絵図面等格別手数モ掛リ急速ニ難差出分ハ、追テ差出候テモ不苦候間、其認可差出候、

四八七 和蘭国使節船渡航ニ係ル書類通知

一 去ル戌年以來異国ノ風説承得候成行、阿蘭陀通事共ヨリ極内密ヲ以テ御役所へ申上置候書付ノ写一冊
一 阿蘭陀国王ヨリノ呈書江府表へ被差上置方ノ儀ニ付
一 伊澤美作守殿へ被差上越候書面写一冊
一 阿蘭陀本国船帰帆差急候付、「カヒタン」ヨリ申立

候書面和解四通相添、伊澤美作守殿ヨリ江府表へ被
候書付一冊

一此節使節船来着ニ付、長崎市中ハ勿論諸国風説雜説
等之義共聞合、実不実共ニ可申上越旨被仰付、走り
被仰付越趣有之、在勤長崎御付人奥四郎聞合書一冊
・書付一通

一右ニ付長崎御屋代服部清左衛門ヨリ聞合イタシ差出
候書付六通

一唐国戦争以後之次第ニ付皇帝ヨリ申立候書面真之物
一冊並右之和解一冊・書付一通

右之通在勤長崎御付人兼務奥四郎ヨリ極内々手数ヲ以
写取、追々申越候付差越候、尤右ノ書付ハ都テ笑左衛
門殿・將曹島津殿へハ時々同案ヲ以申出候段モ申越候
へ共、旁為御舍別紙六冊並相付書付十五通相添、此段
極御内用ヲ以申越候、以上、

辰十月二日

島津石見

島津主計

調所笑左衛門殿
赤松主水殿

右回答
〔知服カ〕
本文致承別紙扣置候、以上、

辰十一月三日

四八八 大和守伊澤美作守へ達

十月

阿蘭陀国王書簡並貢獻物ノ儀ニ付委細被申越候趣令承
知候、彼船帰帆差急候段入 御聽候処、海上旬季等有
之難儀之段尤ノ筋候間、早々帰帆候様被仰出候、且ツ
書簡ハ当地へ未不相達候へトモ、御為筋ノ儀申上候趣
ニモ候間、御披見有之候ハ、御満足之儀ニモ可有之候、
貢獻物ハ海外ノ諸州ヨリ御受納無之御国法候間、其旨
申論候様可被致候、且使節其外ノ者共へ為御手当相応
ノ品致勘弁、遠海渡来太儀ノ段、御沙汰ノ趣ハ追テ在
留ノ「カヒタン」へ相達ニテ可有之旨可被申渡候、
右之趣、論書相認横文字相添可被相渡候事、

辰十月九日

四八九 大和守大目付・目付へ達

十月九日

当七月中長崎表へ阿蘭陀国ヨリ使節軍船一艘渡来書簡差上候、右大意へ、外国通商相願候儀ヲ申立候マテニテ、外別条ナキ事ニ候、世上ニオイテ彼は雜説モ可有之哉候間、心得罷在候様向々へ無急度可被咄置候事、

調所笑左衛門殿

赤松主水殿

右回答

本文致承知候、以上、

辰十一月三日

島津石見

四九〇 和蘭国使節船実況見聞ニ係ル照会

琉球登船々等イマタ着船無之、先便追々申越通ニテ其後何モ相替儀無之候、且此節阿蘭陀ヨリノ使節船長崎へ渡来ニ付テハ、琉球へ来看ノ異国船同類ノ船モ難計、折柄異国船掛書役田中猪三次・井上源五左衛門儀、先達テ朝鮮国漂流人請取方トシテ出崎被仰付候付、船形人物旁見届申越候様申付越候処、去ル二日致帰着、使節船へ内分乗付見分ノ成行細々申出候へ共、右ノ趣ハ在勤御付人ヨリ其許へ委細申越管之段申出候付、別紙ニ不申越候、此段為御心得御内用ヲ以申越候、以上、

四九一 和蘭国使節船渡来ニ係ル堀大和守達送付

当七月中長崎へ阿蘭陀国使節軍船一艘渡来書簡差上候大意へ外国通商相願ヒ候儀ヲ申立候マテニテ、外ニ別条ナキ事ニ候、世上ニオイテ彼はレ雜説モ可有之哉ニ候間、心得罷在候面々へ無急度可被咄置トノ趣別紙ノ通り御口達写堀大和守様ヨリ被仰渡候付、達

貴聞向々へ申渡シ、御留守居首尾書共相添へ此段申越候条被致承知、向々申渡ノ儀ハ何分モ可被申談候、外国通商御免有無ノ儀第一御互ニ心得相成候事ニ付、御留守居等へ極密聞繕方申渡置候へトモ、此節之儀ハ於

公辺モ至テ御秘事ノ趣ニテ未承得段、追々申出候趣意
相分り次第早便ヨリ申越候様可致候、将又右ノ通之被
仰渡ニハ候ヘトモ、御手当向ノ儀ハ矢張是迄ノ通り、
何事モ弥々嚴重ニ被取計度儀ト存候、此段モ申越候、
以上、

辰十月十二日

赤松主水

調所笑左衛門

島津主計殿

島津石見殿

菱刈安房殿

島津登殿

猪飼央殿

右回答

本文致承知向々へ申渡、異国船御手当向ノ儀モ相達

別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

十一月五日

四九二 水戸藩士武田彦九郎老侯ノ冤ヲ訴フ

十月二十日

前中納言殿在國中御用モ有之候間、一旦参府被致候様
当四月被

仰出候処、御用御座候共格別之御儀ニモ被為在間敷、
乍併昨年厚

御称美モ御座候儀故、何レ吉兆ニ可有之ト家中彼是評
判仕候処、参府翌日嚴重ニ被

仰出候段家中一統仰天悲歎仕候、右様御手輕参府被

仰出候テ、嚴重ニ被

仰出候ニテ奉推察候へハ、乍恐深キ御疑ニテモ可被為
在様ニテ当家ノ瑕瑾無此上、第一家中共一日モ相安シ

兼候仕合ニ御座候へ共、被

仰出候趣ニテハ驕慢並制度觸候トノ御沙汰有之、猶一

統疑惑仕候、私儀

中納言殿相統翌年目付被申付、追々小姓頭相勤、其後
一昨年迄若年寄相勤候間

中納言殿

公辺へ御忠節之志深ク御座候段ハ委細相心得罷在候、
先ハ其一年ヲ申上候、

中納言殿在國中礼服ニテ江戸表ノ方へ被向

公方様遙拜被致、次ニ

峯壽院様同様遙拜被致候儀毎朝怠リ不被為在候段、側
向並奥向ノモノ一同承知仕居候儀、瑣細ノ事ノ様ニハ
御座候へ共、御推察被為在候様奉存候、御制度ノ儀ハ
何等ノ御品ニ可有之哉相弁不申候へ共、水戸表ノ儀ハ
先代ヨリ儒道被相用、代々葬祭モ

公辺御振合ニ異同仕居候儀ハ、今ニ始リ候儀ニ無御座
候、薩州ニテ一向宗制禁ノ由、会津ニテハ神道相用ヒ
候由ノ類、

公辺御振合ト異同仕居候儀ハ、水戸表ノミニ限り候儀ニ
テモ無御座候様奉存候、此度御察度モ右等ノ類ニハ有
御座間敷哉、扱御察度モ御座上ニテ、押テ相行ヒ候
へハ相済申間敷候へ共、

中納言殿氣質

公辺ヨリ御察度御座候儀ヲ、押テモ相用候様ノ義ハ無

之、是又私共年来明白ニ相心得候儀ニ御座候、此度之
如キ被

仰出

源威殿以来例モ無之処、一応之御尋モ不被為在、俄ニ
被仰出候段臣下ノ身分誠ニ以テ驚入悲歎仕候、水戸表
数十万人士民ノ内ニハ、改正好候モノ計モ無之候へハ、
右ノモノ共彼是風評申立候ヨリ右等ノ御調へニモ相成
候半欵、此度家老共夫々御咎メ相成候モノ、内、御除
ニ相成候結城寅壽儀ハ、一昨年比ヨリハ第一取計、次
ニ戸田銀次郎、次ニハ鶴殿平七儀ハ極老、殊ニ耳遠ニ
テ日々之出仕モ用捨被致、月番モ全クハ相勤不申処、
却テ平七儀重キ御咎メ被

仰付、寅壽儀ハ何ノ御沙汰モ無之ヲ以テ奉推察候へハ、
畢竟風評御取用ニ相成候様ニ相成候様ニモ疑惑仕候、
家老共ノ儀ハ幸不幸御座候申上候筋無御座候へ共、
万々一右ノ如キ

中納言殿行状ニモ種々行違候儀入

御聴候テハ残念至極奉存候、御趣之筋被為在候ハ、

一々ケ条ヲ以テ備後守始へ御尋ニ仕度奉存候、備後守

十一月三日

始役人共空敷苦心仕候趣ニハ相見へ候へ共、私乍不当
表方ニハ罷在候迎、幸ニ黙止罷在候テハ相濟不申、殊

上納金被 仰付候へ共近年諸国作物不宜、西丸炎上ノ
節上納金御手伝被 仰付、其後御普請・御修復等ニテ
御手伝御用数度、且又公役繁ク被 仰付候折柄ノ儀ニ

ニ家中志御座候モノ一統疑惑仕居候儀ヲ言上不仕候テ
ハ不相濟ト存、詰重役共へモ不申立、同役へモ相談不

付、此度格別ノ思召ヲ以願ノ通ニハ不及上納、一万石
ニ付金五百両ノ割合ヲ以テ上納被 仰付候、左候上ハ

仕、一己ノ了簡ヲ以出府仕此段奉愁訴候、心事所詮認
取兼候間、御直ニ御尋ニ相成候へハ、不敬ノ罪ハ如何
様被

面々文武心掛、手当等は迄ヨリモ一際厚ク引立候様ニ
トノ御沙汰ニ候、納方ノ儀ハ三ヶ年ニ割合可致上納旨
被 仰出候、

仰付候共、本懐ニ奉存候、以上、

十月廿日

武田彦九郎

右武田彦九郎ハ八百石ヲ領シ馬廻番頭ナリト云、

四九五 琉球渡海ノ役人心得方照会

四九三 文政鑄造ノ草字二分金等停止

長崎へ渡来ノ阿蘭陀本国ヨリノ使節並「カヒタン」其
外紅毛人、先月十日長崎御役所へ御呼出ニテ、御奉行
衆・御目付衆・組頭衆御立合其外役々出席ノ上、書簡

十月廿九日

文政中鑄造草字二分金・二朱銀・一朱銀ノ通用ヲ停止

之条々篤ト御熟覽ノ上追テ

ス、

仰出サルヘキ事ニ候、依之旬季相後レサル様可致出帆

トノ趣共被致、品々拝領物等被

四九四 本丸造営費減額上納方

仰付候由、左候テ御付人御呼出ノ上、使節船近々長崎

港出帆ノ筈候ニ付、御領内浦々先規之通取計有之候様

御国元へ可申越被相達、且又右船万一モ御領海ノ内へ

碇ヲ入レ候テ薪水等相乞候共、繫留置相応ノ御手当有

之候様トノ趣共是又相達候ニ付其許へ大宿継至急報ヲ云フ

以テ申越候段、奥四郎ヨリ申越、今日相達候ニ付、自

ラ委細御承知、夫々御手当等モ無手拔為被取計賦ト存

候、右ニ付テハ先達テヨリ追々奥四郎申越候内ニハ、

琉球表渡海ノ面々琉球在動ノ吏員ヲ云フ第一心得ニモ可相成ケ条モ

可有之、追々下り船々出帆ノ時節ニ候間、心得相成候

ケ条ハ早下り船鹿兒島ヨリ琉球ニ行クヲ云ヨリ被申越候テハ何様可有

之哉、尤モ道之島大島・徳之島・沖永良部・与論各島ノ總稱下り早船モ可有之

候ニ付、同案ヲ以被申越、島次道之島伝達之通唱等ニテ差遣候様

被取計、如何可有之候哉、自ラ右之通御取計疾クニ為

有之筈、旁差過候儀ナカラ此段御心得旁申越候、以上、

辰十一月三日

赤松 主水

調所笑左衛門

島津主計殿

島津石見殿

菱刈安房殿

島津 登殿

猪飼 央殿

右回答

本文致承知候、爰許へモ奥四郎委曲申越候ニ付、御

手当向等ノ儀ハ十月十五日便申越候通ニ候、右ニ付

テハ琉球渡海ノ面々心得ニモ可相成儀有之候ニ付、

追々琉球へ申越置候、此旨及御返答候、以上、

十二月二日

四九六 廣大院殿薨去

十一月十日

従一位廣大院殿文恭院殿御台所薨去、普請ハ来ル十六日マテ、

鳴物ハ二十六日マテ停止、十九日未ノ刻増上寺へ葬ル、

廣大院殿ハ第二十五世従三位重豪公ノ第一女ニシテ、

近衛忠煥公ノ養女子トナリ將軍家齊公ニ結婚、母ハ府

下ノ士市田貞行喜内ノ女ナリ、

四九七 水戸中納言ノ謹慎宥免

十一月十六日

水戸少將殿へ先達テ中納言殿御隱居被 仰出候処、御

慎深被成御座候段、達

御聽候、此程別段ノ 思召ヲ以テ御慎御宥免被

仰出候、

水戸中納言ノ慎ヲ解クモ猶ホ藩政ニ与ルコトヲ許

サス、是ヲ以テ藩内士民末々安ンセス、曩ニ幽禁

ノ命ヲ伝フルヤ、其或ハ叛状アルコトヲ疑フ者ア

リ、然レトモ其謹慎甚至レルヲ以テ、稍々罪ナキ

ヲ悟ル故ニ此命アリト云フ、

齊彬公ハ曾テ水戸齊昭公ト懇交ナルカ故、同邸ヨリ内々

通知アリシヲ以テ、即日側役ヲ以テ恐悦ヲ表セラレタリ

種子島時、
昉日記

四九八 改元勘文

十一月廿一日

弘化 嘉徳 萬安

萬延 文久 嘉永

嘉延

弘化 晋書曰、聖德格于皇天威靈被
千八表弘化已觀六合清蒸

嘉徳 春秋左氏伝曰、上下皆有嘉徳而無違心、
史記曰、長承聖治群臣嘉徳

萬安 呂氏春秋曰、天下太平万物安寧
礼記曰、義生然後礼作礼作、然後万物安

萬延 後漢書曰、豐千億之
子孫、歷万載之永延

文久 史記曰、文武並
用、長久之術也

嘉永 宋書曰、思皇享多
祐、嘉樂永無央

嘉延 文選曰、寤寐嘉獻延行忠美芸
文類聚曰、日祥風協順降祉自天方偶清謹嘉祚日延

与民優游享寿万年

年号改元弘化タルノ旨被

仰出候間、山城國中へ可相触モノ也、

十一月廿一日

四九九 和蘭船渡来ニ係ル書類送付

一 阿蘭陀国王ヨリ使節船ヲ以差上越候書簡ノ大意、通詞

共承得候書付三通

一右使節船へ乗組ノ者共、来年又々渡来可致トノ旨申置

出帆致候風聞、通詞ヨリ承合候書付二通

一右使節船一条且佐賀様ヨリ使節並士官等へ御挨拶、其

外段々承得候書付一冊

〔關カ〕
一奥東義勇檄文一冊

一右ノ和解一冊

一右ニ付長崎御付人ヨリ申越候書付一通

一本国船和蘭使節
船ヲ云フ一件之一冊並御付人添書一通

右旁在勤長崎御付人奥四郎極内承得申越候付、其元へ

モ為申越由候へ共、為御見合都合十一通相添此段御内

用ヲ以申上越候、以上、

辰十二月朔日

島津石見

調所笑左衛門殿

赤松主水殿

右回答

本文致承知別冊扣置候、以上、

辰十二月廿九日

五〇〇 改元令

十二月二日

改元藤波家ヨリ

伊勢太神宮司へ被遣文

下、可早令承知改元事、

右今月二日、改天保十五年為弘化元年、此旨且存知且令相触神宮、弥可抽宝祚長久・国家安全之懇祈之状、如件、以下、

弘化元年十二月二日

祭主正四位下行神祇士副兼右兵衛權大佐中臣朝臣判

右ハ本年五月十日日本丸炎上ニ依リ宣下アリト云フ

左ニ京都留守居役山田市郎左衛門清安ノ報知書ヲ

掲ク、

去ル二日年号改元御座候テ弘化元年ト被改候、翌日

去ル方ヨリ内通ニテ

詔書拜見仕候、長文ニ候へハ、都テハ得不申上候へ

トモ

頃年武藏国言城中有災、今年又聞遭祝融崇、此城也、国之要害、朝之重鎮有災、是誰謬欤、靈譴不
虚咎在

朕躬爰尋繹先蹤、奉遵旧典、革紀念之号敷、在有之沢、其改天保十五年為弘化元年、上下略弘化元年十二月二日

右之通ニテ前後ハ大概御例文ニテ候、左候テ官家ハ即日ヨリ右年号御用ニ候へ共、武家ハ関東ノ御沙汰ヲ相待申事ニ候、

十二月十三日

年号改元 宣下ノ旨被仰出候ニ付、惣出仕、

五〇一 江戸本丸城造営費献納ニ関カル藩情^[ナリ]

江戸本丸城造営費献金ノ事アリ、幕府ノ威権之ヲ見テ其一端ヲ知ルニ足レリ、高割ニシテ三万五千兩ヲ表面ノ納額トシ、十一万余兩ハ内献ト唱へ全ク藩庫ヨリ出シタリト云フ、左ニ鎌田正純ノ日記ヲ掲ケ参照ト為ス

○以下の文書は、第四六五号文書の一部と同文により略す。